Tokyo王子

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｏｋｙｏ王子

【Ｎコード】
Ｎ６３７４Ｏ

【作者名】
御堂志生

【あらすじ】
？コージュ・アルフレッド・エインズレイ・カノウ？――彼は、今は亡き王妃が産んだ唯一の息子、トーキョー王国が誇る第四王子だ。間もなく二十歳のコージュ王子には、一歳年上の兄が三人いた。四人の王子は平等な立場にあり、近い将来、誰かが王太子に選ばれることが決まっている。そして……王室秘書官・第四王子秘書を務める二十五歳のアリサは十四年前にコージュ王子に出会った。その時『王子のお友達』に選ばれた彼女は、以来ずっと彼の傍にいる。五年前に二人の関係が変わった後も……。だがそれは？永遠？には

なりえない二人だった。

第1話　祝賀パレード（前書き）

★人物や国名・団体・施設などの名称は、全て架空のものです。実在のものとは一切関係ございません。

★更新は不定期です。

第1話　祝賀パレード

四月一日、ここトーキョーシティでは毎年恒例のパレードが行われる。
それは、トーキョー駅から王宮までのごく短い距離だ。しかし、国中から人が集まり、一年でシティが最も賑わうと言われる大人気の行事であった。

それもそのはず、四月はこのトーキョー王国最大のスターたちの誕生月なのだ。
そう、四人の女性から産まれた、四人の王子（プリンス）たち。今日は、トーキョー王国の未来を担う、四王子のバースデー祝賀行事開催日当日だった。

☆。・‥＊‥・　。★　。・☆。・‥＊‥・　。★　。

『ご覧下さい。詰め掛けた人の波で、王宮前広場は飲み込まれてしまいそうです！』

某大使館の貴賓室、或いは一流ホテルのスイートルームによく似た部屋である。
使われていない石造りの暖炉があり、その前にロココ調のソファセットが一つ。奥に進むと段差があり、一段下のフロアにはもう一つ、ゆうに十人は座れそうなソファセットがあった。
正面の窓際には四十二型のプラズマテレビが一台、声はそこから

流れている。

テレビの近くにサイドボードがあり、その上にはウェッジウッドの傑作、ペールブルーに艶めくジャスパーの時計が置かれていた。金色の針は三時を指している。

部屋の南側に配置された大きな窓は、分厚いカーテンで隙間なく覆われていた。

まるで、午後三時の陽光が射し込むのを阻むかのように。そのせいで室内は薄暗く、どこか空気も澱んでいる。反面、テレビの周りだけが妙に華やいでいた。

『この日の為に綺麗に飾り付けられた六頭曳(ひ)きの儀装馬車には、三人の王子がお乗りになられています。残念なのは、この場に第一王子トーヤ・アベル殿下がいらっしゃらないことでしょう』

明日、二十一歳になる第一王子は、五年前の自動車事故で重傷を負った。それ以降、公の場に姿を見せていない。王室報道官は、「トーヤ王子は順調に回復に向かわれております」のコメントを五年間続けている。

それに関して、一部のマスコミは疑惑の声を上げた。だが、王室が何の報道規制も掛けないことから、杞憂であろう、と話は落ち着いていた。

『今、第二王子クロード・アダム殿下が右手に指揮刀(サーベル)を持ち、高く掲げました。国民の祝意に応えたようです！』

黒い髪を短く刈り上げ、いわゆるスポーツ刈りにした一見して好青年だ。
馬車に乗った三人の中で一番大柄である。アイスホッケーのトーキョー国代表でもある彼は、スポーツを通じて子供の人気が高い。派手なパフォーマンスを得意とする所以であろう。
クロード王子は一週間後、二十一歳の誕生日を迎える。

『街道の女性たちから一際大きな声が上がりました。第三王子シオン・アーサー殿下が軽く右手を挙げ、彼女らに……なんと投げキッスをした模様ですっ！』

王族は国際結婚が多い。そのせいか、シオン王子には北欧系の血が色濃く出ていた。
肩まである銀髪（プラチナブロンド）を靡かせ、狼の色と言われる琥珀（アンバー）色の瞳で甘やかな微笑みを投げかける。
写真集が飛ぶように売れるというくらい、女性に人気の高い彼は、今月末に二十一歳となるのだ。

『一方、腰を下ろしたまま……悠然と周囲を眺めつつ、にこやかに手をお振りになるのが第四王子コージュ・アルフレッド殿下です。亡き王后陛下も、間もなく二十歳を迎えられる殿下のお姿を見て、さぞやお喜びでしょう！』

ブルーブラックの髪と黒曜石の瞳。穏やかで潔癖な性格をしており、誰にも等しく優しい。老若男女問わず、四人の王子の中で一番人気があるのがこのコージュ王子であった。

彼は十日後、二十歳になる。コージュ王子だけが、丸一年、兄たちと生まれが違うのであった。

『――本日の午前中に行われた、祝賀パレードの様子をご覧頂きました。今年はコージュ王子の記念すべき二十歳の誕生日ということで、盛大に催されておりますが……。午後六時より、王宮大広間で晩餐会のご予定とのことです。さあ、ではここで、正午から行われました祝賀記念式典の様子を――』

無人のリビングルームに、ワイドショー番組の「王室特番」が流れ続ける。そんなテレビの更に奥、クリーム色の両開きの扉があった。今は、片側の扉だけ開かれたままだ。

その中で行われていることは……。

☆。・：＊：・。★。

部屋の中央、ヘッドボードが壁に設置され、そこにクイーンサイズのベッドがピタリと寄せられていた。華美な装飾はなく、リビングに比べるとかなりスッキリしている。カーテンは同じように閉じたままだ。木製のデスク、本棚、オーディオセット、三人掛けのソファとガラステーブルがあり、床に敷き詰められたペルシャ絨毯の上には衣服が散乱していた。

ベッドの向かい側に扉が三枚。ウォークインクローゼットとバスルーム、そしてトイレである。

絨毯の上に散らばるのは、主に女性用の衣類だ。それも、淡いブルーのイブニングドレス、ビスチェにシルクのパーティシューズが転がる。ベッドのすぐ横には真っ白な塊が……女性の下半身を隠すのに最低限の面積しかなさそうな代物だろう。

ソファの背に掛けられているのは、トーキョー王国陸軍の軍服だ。袖には太い金の三本線、襟章も金地に銀の星三つ、胸には国王陛下より賜った勲章を付け、腰にサーベルを佩刀（はいとう）する。それが、この部屋の主の正装であった。

直後、ベッドが一際大きく軋み、女性の啼き声が室内に響き渡った。完全防音でなければ、庭を警備する衛兵にも聞こえたことだろう。

――終わるなり、男はベッドから下りた。その上半身には、白いシルクのドレスシャツを着たままである。だが、質が良いのか激しく動いた割には皺の一つもない。

男は、オーディオセットの下にある小型の冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、ペットボトルに口を付けて飲んだ。

そのままつかつかと男は窓際に歩み寄り、カーテンを少しだけ開ける。

北側の窓からは降り注ぐほどの陽射しはなく、それでも、淡い光が男の顔をくっきりと浮かび上がらせた。

それは男と言うより少年と呼ぶに相応しい容姿だ。

若さのせいか頬のラインが幾分柔らかく、引き締まった口元を際立たせていた。線を引いたような眉も、濁りのない黒い瞳と対になり、絶妙なバランスを醸（かも）し出している。身長は公称一七七センチだが……プラスマイナス二センチの誤差は許容範囲と言えよう。

彼は四人の王子の中で、唯一王妃が産んだ息子。

この部屋の主とは――清浄かつ潔白と誉(ほま)れ高い、第四王子？コージュ・アルフレッド・エインズレイ・カノウ？であった。

第1話　祝賀パレード（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

タイトルに悩みました。「東京王子」にしたら地名が検索されるし…「東京プリンス」だとホテルが出てきます（苦笑）

後、ちょっとした気分で作者名を変えてみました…

でも、作者名を押したら作品一覧で出るのかな？だったら一緒ですね（＾＾；）

それから私には珍しく、見切り発車です。

と言いつつ、４章で構成して４０話以内では終わらせるつもりです。

よかったらお付き合いくださいませｍ（＿＿）ｍ

第2話　あぶない王子

第四王子秘書官であるアリサ・シンザキは、くたびれ果てた身体をどうにか起こした。

記念式典が終わったのが一時過ぎ、軽く昼食を取り、休憩に戻ったのが二時近くだ。それから、僅か一時間ちょっとで三回である。これでも、コージュ王子にすれば充分ではないという。彼が満足するまで付き合うとなると……。

アリサはいささか、気が遠くなった。

シャワーの音が止み、すぐにバスルームの扉が開く。

コージュ王子が腰にバスローブを巻いただけの姿で出てくる。その手にバスタオルを持っているのだが……何度言っても濡れた体を自分で拭こうとしない。アリサは倦怠感の残る身体を励ましながら、ベッドから下りるのだった。

「殿下……しつこいようですが、絨毯がびしょ濡れになります」

「放っておけば乾くだろ？　元はと言えば、一緒にバスルームに入らなかったお前が悪いんだ」

入ったら入ったで、バスルームで四回戦が始まることは間違いない。普段ならともかく、この一連の祝賀行事の段取りで、アリサは一ヶ月休みなし、一日睡眠四時間で働き詰めだ。二十五歳は秘書官の中では最も若いが、プラス、王子のお相手となると楽ではない。

アリサはシーツを身体に巻き、コージュ王子に近づいた。彼の手からバスタオルを受け取ると、丁寧に王子の体を拭き始める。

日増しに胸板は厚くなる。二の腕も太腿も筋肉がつき始め、十五

歳の頃に比べたら逞しさは雲泥の差だ。王子自身はそれほど伸びない身長を気に病んでいるようだが、決して低くはないと思う。

コージュ王子は、スキップで王立大学大学院を卒業し総合文化研究科で史学博士号を取得している。だが現在の身分は大学生だ。もちろん十八歳になると同時に、慣例により陸軍大将に任命されたので、公式にはこちらの身分が優先である。だが、名誉称号なので、実際に軍を指揮することはないだろう。

王子が大学に通う理由として、「王室の一員として、また一人の人間として、視野を狭めない為にも同年代の友人と共に大学生活を送りたい」とのこと。公務の合間に真面目に大学に通う姿は、聖人君子の如く囁かれ、評価されていた。

その本音が「どうせ退屈な公務が増えるだけだろ。まだ学生のほうがマシってもんだ」で、あることはアリサしか知らない事実だろう。

「アリサ、晩餐会までには復活しろよ。食事の後は、厄介なダンスパーティだ。また、貴族の女たちに囲まれるに決まってる。頃合を見て、秘書官のお前が追っ払ってくれ」

「しかし殿下。本日は、殿下の為のパーティでございます。ダンスのパートナーは二十八番目のご令嬢まで順番が決まっておりますので……」

「二十八だとぉ？　くそったれ！　何曲ワルツを踊れってんだよ。しかも、どいつもこいつも下手くそな連中ばっかりなんだ」

「……頑張って下さい」

「ご褒美が貰えるなら、頑張ってやってもいい」

そう言うと、コージュ王子の目がキラリと輝いた。

アリサは嫌な予感に囚われる。

「ダメですよッ！　今はダメです。殿下がドレスを着て来いとおっしゃるから着て来ましたのに、すぐに脱がしてしまわれて……。これから髪を整えて化粧も直して、晩餐会の打ち合わせに行かなきゃならないんですからっ」

アリサが壁の時計を見上げると、もうすぐ四時だ。四時半までには行かないと、王室首席秘書官のアソウがうるさい。

「しょうがねぇな。じゃあ、今夜な」
「こっ、今夜、ですか？」
「どうせ部屋は隣だろ？　がたがた言うなら、このまま押し倒すぞ」
「ダメですってば！　判りました。パーティが全て終わった後でよろしいですね？」
「ああ……それまでは、コレで勘弁してやる」

むき出しの肌に抱き締められ、アリサは熱いキスを受け止めていた。

やれ？聖人君子？だの、？清廉潔白？だの、アリサの知るコージュ王子とは程遠い肩書きのオンパレードである。いつか化けの皮を剥がしてやる、世間に言いふらしてやる、と思うのだが……多分そんな日は来ないだろう。

なぜなら……十四年前の春、アリサは王宮の庭でコージュ王子と出逢ってしまった。

その時から、彼女はプリンス・コージュの虜なのだ。初めはもちろん恋ではなく、幼い少年に向けた同情とも愛情とも言えるものだった。

それがハッキリ形になったのが五年前――。

二十歳のアリサは十五歳の王子（プリンス）と、？誰にも言えない関係？になってしまったのだった。

☆。・　・：＊：・　・　。★

アリサの父マサヤ・シンザキは王宮の車両部に勤めている。王族専用リムジンの運転手だ。現在は、国王陛下専属のベテランドライバーであった。

その昔、王宮は子供の出入りを禁止されていたという。中々子供に恵まれない王妃を気遣ってのことと言われるが、真相は定かでない。

だが二十年前、王妃がコージュ王子を出産直後に亡くなるという悲劇が起こる。国王夫妻はそれはもう仲睦まじい夫婦で、王妃を失った国王は片翼を失くした鳥のようであったという。そして、コージュ王子が六歳になった頃、国王は使用人の子弟をこぞって王宮に招くようになった。

公式発表では――兄たちが初等科に入学して、独りになったコージュ王子の為の？ご友人？選び――となっている。

当初、アリサもその中の一人に過ぎなかった。

使用人であるから身分は当然平民だ。しかし、全員が代々仕える家の人間で、身元はハッキリしている。アリサの家も記録上は五代前まで遡って王家に仕えていた。記録がないだけで、多分それ以上だろう。彼女自身、将来は女官か事務官として働くことになるんだろうな、とボンヤリ考えていた。

その日、三姉妹の長女である十一歳のアリサは、八歳と六歳の妹

を連れて王宮に上がっていた。
「本当は十歳くらいまでの男の子がご希望らしい。プリンス・コージュの遊び相手になり、将来は親衛隊になるような少年がね」
父はアリサにそう言って笑った。それを聞いていた八歳の妹エリカは「じゃあ、あたし、王子様のおよめさんになる！」そんな無邪気な言葉を口にした。
「バカね。プリンスのお妃には、貴族の子供がなるのよ。それか、外国のプリンセスがお嫁に来るの。わたしたち運転手の子供に出番はないのっ」
アリサは偉そうにそう叱ったのだった。

三姉妹は小学校の制服を着て、王宮の小広間に集められた。それでも、子供だけで四～五十人はいただろうか。国王陛下の謁見は叶わず、側近と呼ばれる男性が現れ、その場を取り仕切っていた。そして王子様は、トーヤ王子、クロード王子、シオン王子と姿を見せたのに、肝心のコージュ王子はとうとう出て来なかったのである。
集められた中で、アリサは最年長の一人であったと思う。しかも、三人の王子の許に呼ばれるのは、同じ年頃の少年がほとんどだ。父の言葉は正しかったのだ、とアリサは思っていた。
広間に用意されたお菓子や文具、おもちゃは高級そうで見慣れない物ばかりだ。しかし全てが低学年向けで、年長のアリサは次第に退屈になる。

アリサは、トイレに行く、と言って部屋を離れ……その途中、満開の桜につられて王宮の庭に出てしまう。
その桜の木の下で、彼女は一人の少年と出逢ったのだった。

第3話　王宮の出逢い

「ねえ、どうしたの？　迷子になったの？　それともお腹が痛い？」
桜の傍でしゃがみ込む少年にアリサは駆け寄り、声を掛けた。
だが、少年は背中を向けたまま振り向こうとしない。
「わたしはアリサ・シンザキ。お父さんが国王陛下のドライバーなのよ。あなたのお父さんは誰？　お姉さんが連れて行ってあげるわ」
アリサは完璧に、同じように招かれた少年だと思い込んでいたのだ。
「こんなとこにずっと居たら怒られるわよ。そしたら、あなたのお父さんやお母さんに迷惑を掛けるんだから」
しつこく声を掛けるアリサに、少年はやっと顔を向けた。
瞬間、アリサはその天使のような顔立ちに息を飲んだ。ひょっとして少女だったの、と思うくらい可憐で美しい。だが、サスペンダー付きの半ズボンを穿き、シャツやスニーカーもブルーだ。服を見る限り、男の子に間違いないだろう。
その直後、少年の足元に転がる物体を見て、アリサは仰天した。
「なっ……ちょっと何してるの？　それって犬？　子犬じゃない。何なのそのセロハンテープはっ」
生後一ヶ月かそこらの子犬だろう。犬種はおそらく、盲導犬や介助犬で有名な黒のラブラドールレトリーバーだとアリサにも判った。

なんと、その子犬の口を透明なセロハンテープでグルグル巻きにしてある。子犬は転がってジタバタしているが、口を閉ざされているので鳴くことも出来ない。

「あ、あんた……何やってんのよ。可哀相じゃない！」
「うるさい！　僕に逆らうと、お前の父親をクビにするぞ」
「……何言ってんの？」
「弱い奴はイジメられるんだ。それが普通だよ。イジメられたくなきゃ、噛み付けばいいんだ」

少年は子犬を小突きながら「ホラ、怒ってみろよ」とか言っている。
アリサは頭に血が昇り「止めなさい！」と叫びつつ、少年の頬を打った。？バチン？と意外に大きな音がして、叩いたアリサ自身もびっくりする。少年も驚いた顔でアリサを見上げた。

「その……子犬の代わりに叩いたんだからねっ！　弱いものイジメなんて最低！　あんた、自分がどれだけカッコ悪いか判ってるの？
今からそんなじゃ先が思いやられるわっ」
「僕を、叩くなんて……」
「悪いことしたら怒られて当然でしょ！」

そう言い返しつつ、内心、アリサはこの少年が父の上司の息子でないことを祈った。
だが、悪いことは悪いことなのだ。小さい子供にそれを教えるのは年長者の義務である。長女らしい責任感と正義感を発揮しつつ……。

「叩いてゴメンね。でも、叩かれたら痛いでしょ？　自分が蹴られたり突かれたり、テープなんか巻かれたらイヤじゃない。だから、

自分がされてイヤなことは、人や動物にしちゃダメなの。判った？」
「……」
少年の頬が薄っすらと赤くなったのを見て、アリサは思わず謝る。泣かれたら困るな、と思ったが、少年は歯を食い縛りアリサを睨んだままだ。
アリサはばつが悪くなり、屈んで子犬のテープを剥がし始めた。
その直後、建物の方向から数人の大人が走ってきたのだ。
「殿下！　コージュ殿下！　こちらにおいででしたか」
大人たちの台詞を聞き、アリサが凍りついたのは言うまでもない。

☆。・：＊：・。★

（あの後も大変だったのよねぇ……）
コージュ王子の部屋の隣に位置する自室に戻り、メイクを終えてアリサは廊下に出る。
淡いブルーのイブニングドレスはなるべく目立たぬよう、派手な装飾を取り除いたシンプルなデザインだ。ただ、この手のドレスは大幅に肌を露出する。念入りにチェックはしたものの、先ほどの名残がないかアリサは心配だった。
アリサは噂の第四王子との初体面で、ビンタを食らわせてしまった。それがバレたら……父は王宮をクビになるかも知れない。どきどきのアリサに数日後、王宮から呼び出しが掛かる。

父には何事か判らないと言われ、母も不安そうだ。心当たりのあるアリサは、ひたすら口を噤(つぐ)むしかなかった。
そして王宮に呼ばれたアリサを待ち受けていたのは……。

「コージュ殿下におかれましては、ご友人にシンザキ氏のご長女アリサ嬢をとのご希望です。殿下が陛下より賜った子犬を救って下さったとか。三人の兄上様に囲まれてお育ちになった殿下は、姉のような方を求めておいでのようです」

側近にニコニコと告げられ、アリサは仰(の)け反(ぞ)った。
どうやら王子は、子犬が悪戯されているのを見つけ、困っていた所をアリサが助けてくれた、と報告したらしい。――なんて悪賢いガキだろう、と思ったことは内緒である。
さらには、
「陛下におかれましても、シンザキ氏のお嬢さんであるなら、将来は秘書官がよかろう、との仰せでございます。王室行事に慣れるよう、色々ご配慮下さいました」

その結果、なぜかアリサはコージュ殿下のご友人として、王宮に出入り自由の身となり……。彼女は初等科の五年にして、将来の仕事が決まるという珍しい経験をしたのだった。

「ご苦労様です」
大広間は長テーブルが所狭しと並べられ、染み一つない真っ白なテーブルクロスが掛けられている。ほとんどの席のテーブルセッティングは終わっているようだ。招待客の入場まで残すところ約一時間。晩餐会用のスタッフは、席の間を忙(せわ)しなく動き回っていた。
アリサは通過する際、その一人一人に会釈しながら、奥の小部屋に急いだ。

「シンザキです。遅くなって申し訳ございません」
小部屋にはすでに六人の男女がいた。遅れたとはいえ二分程度のものだ。しかし、最年少の彼女はしおらしく頭を下げてみせる。

「四時半開始ですよ。時間より早めに来る心配りもないのかしら？
これだから若い娘は」
小言を言い始めたのは、思った通り首席秘書官のノリコ・アソウである。四十代であるが一度も結婚したことがなく、二十年間王室秘書官を務めていた。現在は国王の第一秘書官だ。

秘書官は四人の王子に一人ずつと国王に三人付いている。国王には他に公務を補佐する補佐官が三名、外出時には周囲の警戒とは別に、護衛官が四名つき従う。王子の場合は二名だ。いずれも親衛隊から選ばれた優秀な人間ばかりであった。
秘書官はスケジュール管理他、細々とした雑事が多い。王子の秘書官は公務にも同行するので仕事内容は多岐に渡った。
彼ら秘書官と国王補佐官、そして王宮の家政を執り行う侍従六名を併せて、側近と呼ばれていた。

「まあまあ、時間がないので早く始めましょう。掛けなさい、シンザキさん」
そう言っていつも取り成してくれるのが、第三王子秘書官のイリヤ・ブラヴィノフ・クドウである。シオン王子の縁戚筋にあたる男性とかで、第三王子の母親の実家、クドウ伯爵家の推薦で秘書官になった。黒髪と暗灰色（ダーググレー）の瞳をした理知的な男性である。三十代半ばで独身――密かに狙っている女官は多いとの噂だ。
女性秘書官は他に国王第三秘書のチグサ・タカマがいる。三十三歳の彼女は既婚者で、夫が親衛隊の中にいた。妊娠すれば辞めると

聞いているが、結婚から早三年、辞職願いが出されたことはない。どちらにせよ、控え目で目立たない女性だ。ドレスも黒で、髪はきつく縛りアップにしている。

アリサは全員に頭を下げつつ、チグサの横に座った。

すると、アソウは咳払いをしてアリサから手元のノートに視線を移し……。

「では、最終打ち合わせを始めます。晩餐会の開場は十七時半とのことでしたが、侍従長の要請で十分早めて十七時二十分となりました。開始は十八時、扉が閉まった後は私たちは舞踏会場のほうに移動して準備を手伝います。それから――」

第４話　営業スマイル

「やはり亡き王妃様の息子、陛下のご嫡男であられるコージュ殿下しかおられません！　殿下が王太子になられるのが、国民の総意です！」

「私は三人の兄を尊敬しており、全てにおいて、陛下のご意向に沿う考えでおります」

（こんな場所で言い出すんじゃねーよ。他にどう答えろってんだ！）

「私の娘は今年二十歳でして……なんと、ミス・トーキョーに選ばれたほど美しい娘なのです。大学卒業後はぜひ殿下のお傍に……。いえいえ、王宮で働かせていただくことを娘共々希望しておりまして……」

「王宮職員の人事は人事課にお問い合わせ下さい。採用されますことを、お祈り致します」

（金で買ったミスなんたらじゃねぇーか。トリガラみたいな女を連れて来んな！）

「殿下のお耳にも入っておりますでしょう。シオン殿下の不行状に国民は目を覆わんばかりです。しかもこの度は……交際中の女性がご懐妊とか。陛下はどうお考えなのでしょう？」

「不確かな発言は慎まれるべきかと思われます。私は兄を信頼しておりますし、陛下も同様でしょう」

（俺を焚き付けてんのか、それとも真相を探りたいのか……。兄上が何人女を作ろうが、ガキを作ろうが知ったことかよ）

「めでたく二十歳になられまして……次は花嫁探しですな」
「私など、まだまだ若輩者に過ぎません。将来的には、ただひとりの女性と添い遂げるつもりでおります。時間を掛けて、ゆっくり探すつもりです」
「それはいけませんなぁ。早く結婚して、陛下にお孫様の顔を見せてあげなくては」
「私はその方面は不案内ですので……兄たちに任せたいと思います」
（俺は種馬じゃないんだ！　自国の結婚平均年齢くらい調べてから出直して来いっ！）

晩餐会は定刻通り始まり、アクシデントもなく終わった。
席が決まっていて、左右の人間としか話が出来ない晩餐会はいい。問題は、その後の舞踏会（ダンスパーティ）であろう。
コージュ王子は決められた順番に従い、二十八人中十四人とのダンスを終える。そして休憩を取るが、そこを待ち構えたように人々が取り囲み始めた。そして、矢継ぎ早に質問を繰り返すのだ。歳が若く後見人のいないコージュ王子は、様々な思惑を抱えた連中の格好の標的だった。

？王妃が産んだ唯一の息子？

その肩書きは名ばかりのものだ。
今は亡き、ミナミ王妃は平民の出身だった。ハルイ国王は王妃と出会い、恋に落ちて妻としたのだ。王妃の問題は身分だけでなく、年齢も……彼女は国王より二つ年上であった。その状況で国王の我侭が通ったのは、当時の複雑な王室事情に関係する。

カノウ家は八百年近くこの国を治めている。ハルイ国王は第三十九代国王だ。

この国の王家は古来より、男系男子にのみ王位継承権を与えてきた。それを維持する為、四代前の国王まで側室制度を取り入れていたのだ。しかし時代の流れから、制度を取り止めることとなり……。

当然だが、王族はドンドン減って行った。わずか三代を経た頃には、なんと男系男子はハルイ国王独りになってしまったのである。

今の時代、世界の先進国は専制国家が主流だ。とくに我が国と兄弟国と言われるのがワシントン王国である。そういった世界情勢からも、ハルイ国王には一日も早く結婚して頂き、たくさんの男子を作って欲しいが関係者の本音であった。国王が結婚したいと言うのなら誰でも構わない、といった雰囲気になっていたのである。二人は幸運だったと言えよう。

しかし、その幸運は長くは続かない。「王子を産め」「早く妊娠しろ」と平民出身のミナミ王妃は周囲から責め立てられた。だが子供には恵まれず、明確な不妊の原因は見つからないまま、人工的な手段でも妊娠出来なかったのだ。

その事態を憂慮した関係者は、遂に側室制度の復活を提案する。結婚して十年後のことだった。議会で喧々囂々の騒ぎとなったが、結局、世界情勢を鑑みて制度は復活。

だが、それに一番反対したのが誰あろう、ハルイ国王自身であった。

国王は王妃と離婚して別の女性と再婚するか、側室を受け入れるか、選択を迫られた。彼は王室内でたった一人の男子という運命に屈し、側室制度を承認する。

但し『王妃が満四十歳を過ぎた後』『側室は二人以上同時期に同

条件で娶る』『側室の結婚経験は問わず、三十歳以上の経産婦のみ』『子供は男女問わず、側室の一人でも出産した時点で制度は終了』といった条件を挙げた。

そして、王国の有力者に繋がる貴族令嬢の中から三人が側室に選ばれたのである。

王妃の四十歳の誕生日が過ぎた一ヶ月後、三人の側室が王宮に召し上げられた。それから二ヶ月以内に、なんと三人全員の懐妊が確認されたのである。

翌年四月、次々に産まれたのはその全員が王子であった。

ところがその半年後、奇跡のように四十一歳のミナミ王妃に子供が授かったのだ。もちろん、ハルイ国王は手放しで喜んだ。三人の王子たちがちょうど一歳を迎える頃、国王には四人目の王子が誕生する。しかしそれは、最愛の妻、ミナミ王妃の命と引き替えであった。

コージュ王子は産まれた時から幸運とは程遠い場所にいた。

母の実家には彼を後見する財力も権力もなく。父王は長い間、妻の死から立ち直ることが出来ず。身近な人間も、権力者の思惑が入り乱れて次々に入れ替わりを余儀なくされた。

広大な王宮で、コージュ王子は一人ぼっちだった。側室それぞれの実家に繋がるものは、幼く頼る者もいない王子をそれとなく虐める。それ以外の者は、王子を腫れ物に触るように扱った。コージュ王子がアリサに出逢ったのはちょうどその頃だ。

営業スマイル（プリンス）が顔に張り付き始めた頃、コージュ王子の目に秘書官のアリサが映った。

招待客の独身の令嬢は、デビュッタントよろしく白のイブニング

ドレスを身に着けているが、アリサは薄いブルーのドレスだ。アクアマリンのイヤリングにネックレス、ブレスレットが良く似合う。
初めて逢った時はアリサのほうが二十センチほど高かったが、今はコージュ王子が十センチほど高い。追い抜いたのは、初めてアリサを抱いた頃だった。

アリサはにこやかに笑顔を振りまきながら、コージュ王子の傍へとやって来る。

「シンザキさん、随分遅かったですね。何かありましたか？」

笑顔を張り付かせたまま、コージュ王子は公式用の言葉遣いでアリサに尋ねた。
アリサも笑ったまま小声で答える。
「ヤマト公爵家からお祝いの使者が参りまして、その対応に時間を取られてしまいました。お傍を離れて申し訳ございません」
その言葉でコージュ王子は大体のことを察する。

ヤマト公爵家とは第一王子、プリンス・トーヤの母の実家だ。資産はそれほど多くないが、かなり古い家系で王室の血縁である。由緒正しい貴族であった。
しかし、トーヤ王子の事故があってから、こういった祝賀行事には必ず異論を申し立ててくる。「第一王子を蔑ろにしている」「第一王子を王位継承から排斥する企みだ」と色々うるさい。

「殿下、そろそろフロアにお出ましになられてはいかがでしょう。十五番目のご令嬢がお待ちかねでございます」

やって来るなりアリサはダンスの催促だ。
うんざりしたコージュ王子はアリサにそれとなく声を掛ける。

「その前に……レストルームまで誘導して貰えますか？」

この時、彼の脳裏にはアリサが穿いている純白のショーツとガーターストッキングが浮かんだ。その妄想とは正反対に、爽やかな笑顔を見せるコージュ王子であった。

第5話　特別なふたり（R）（前書き）

☆軽い性的描写があります。R15でお願いします。

第5話　特別なふたり（R）

そこはコージュ王子専用の休憩室（レストルーム）だ。
大きな姿見や洗面台もあり、もちろんトイレもある。王子のプライベートゾーンの為、関係者以外立ち入り禁止区域となっていた。

中に入るなり、コージュ王子はアリサを背後から抱きすくめる。そのまま、ドレスの裾をたくし上げた。

「殿下……パーティの最中です。終わってからの約束でしょう」
「秘書官のお前が中々来ないから、俺は腹に一物のタヌキ連中に、オモチャにされてたんだぞ」
「だからそれは、ヤマト公爵家からのクレームで……」
「そんなのは首席秘書官に任せてりゃいいだろ？　兄上が出られないのにパーティをやるなって文句は、毎度のことじゃないか」

王子の言う通り、五年前から毎年のことであった。
それでも最初の年は、国王も第一王子の怪我を気遣い、誕生月の記念行事は中止にしたのだ。しかし二年目以降は、逆に他からの苦情が多くなった。結局、祝賀記念行事は第一王子のものではない、との意見が多数を占め、普通に行わざるを得なくなったのである。
だが、今年は特別に盛大なので、ヤマト公爵家も黙っていられなかったのだろう。嫌がらせの意味も籠めて、当日に陳情に来たのは明白であった。

「そのアソウさんの命令だったんですって。最年少のわたしに断われるはずがないでしょう？　とにかく……すぐに出ないと、妙な噂にでもなれば」

アリサは懸命に王子の拘束から逃れようとする。だが、王子の左手はそれを許さず、右手がガーターベルトを撫で始めた。繊細な指先が円を描くようにアリサの内腿を彷徨い、隙をつく様にショーツの中に滑り込んだ。

その瞬間、彼女の身体は硬直した。だが、王子の慣れた指使いにアリサの意識は吸い込まれそうになり……。

しばらくすると、卑猥な水音が部屋の中に響き始める。

「凄いことになってる。なあ、アリサ……言っていい？」

「ダ……メ、です。言わないで……お願い」

王子は腰までドレスをたくし上げると、アリサを鏡の前にある椅子に座らせた。革張りの、王子が休憩用に使う椅子である。アリサの太腿を持ち上げ、膝を曲げさせると脚を大きく開かせた。

「イヤッ！　殿下、こんな場所で」

「うるさい！　黙ってろ」

次の瞬間、アリサは灯りに晒されたその場所に、生温かい感触を覚えた。正面の鏡には、自分の脚の間に顔を埋める黒髪が映っている。ひどく扇情的な姿だ。軍服とイブニングドレスに相応しい行為ではない。

アリサは王子の髪に手をやり、彼を押し退けようとした。

「殿下……お願いします。こんな……パーティが終わるまで、待って」

ざらついた舌の感触、時折、硬い歯が敏感な部分に触れ……アリ

サは腰を浮かすような仕草をしてしまう。王子の舌は適確に彼女の蕾を捉え、弄んだ。
アリサがギュッと目を閉じる。下腹部が熱くなり、折り曲げられた脚が打ち震え――直後、コージュ王子は彼女から離れたのだ。
アリサが目を開けると、王子の瞳がそこにあった。瞳には十四年前と変わらない、悪戯っ子の光が浮かんでいる。彼の思うままになるアリサが面白くて仕方ないといった感じだ。悔しいが、今の彼女には反論も出来ない。

「秘書官のくせに俺から離れて、しかも気に入らない女とのダンスを強制した罰だ。夜まで、イクのは我慢するんだな」

微笑を浮かべ、コージュ王子は軍服の乱れを直した。そして口元を拭うと、彼は休憩室から出て行くのだった。
一方、恥ずかしい姿のまま、独り置き去りにされたアリサは堪らない。しかも、その瞬間を迎える直前だったのだ。火を点けられた身体を持て余し、彼女は僅かな刺激すら苦痛に感じた。そのまま、自らの指で満たしてしまいそうになる。

（駄目よ……駄目。絶対に、そんなこと）

懸命に自分を励まし、ドレスの裾を整えた。そして、アリサは鏡に目をやる。
コージュ王子の芝居は完璧で、二人の関係を知っているのはごく限られた人間だけだ。それも、亡き王妃に忠誠を誓い、コージュ王子を王妃同様に愛するごく少数なので、敵対する人々に漏れることはないだろう。
二人の関係……。
実を言えば、アリサ自身にもよく判らない。彼女とコージュ王子の関係が一体何なのか。もちろん、アリサの気持ちは決まっている。

彼女にとって?幼い大事なプリンス?が、五年前?最愛のプリンス?に変わった。
この国において、十八才未満の少年少女と成年が性的関係を持つことは厳禁とされている。王子に押し切られたとはいえ、?お友達?の身分にあった二十歳のアリサは十五歳の少年と罪を犯したのだ。しかも一度や二度ではない。それ以来ずっと、二人は関係を続けている。
コージュ王子が十八歳になり、公務に就くようになったと同時に、アリサの身分は秘書官になった。余計に傍にいられるので、セックスの頻度は高まったと言うべきだろう。
だが、どんな時もコージュ王子は一度もアリサを『愛してる』とは言わない。『好きだ』とも『大事な人』とも言ってくれない。
「お前は俺のものだ。いつでも言う通りにするんだ」
アリサはコージュ王子のものだった。初めて逢った時から、そしてこれからもずっと……。本当に、それだけで良いと思ってきた。
この日までは……。

☆。・‥＊‥・。★。・☆。・‥＊‥・。★。

「約一週間後の四月九日、ワシントン王国からプリンセスが我が国にお越しになられます。メアリ二世女王陛下の第一王女アイリーン殿下です。この度、アイリーン王女が我が国の王太子妃となられることが決定しました。そのことを踏まえまして、国王陛下はアイリーン王女の夫はコージュ王子がよかろう、とのお言葉です」
それは国王の首席補佐官ユウジ・カイヤの言葉であった。

カイヤは昨秋、三十六歳の若さで首席補佐官に任命されたばかりだ。真面目で面白みのない容姿、性格も堅苦しく融通が利かないと言われる人物である。数年前に婚約したが、挙式直前に破談になったらしい。様々な噂は流れているが、どれも興味本位の域を出てはいなかった。

アリサがコージュ王子の休憩室から出たところで、上司である首席秘書官のアソウに声を掛けられた。身だしなみは充分に気をつけたつもりだが、重箱の隅を突くのが得意な上司だ。アリサの心臓は数センチ跳ね上がる。

「あなたに特別な話があると、カイヤ補佐官がお呼びです。中二階の事務室に向かいなさい」

「どういったお話でしょうか？」

？特別？の言葉に、跳ね上がった心臓が激しく鼓動を打ち始めた。コージュ王子との仲を知られたのであれば、それは厳重注意などでは済まないはずだ。間違いなく、アリサは二度と王宮に出入り出来なくなるだろう。

こっそり探りを入れたつもりだったが、予想外にもアソウはヒステリックな返事を返してきた。

「わたくしに判るはずがないでしょう！？　さっさとお行きなさいっ」

どうやらアソウにも知らされてはいない内容らしい。尋ねたが教えては貰えなかった、ということだろうか。アリサは慌てて頭を下げ、言われた通り王宮の正殿中二階にある事務室に向かったのだった。

「それは……陛下のお心積もりは、コージュ王子に王位を継承させる、という」

「シンザキ秘書官！　君はハッキリと言葉にしなければ理解出来ないほど、鈍いのですか？」
「い、いえ。ただ、確認しておこうと……」
「これは陛下の私的な呟きです。公式のものとなれば、色々と問題も出て来ます」
「では……それをわたしに言われたのは」

王宮事務室の職員は、全員舞踏会のスタッフとして引っ張り出され、室内は閑散としていた。白い壁にステンレス製の窓、事務机が整然と並んでいる。ごく普通の民間事務所の光景となんら変わりない。
二人きりの部屋でカイヤ補佐官はアリサから視線を外し、言い辛そうに口を開いた。
「女官たちから聞いた話です。コージュ王子にとって君は？特別？な人間らしい、と」
カイやの口から出た？特別？はアリサの心臓を太い杭で貫いた。

第6話　近くて遠い人

休憩室（レストルーム）付近は天井も低く、通路も狭い。だが、衛兵の立つ場所から一歩出ると、センターに赤いカーペットが敷かれた大理石の廊下が姿を見せる。天井部分は二階まで吹き抜けで、廊下に立つだけで、充分な解放感を味わうことが可能だ。

広い廊下に出て、左に曲がると舞踏会場に戻れる。ちょうど、王宮楽団の演奏するウィンナワルツが流れてきた。だが、コージュ王子はそこを右に曲がり、裏庭に続く狭い通路に足を進めた。無論、狭いと言っても民間の家屋とは比べるべくもないが。

しばらく歩くと、突き当たりに再び衛兵が立っていた。コージュ王子は軽く微笑み、「少し庭を見たいのですが」と声を掛ける。

「はっ！」

衛兵は敬礼すると、ガラス戸の鍵を開けた。それは、ベランダや庭に面して取り付けられる、フランス窓と同じタイプの引き戸だ。小さな音を立て戸が開くと、春の風と共に数枚の桜の花びらが舞い込んだ。今年の桜は早いという。もう満開だ。

窓から出て正面に見える桜の木。そこがアリサと出逢った場所だった。もっと宮殿より遠くにあって、大きな木の根元だと思っていた。小さな王子にはそう感じたのである。

コージュ王子が産まれたのは十一日、例年すでに葉桜となり、緑の比率が増える時期だ。しかし、王子の産まれた年は桜の開花が随分遅かったという。

――王子の誕生を待っていたに違いありません。

それは幼い頃から幾度となく耳にした言葉である。
プリンス・コージュ――漢字では『光樹』と書く。懐妊中に男子と知った母が、国王と相談して決めた名前であった。

この国では貴族や一般人の戸籍と、王族の戸籍にあたる王統譜には漢字の名前が登録されていた。しかし、通常は横文字で書くケースも多く、漢字は使用されていない。
王族の場合、数百年前は外国人の血が入るのを拒んでいたという。だが今では、他国のプリンセスを迎えるのはごく当たり前のこととなった。そういった事情からも、王族にはセカンドネームと『エインズレイ』のホームネームがつけられることになったのだ。
コージュ王子の場合、海外では『トーキョープリンス、アルフレッド・エインズレイ』と呼ばれることのほうが多い。

アリサは光る砂と書く。
戸籍に記載された彼女の漢字名は『真崎光砂(シンザキアリサ)』。名簿でアリサの名前を探し、光砂の字を見つけた時、どうしても傍にいて欲しいと思った。
コージュ王子の母の漢字名が『光波(ミナミ)』というのも、理由の一つかも知れない。

(ガキだな……まぁ、六つはガキか)

出来れば桜の近くまで行きたいが……。
王子が庭に下りれば、警備上の問題が生じる。いつもはそれほど厳しくないが、今日は特別な日だ。全員入り口でチェック済みとはいえ、招待客、スタッフ、一部の報道陣を含めて多くの部外者が王宮に出入りしている。

「殿下。庭先に下りられますか？　私が同行致します」

背後から声を掛けたのは、コージュ王子専任の護衛官だ。どうやら舞踏会場の出入り口でコージュ王子を待っていたらしい。王宮親衛隊の精鋭、ユキト・アヤカワ中尉である。王子同様にスキップで大学を卒業し、十八歳で入隊した。現在二十五歳、十四年前に選ばれた？お友達？の一人だ。

アヤカワ中尉は、王子よりふた回りほど大きく武芸全般に秀でている。もちろん、腰のサーベルも飾りではない。射撃の腕前も親衛隊で一番だった。

「ああ、中尉。いや、そろそろ会場に戻らねばならないでしょう。ですが……今年の桜は早そうだ」

「はい。シンザキ秘書官も同じようなことを言っておりました」

アリサの名前が出たことに、王子の足が止まった。

アヤカワ中尉の姿を上から下まで眺める。彼の軍服は王子ほどゴテゴテと飾り付けられてはいない。スッキリとして実用的なデザインだ。アヤカワ家は代々近衛兵を務める家系で、彼の父も国王の護衛官であった。国王の警護をしてヨーロッパを回った時、スペインで踊り子をしていた女性を連れ帰ったという。その女性が彼の母親だ。

アヤカワ中尉は、ラテン系の母親の血を色濃く継いでおり、オリーブ色の肌をしていた。見るからに頼りがいのある大人の男だ。女性にはもてそうだが、無責任な噂は聞いたことがない。

「中尉は、私の秘書官をよくご存知のようだ」

「子供の頃、シンザキ家とは公務員宿舎が同じ棟にありました。歳も同じで、よく一緒に遊んだものです。王宮に上がるようになった

のも同じ時期ですので……。それに、二年前からは殿下のお傍に仕えさせて頂き、話す機会も増えました」

大の男が頬を赤らめながら話すなど、あまりあることではない。コージュ王子は嫌な予感と共に、動悸と眩暈を覚えた。

「それだけでは無さそうですね。中尉は随分嬉しそうだ。何か、良いことがありましたか？」

「いえ、まだ……。実は、シンザキ秘書官に結婚を申し込みました。お互いの両親も非常に喜んでくれています。彼女からの正式な返事はまだなのですが」

「それは……実に喜ばしいことだ。しかし、彼女の口から中尉の名を聞いたことはなかった。それも、結婚を意識して交際中の男性がいたとは……私は秘書官に信用されていないらしい」

「それは……その、正式に決まってから、と思っているのではないでしょうか？　責任感の強い女性ですから、公私混同はしたくないと思っているのかも知れません」

アヤカワ中尉は慌てて言い訳をし始めた。迂闊に私的なことを話してしまい、アリサの秘書官としての信用に傷をつけたのでは、と思ったようだ。

「シンザキさんには長く世話になりました。彼女には幸せになって欲しいと、心から願っているんですよ」

「もちろんです、殿下！」

「結婚後も、二人揃って王宮に仕えてくれることを希望します」

「はい。そのつもりでおります」

コージュ王子は中尉の幸福そうな笑顔に、微笑で応えた。

途切れることなく聞こえる円舞曲と、大勢の人々の話し声。兄が

三人もいながら……『王妃の息子』それは彼にとって、外すことの出来ない足枷であった。

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

「それは……どういう意味でしょうか？」

頬を引き攣らせて、どうにか言葉を紡ぎ出したアリサに、カイヤ補佐官の口調は変わらない。

「特別は特別です。殿下は幼い頃から、君にひとかたならぬ信頼を寄せていた、と。その君に尋ねたいのですが、殿下には……その、俗にいう深い関係の女性がいらっしゃる気配はありますか？」

その質問に、アリサは自分が名指しされている訳ではないと知り、ホッと息をつく。しかし反面、頭を抱えたのだ。正直に答える訳にはいかない。かといって、あからさまな嘘もどうであろう。

「そういったことは……秘書官が個人的な考えで迂闊に口にしてしまうのはどうでしょうか？　殿下の信頼に背く行為だと思われます」

アリサの返答にカイヤ補佐官は少し顔を顰めた。だが、真面目な彼らしく納得したようだ。

「確かに。そういった点が殿下の信頼を得ている理由かも知れませんね。よろしいでしょう。では、この件は君に一任しましょう」

「一任？　それは、どの件でしょうか？」

「明日、コージュ王子はアイリーン王女の接待役として陛下より任命されます。婚約者候補ということは、コージュ王子にも知られてはいけません。さりげなく、お二人きりの時間が取れるように、よろしく手配して下さい」

それはアリサにとって、王子との関係を知られたと思った時以上の衝撃だった。秘書官として、コージュ王子のデートを取り仕切れと言われたのだ。

出来る限り表情を凍らせて、アリサはカイヤ補佐官を見た。わずかでも、動揺に気付かれてはいけない。心まで凍りつき体が震えそうになるのを堪え、アリサは緊張した面持ちで口元を引き締める。

そんなアリサにカイヤ補佐官は、

「殿下はこういったことに不慣れと聞きます。君はもう二十五歳だ。一通りのことはご存知でしょう。その点でも、失礼に当たらない程度で助言をして差し上げて下さい。これは陛下のご命令です」

他の人間が口にすれば、セクハラではないか、と抗議したくなるところだ。だが、カイヤ補佐官の真剣な表情からは卑猥なものは感じられない。しかも？王命？である。

「……承知致しました」

アリサは歯を食い縛り、静々と頭を下げた。

第7話　結婚の条件

ワシントン王国――太平洋を挟み、我が国とは古くから同盟関係にある友好国だ。統治するのは女王でメアリ二世である。次代は国王で、女王の長男プリンス・イーサンと決まっていた。

三年前に亡くなったが女王の母が、我がトーキョー王国の王女であった。ハルイ国王の従姉にあたる女性だ。そういった縁からも、トーキョー王国王太子妃にはワシントン王国の王女を、との声が両国民の間で上がっていた。

アジアの島国、小国に過ぎないトーキョー王国だが、過去の世界規模の大戦では負け知らずだ。現有戦力もワシントン王国に次いで世界二位に位置している。

両国が共同で掲げるスローガンが――

?地球上から戦争をなくそう。子供たちの為に、恒久なる平和を!?

局地的な規模での紛争は絶えないが、戦争と呼べるものはここ半世紀存在しない。

強大な軍事力を持てば、試してみたい欲求に駆られるのが人間であろう。だが、二国間の強力なタッグにより、その抑制に尽力している。

両国の友好は何がなんでも保たねばならない。それは王室に生を享けた者の使命であった。

☆。・：＊：・　。★　。

トーキョーシティの中央に巨大な森がある。
王宮の周囲を歩けば、そんな錯覚に囚われそうになる人も多いだろう。外周は最大約五十メートル幅の堀で囲われており、余計に緑豊かな自然公園のように見える。王宮正門前に掛けられた橋を渡り、その閑静な森をくぐり抜けると、そこには現在のルーブル美術館を思わせる巨大な宮殿が姿を見せる。
正面に見える正殿が舞踏会や晩餐会を行う所だ。内部は二階までの……場所によっては四階に相当する高さまで吹き抜けになっている。
同じ建物内に各部署ごとの事務室があり、多くの事務官や各専門官がそこで働いていた。事前に申請し、許可が下りれば一般人でも見学出来る場所であった。

正殿の真裏、木立を挟んだ場所に奥の宮と呼ばれる建物がある。そこが国王のプライベートゾーンだ。警備も厳重で、誤って踏み込もうものなら即逮捕は免れない。逃げようとする者がいれば、問答無用で発砲が許されている区域であった。

奥の宮の裏手には、再び森が続く。その森を中心に東の宮、南の宮、西の宮、北の宮が建てられていた。
そのうち三つは二十二年前、三人の側室の為に作られたものである。現在では、北に第一王子が、南に第二王子、西に第三王子が住む。王子らが幼い頃は側室の女性たちもそこに居たが、今はそれぞれの実家に戻っていた。

この国では、東は春を意味し王太子のことを指す。王妃に気遣った国王が、当時、東に宮殿を建てることを許可しなかった。しかし、王妃も王子に恵まれ……。亡き王妃の為に国王は東の宮を建てた。そして第四王子に与えたのである。
それが今から十九年前のこと。コージュ王子は満一歳を迎える前

に、父と離れて暮らすようになったのだった。

アリサは王宮の正殿から決められた通路を歩き、東の宮に戻った。のんびり歩くと二十分は掛かる道のりだ。コージュ王子と一緒の時は、車を使うことも多い。

時間は深夜の一時を回っていた。ここが一般道なら、若い女性の一人歩きは危険な時間帯であろう。だが、仮にも王宮の敷地内だ。深い森に見えてもちゃんと舗装された道があり、道沿いには外灯も点いている。時折すれ違う衛兵も、アリサに安心感を与えてくれた。

建物の灯りが見えた直後、アリサの視界が一気に開けた。

外壁はレンガ造りの石貼りに見えるが、れっきとした鉄筋コンクリートの建物である。見た目は王宮に合わせて優雅で気品高く作られ、中身は地震の多いこの国に合わせた耐震設計だ。

東の宮は四階建て、四階フロアは全てコージュ王子の私的スペースである。決められた女官とアリサ以外は、護衛官といえども立ち入り禁止区域になっていた。

アリサは重い体を引き摺るように、玄関前の階段を上がる。入り口で身分証をセンサーに翳すと、鍵の開く音が聞こえた。同時に、手荷物検査用のベルトコンベアが動き始める。アリサは無意識の動作でその上にバッグを乗せ……彼女のバッグだけが先に館内に入って行った。

焦点の合わない目で、アリサがそれを見送っていると、『アリサ、どうした？　鍵は開けたぞ』インターホンの応答口からアヤカワ中尉の声が聞こえた。

アリサはハッとしてドアを押し開け、中に入るのだった。

「随分疲れてるようだな。……大丈夫か？」

大柄なアヤカワ中尉が心配そうにアリサの顔を覗き込む。
「ん、大丈夫。祝賀行事が終わって……ホッとしたら気が抜けちゃった」
幼なじみの気安さからか、アリサは柔らかい笑顔を作って見せた。
「無理するなよ。お前、妙なとこで責任感が強くて、限界超えて頑張るからな。体壊すぞ」
「妙なって……失礼ね。平気よ、だって若いんだから」
「二十歳のプリンスには敵わないさ」

何気ないアヤカワ中尉の言葉に、アリサはドキッとする。中尉が気付いているはずはないのだ。気付いていれば……。

「あの、さ……こないだの話なんだけど」
「あ、ユキちゃん、ごめん。イベントは終わったけど、殿下の誕生日までは気が抜けないの。だから、それからじゃ駄目？」
「いやっ、もちろん、全然かまわない！　ゴメン、なんか急かして」
アヤカワ中尉は照れた様子で頭を掻いた。

半年前にアヤカワ中尉から交際を申し込まれた時、アリサはすぐに断わった。だが、仕事が理由なら待つから、と言われ……。コージュ王子との関係も、王子に対する想いも口に出来ない彼女は、頷かざるを得なかった。
それ以降、数回デートをしている。もちろん、セックスどころか、キスもない。今時あり得ないほど、食事と散歩だけのデートを繰り返していた。

そして今年に入ってすぐ、結婚を言い出したのはアヤカワ中尉ではなく、双方の両親だった。
昨年末に母親同士が街中で偶然再会した。それが切っ掛けとなり、

今年の正月、アリサの両親がアヤカワ家に招かれたのだ。その時に、親だけで異様に盛り上がったらしい。後日、中尉がプライベートで会っていることを口にした為、とんとん拍子に結婚まで話が進んだ。
それを聞いた時、アリサは唖然とした。親が何を勝手に、と彼女が叫ぶ寸前――アヤカワ中尉がとんでもないことを言い始めたのである。

「ついでと言ったら言い方が悪いけど……。これも何かの縁というか……俺は、そうなって欲しいと思ってる！」

それはアリサの人生で、初めてのプロポーズだった。
ことが結婚となると、交際以上に理由もなく断わることは難しい。世間一般で言うなら、二十五歳で結婚は早いほうだろう。だが、代々王室に仕える家系においては、そう早くもなかった。それに、近衛兵の中でも王子担当の親衛隊、しかも専属護衛官となると、王宮で働く女性の憧れである。
アリサに打算はない。だが職業と同じで、将来はシンザキ家と同じく、代々王室に仕える家系の人と結婚するんだろうな、と思ってきたのは事実だ。

（潮時なのかも知れない。殿下の婚約後も、こんな関係は続けられないし……）
エレベーター前に立つ衛兵に会釈をして、アリサは四階直通のエレベーターに乗った。エレベーターの扉が閉まる寸前、親指を立てて笑うアヤカワ中尉の顔が目に映る。
反射的に彼女も微笑んだが、上手く笑顔を返せたかどうか……今のアリサには自信がない。
四階フロアに着くと電子音が鳴り、数秒後エレベーターの扉が開

いた。
　その瞬間、アリサは腕を掴まれ、フロアに引っ張り出されたのだ。そしてそのまま、壁に押し付けられる。
「こんな時間はわざとだろう？　俺がお前を逃がすものか」
　コージュ王子の声が耳元で聞こえ……。アリサが顔を上げると、そこには獲物を見つけた肉食獣の瞳があった。

第8話　愛に濡れた夜（R）（前書き）

☆軽い性的描写があります。R15でお願いします。

第8話　愛に濡れた夜（R）

アリサの唇は火が点いたように熱くなった。王子の熱が、唇を伝って彼女の身体の滑り込んでくる。

――ここは廊下です。せめて部屋に戻ってシャワーを浴びて、着替えてからお部屋に伺います。

そんな言葉が胸に浮かぶが……声にする余裕も与えてくれない。唇だけじゃない。コージュ王子の全身が触れるだけで火傷するかのようだ。それが嫉妬の熱であるなど、この時のアリサには判らなかった。

「殿下……ここじゃ駄目……です。女官が上がって来たら……」

息も絶え絶えのアリサの抗議を受け入れ、コージュ王子は彼女を抱き上げた。

「俺は別に構わない。でも、お前がそう言うなら……部屋まで我慢してやる」

薄暗い廊下を、コージュ王子は彼女を抱いたまま、飛ぶように走ったのだった。

アリサの部屋はエレベーターを降りてすぐ右手の小部屋である。但し、それは館内の他の部屋との比較に過ぎない。具体的に言うなら六畳程度の簡易キッチンと、十畳程度の洋室、クローゼット、バ

ス、トイレ、バルコニーまである勿体ないほどの広さであった。
アリサの部屋の隣が予備室、その隣が王子の公務用クローゼットだ。軍服も用途に応じて数種類、その部屋に収納されている。
そして廊下の突き当たりにコージュ王子の私室があった。
オーク材の重厚な両開きの扉を押し開けると、白の壁紙がやけに目立つスペースが広がる。玄関に相当する部分だ。秘書官用のテーブルと椅子が隅に置かれ、中央にはロココ調の花台が一つ。そこに飾られているのは、五本立ての胡蝶蘭である。大輪の花は艶(あで)やかなピンクの花弁を揺らし、まるで蝶が舞うかのようだ。

アリサはすでに王宮内で着替えを済ませていた。
後片付けを手伝うのに、イブニングドレスでは動き辛い。今の彼女はいつも通り、紺のスーツ姿であった。肩より少し長めの髪は、真っ黒というより焦げ茶に近い。邪魔にならないよう、左右からすくい上げてバレッタで留めている。アクセサリーは全て外し、今は腕時計もつけていない。化粧すら一旦落としたので、サッと塗り直した口紅とファンデーションくらいだった。

一方、コージュ王子はシャワーを浴びたらしい。
アリサがいないので自分で体を拭いたようだ。上は黒のTシャツを着ているが、下は黒のボクサーパンツのみである。しかも裸足だ。
基本的に館内は土足で移動することになっている。無論、女官たちは専用の履物を使い、王子やアリサも自室に戻ると室内履きに履き替えていた。そのため、とくに四階フロアは泥や砂はおろか、ゴミ一つ落ちてはいない。
女官の前では？いい子？の王子も、アリサだけになると途端にわがままな王子に変身する。

「殿下……また、裸足で出歩かれて。もし、怪我などされたら」

室内だけならともかく、廊下は裸足で歩かないようにいくら言っても聞かない。子供の頃から、アリサの前ではわざと靴下まで脱ぐ始末だ。

玄関スペースから右手にあるドアを開け、リビングに入るなり、アリサはそんな小言を口にしてしまった。すると、コージュ王子はムッとした表情になり、

「俺の足なんか、気にならなくしてやるよ」

そう言って、擬似暖炉の前にアリサを押し倒したのだった。

床に敷かれているのはペルシャ絨毯の中でも、イランの遊牧民の手で織られた一点物のギャッベだ。ふかふかの肌触りは、年数を経ても衰えることのない極上品であった。

そのギャッベに顔を押し付けられ、アリサはうつ伏せになる。

次の瞬間、絹の引き裂かれる音が室内に響いた。

王子の手が、ついさっきアリサが穿いたばかりのパンティストッキングを破ったのだ。直後、王子の指が彼女の中を彷徨った。

「どうして、すぐに戻って来ない？　そんなに、俺に抱かれるのが嫌か？」

覆い被さるように、コージュ王子は耳元で囁いた。その切なく苦しげな声に、アリサの胸は押し潰されそうになる。

「違い……ます。仕事で」

コージュ王子が王太子に選ばれたら、アイリーン王女との婚約は避けられない。この館は東の宮ではなく、王太子の宮殿に様変わりすることになるだろう。

女官の数は増え、専属の侍従も付けられる。今は、王子の身の回りの世話までアリサがしているが、王太子となればそうは行かない。館内、しかも四階に与えられたアリサの部屋は、階下に用意される

か通いになるはずだ。
これまでの生活の全てが変わる。
アリサにとって、それを受け入れるのは容易ではなかった。
「なぜ黙る？　アリサ……五年前は俺だけのものだった。今はもう違うのか？」
「いいえ。わたしには殿下だけです」
「それが嘘なら、ただじゃ済まさない。お前を抱いた男は――俺が殺してやる！」
押し込まれた指が抜かれ……アリサの下着は膝まで下ろされた。

☆。・：＊：・。★

アリサはぼんやりと、シャンデリアの吊るされた天井を見ていた。いつの間に脱がされたのだろう。二人とも一糸纏わぬ姿になっていた。しかも、背後からうつ伏せで抱かれていたはずが……。どういう経緯を辿ったのか、アリサはコージュ王子の上に仰向けで寝転がっている。
「あ、あの……殿下、申し訳ございません」
「動くな。そのままでいろ」
「でも、重いでしょう？」
「俺はいつまでも十五のガキじゃない。お前が乗ったくらいでどうってことはない」
「でも……」
「黙れ」
「……はい」

情熱的に求められ、火照った肌が少しずつ正気に戻って行く。落ち着きを取り戻した二人の呼吸が、静寂の中に溶け込み……。アリサの心が冷める寸前、この世界に二人だけのような錯覚に陥った。身分も年齢も関係なく、このまま寄り添っていられたなら……。

その浅はかな夢を断ち切るように、暖炉の前に落ちたアリサのバッグから携帯メールの着信音が聞こえた。アリサは無視したが、コージュ王子は気になったらしい。アリサの下から手を伸ばし、バッグの中を探る。

待ち受け画面には、着信メールありのマークとアヤカワ中尉の名前が光って見えた。

「勤務中にサボリやがって……」

コージュ王子は文句を言いながら携帯のボタンを押した。

「殿下！　勝手にメールを見ないで下さいっ」

「見られたら困るのか？」

「中尉に失礼じゃないですか？　王子とはいえそんな権利は……」

「ある！」

こうもキッパリ言い切られては、アリサは反論も出来ない。

――今日はお疲れ様でした。本当に無理しないように。何かあったら、俺でよかったら相談に乗ります。じゃ、おやすみ。ユキト――

「泣かせるメッセージだな。礼くらい言ってやったらどうだ？」

「明日言います。もう返して下さい」

アリサは身体を起こしコージュ王子から離れた。四月の初めは花冷えの時期だ。ひんやりとした空気を感じ、アリサは小さく身震い

する。
コージュ王子の持つ携帯にアリサが腕を伸ばした瞬間、ピッピッ……とボタンのプッシュ音が聞こえたのだ。
「で、殿下？　一体誰に掛けてるんですかっ！？」
「決まってる。明日と言わず、今、言えばいい」
数回のコール音の直後、携帯電話からアヤカワ中尉の声が流れた。
アリサは軽いパニックに襲われる。全裸で、しかも同じく全裸の王子が隣にいるのだ。この状況で、自分にプロポーズしてくれている男性に、何と言えばいいのだろう。
戸惑うアリサに携帯を突きつけ、早く出ろ、と王子は口を動かした。

『あ……あの、わたしです』
『ああ、番号で判った。まだ起きてたんだな。わざわざ掛けてくれなくても良かったのに』
『ええ、あの……メールありがとう。でも、本当に大丈夫だから、心配しない……で……あ』
アリサが仕方なしに携帯に出た途端、コージュ王子は彼女の膝を掴み、左右に開いたのである。そのまま、王子の容赦ないキスが彼女を責め立てた。
『アリサ？　どうした？　何かあったのか？』
不意に言葉を切ったアリサを案じて、アヤカワ中尉は尋ねる。だが、とても口を開ける状況ではなかった。
『アリサ？　アリサ？』
『――ごめんなさいっ。もう寝るからっ』

アリサは電話に向かって叫ぶと、アヤカワ中尉の返事も聞かずに切った。

「殿下……ひどいわ……こんな」

コージュ王子はアリサの抗議を無視して携帯を取り上げる。そのままメールだけでなく、アヤカワ中尉の登録自体を抹消したのだ。

「礼を言う手間を省いてやったんだ。ありがたく思え」

この夜のコージュ王子はいつもとは違った。

恐ろしいほどの情熱を持て余し……朝までアリサを抱き続けたのである。

第8話　愛に濡れた夜（R）（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。
次回から第2章です。
2～3日お時間を下さいｏｒｚ
2章の開始は木曜あたり、更新時間は0時を予定しています。
ではでは、またのお越しをお待ちしております（平伏）

第9話　報われぬ努力

「王子様は三人で充分でしたのにねぇ」
「何のために新しい法律を作り、側室制度を復活させたのか」
「ご身分が低いばかりに、お優しかった王妃様がお気の毒でなりません」
「お子様が王太子に立たれたら、王妃様も報われますのに」
「それは……難しいかも知れませんわね。お三方のご実家に気を遣われて、どなたも後見人にはなられませんもの」
「最愛の王妃様から、才覚やご気性を受け継がれておられたらよろしいんですけれど……」
「素晴らしい王子様に育たれることが、陛下にとってせめてもの慰めでしょうね」

物心ついた時から、何度も何度もコージュ王子が耳にしてきた言葉である。周囲の大人たちに悪気がある訳ではない。不憫な王子を見るたびに、言わずにはいられなかったのだろう。

三人の兄たちは決してコージュ王子を粗略に扱うことはなかった。むしろ、それぞれの母の目を盗み、東の宮を訪れては四人で遊んだくらいだ。それを知った国王は、当初予定していた王立学院幼稚舎への入園を取り止めた。王子たちには四人一緒に、王宮内で幼児教育を施したのである。

だが初等教育となると話は別だ。やはり将来を見越して、集団での生活体験も必要であろう。三人の兄たちは揃って王立学院初等科に入学してしまい、コージュ王子は一人ぼっちになった。

彼がアリサと出逢ったのはこの頃である。

幼児期、一年の差は大きい。しかも、四月生まれとはいえ、コージュ王子は成長が早い方ではなかった。
例えば、王宮の庭を三人の王子は自転車で自由に走り回る。もちろん補助輪なしだ。そんな兄たちを、四歳になったばかりのコージュ王子は憧れの眼差しで見つめた。そして当然のように彼も乗ろうとするが……どうしても足が届かない。

「来年には乗れるようになるよ」
一番上のトーヤ王子はいつも優しい言葉を掛けてくれる。
「僕が教えてやる！」
そう言って自転車の後ろを押してくれたのが二番目のクロード王子だ。
「本当は、僕も苦手なんだ」
すぐ上のシオン王子は弟が転ぶと一緒に転んでくれた。
それはコージュ王子にとって、頼もしく、優しい兄たちで……。

自転車の件はほんの一例だ。
あの後、東の宮に戻るなり、女官たちはコージュ王子に自転車の運転を指導した。
「まあ、側室腹の王子様方に劣るなんて……亡き王妃様がお可哀想で」
「陛下もきっと落胆なさったに違いありませんわ」
練習を渋る王子に、女官らが投げ掛けた言葉だ。
わずか四歳の王子の辞書から、「出来ない」「判らない」「やりたくない」の文字は強制的に外された。

コージュ王子七歳の春――。

また兄たちと一緒に勉強出来る。期待に胸を膨らませ初等科に入学した。そんな彼を待ち構えていたのは、更なる重圧であった。
その中で一番大きなものは孤独感だ。運動会であれ、音楽発表会であれ、参観日にすらコージュ王子を見に来る人間は、彼の？査定係？だった。東の宮に戻れば、クラスメートや兄たちと比較され、課題を出される。褒められたことなど滅多になかった。
それでも、コージュ王子は懸命に努力したのだ。自分に命を与えて死んでしまった母上を悲しませてはいけない。父上の期待に応えなくてはならない、と。

そんな王子に運動会は試練の場となる。
王立学院は本来、王族の子弟用に作られた学校であった。だが、王族の少ない今となっては、通うのは貴族の子弟がほとんどだ。そんな中、王子ひとりの為に特別な気遣いなど望むべくもない。
運動会において、低学年には親子競技があった。父兄と一緒に玉入れやダンスをする。兄たちにはもちろん母がいて、祖父母や叔父、叔母など応援も多数いた。
しかし、コージュ王子には誰もいない。彼は女官に手を引かれ、競技に参加するが……。退場の時、残酷なアナウンスが流れたのである。

「一、二年生の皆さんよく頑張りました。お父さんお母さんに抱っこして貰い退場しましょう」

一学年上の兄たちは、それぞれの母に抱かれて退場した。それを目にしたコージュ王子は、密かに期待したのである。彼は人から抱き締められた経験がない。だが今なら、自分も抱き上げて貰えるかも知れない。
彼がそっと、女官の肘に手を触れようとした瞬間、女官は厳しい表情で王子を諭し始めた。

「王子たるもの、そのような姿を見せてはいけません。これは兄上様方との差を見せるチャンスです。どうぞ毅然として、ご自身の足でご退場下さいませ」

彼は歯を食い縛り、歩いて退場門に向かった。

懸命に微笑み、「さすがプリンスね」の声に手を振りながら……。

そんなコージュ王子にとって、唯一、心を許せる相手がアリサだ。最初は週に三度、学校が終わると通ってくるアリサを待ち侘びた。そしてそれは、王子が初等科の高学年になった頃にはほぼ毎日となる。しかも王子の希望で、休日までアリサを王宮に呼びつけるようになり……。

その頃にはコージュ王子も知恵が回るだけでなく、駆け引きも覚えていた。

対外的には、穏やかに微笑みつつ、

「アリサが来ないのなら、陛下主催の食事会には出ない」

などと言って女官らを困らせるようになる。

東の宮の女官たちは王妃付きであった者がほとんどだ。亡き王妃の為という名目で、彼を?完璧な王子?としてアピールしたがっていた。様々な思惑で乳母として送り込まれた女性を、次々にクビにしたのも彼女らである。

もちろん、コージュ王子の身を案じて、には違いない。だが最大の目的は、コージュ王子を王太子に、という願いからだ。その為にも、時折見せるコージュ王子の我侭は、決して外部に知られてはならない極秘事項であった。

「もうっ！　ちょっと、殿下。わたしにもやりたいことがあるんですからねっ」

王子が呼び出すと、アリサは文句を言いながらも必ずやって来た。だがいつだったか。――自分の言う通りにしないと、叩いたことをバラしてアリサの父をクビにする。コージュ王子がそんな言葉をぶつけたことがあった。

するとアリサは顔を真っ赤にして怒り、泣きながら帰ってしまったのだ。それに焦ったのがコージュ王子である。

アリサはコージュ王子を褒めてくれる。アリサの三歳下の妹より、王子のほうが断然かしこい、と言ってくれるのだ。王子は気を良くして、出来ることを次々アリサにして見せた。

頑張っても頑張っても褒めてはくれない父王や、褒めることの出来ない母のためではなく。王子はアリサの為に、頑張り始めたのである。

そんなアリサを独占したい。もっともっと、自分に縛り付けたいだけだった。

しかし、次の日からアリサは病気を理由に来なくなった。それはコージュ王子には耐えられないほどのショックで……。彼はとうとう熱を出して寝込んでしまったのである。

病気の時ほど、心細さを感じることはない。

「王子に何かあれば、王妃様に合わせる顔がありません」

「私どもの不手際を咎められるかも知れません。何としても早く良くなって頂かなくては」

さらに三日以上学校を休むと、

「ひ弱な王子では、王太子に相応しくないと思われかねませんのに」

そう言って熱が下がらないことを責められた。

夢の中でアリサは泣いていた。悲しくて、コージュ王子も一緒に泣いたのだ。アリサの名を呼び、何度も「ゴメン」と謝った。

そして目覚めた時、前髪を真っ直ぐに切り揃えヘルメットのような髪型をしたアリサがベッドの横に座っていた。大きな目に涙を浮かべ、「わたしの風邪が移ったのかも、ごめんなさい」と言いながら……。その瞬間、コージュ王子の瞳から涙が吹き上げた。

「熱が出たのはアリサのせいだ！　アリサがいなくなったら僕は死ぬんだ。アリサは絶対にいなくなったらダメだなんだーっ！」

――アリサがいなければ生きていけない。

十一歳のコージュ王子は十六歳のアリサに抱きつき、恋を自覚したのである。

第１０話　十九歳の微熱

「あら？　殿下、体が熱くありませんか？」
アリサはコージュ王子のネクタイを結んだ直後、そんな声を上げた。彼女の指先が王子の首筋を掠めたのだ。それだけで体の異変を感じ取るのだから、年季が入っていると言うべきか。
「いや。特に喉も頭も痛くはない」
「でも熱く感じます。すぐに王宮に連絡して、御典医に来て頂くよう手配致します」

式典から一週間後の日曜。大学はまだ春休み中である。
本日、コージュ王子は公務でトーキョー競馬場に行く予定だった。

王国内で行われるギャンブルは全て国営だ。そしてこの日、同競馬場では三歳牝馬のG？レース『桜華賞』が行われる。『桜華賞』は二十年前より？プリンス・コージュ杯？と呼ばれていた。
実は、三歳牡馬の三冠レースには兄王子たちの名前がついている。三人の王子が誕生した時、まさか四人目の王子が産まれるとは思わず……。コージュ王子のみ、牝馬のレースに名前がつけられることになったのだ。これにより、中等科の頃から毎年、王子自身が優勝杯を賜与（しよ）する為、競馬場に赴いている。さほど面白味のない公務の中、競馬場観戦は楽しいほうであろう。

王室専用ブースで観覧し、レース終了後はウィナーズサークルで優勝馬の表彰と写真撮影を行う。折角なら、もっと場内を見学したいところだ。しかし、大きなレース当日で観客も多く、王子は安全上決められたスペースしか移動出来なかった。

いささか窮屈な思いはしても、王子はこの公務を毎年心待ちにしている。理由は、専用ブースではアリサと二人きりになれるからだ。
「いまさら、そんな……」
王子の言葉にアリサは小首を傾げて笑う。どうやら、彼特有の冗談だと思っているらしい。だが、東の宮の自室以外では手を繋ぐことも許されない二人だ。コージュ王子にとって、この公務だけは特別であった。

年に一度の貴重な時間（デート）である。多少の発熱でキャンセルなど冗談ではない。
コージュ王子は、携帯電話で王宮の医官に連絡を取ろうとするアリサを、後ろから抱き寄せた。

「きゃ！　殿下……何をされるんですか？」
「何でもないって言ってるだろ。余計な奴を呼ぶな。邪魔だ」
「ですが……。明日から、陛下のご命令で大事な公務が入っておられます。今、お風邪など召されては」
「昨夜、バスルームで遊び過ぎただけだ。だから……今夜はベッドの上で我慢してやるよ」

夜のことを口にすると、アリサはすぐに真っ赤になる。五年前からその点はあまり変わらない。あの時、アリサはすでに二十歳だったが男性経験はなく、お互いが初めての相手だった。
初体験のことは、思い出すだけで下半身が熱くなる。コージュ王子にとって、人生が孤独ではないと知った運命の瞬間だった。
「アリサ……上を向けよ」
確かに熱があるかも知れない。あの式典の夜以降、コージュ王子

の体は餓えたようにアリサを欲しがる。勃ちっ放しと言っても過言ではないほどだ。
今、二人がいるのは、窓もなければ人の気配もまるでない場所――。
寝室の一番奥にあるクローゼットで二人は唇を重ねた。
アリサはいつも薄い色の口紅しか塗らない。もちろん、公式行事でドレスや民族衣装を着るときは別だ。しかし、それ以外は常にナチュラルメイクで……。それもこれも、王子の無茶に付き合う為である。
コージュ王子は、そのしっとりとした感触を味わうように、唇を強く何度も押し当てた。左手が自然に彼女の胸に移動し、白いブラウスの上からゆっくりと揉みしだく。思った通り、ブラジャーはシルクでパットの入っていないタイプだ。それだと衣類の上からでも、手の平に受ける感触が素肌のように柔らかい。
唇を端から端までなぞり、舌先を割り込ませる。スルリと滑り込む感覚は、まるで擬似セックスのようだ。さらに進もうとした時、アリサがコージュ王子の胸を押した。

「もう……時間が」
「クソッ！　あと十分だ。さすがにそれじゃ終わらない」

壁に掛かった時計に目をやり、王子は悪態をついた。
公務には行きたい。だが、この先まで続けたいのも本心だ。微熱で風邪とでも典医が判断すれば、公務は取り止めとなり、一日中アリサと一緒にいられる。誘惑に引き摺られそうになった瞬間、「公務を休まれるなんて」と女官らの小言を思い出し、コージュ王子はサッとアリサから離れたのだった。

「殿下、本当に大丈夫ですか？　殿下に何かあったら……」
「女官たちがお前をいびるのか？　それとも、あの首席秘書官が怖

いか？」
「そんなこと、どうでもいいんです。殿下が怪我も病気もされなかったら、それで……。五年前は、心臓が止まりそうになりました」
「ああ……そうだな」

五年前、コージュ王子は十五歳で王立大学に入学し、事故はその直後に起こった。
トーヤ、コージュ両王子を乗せた自動車に、大型トラックが突っ込んだのである。時速百キロを超す二十トンクラスのトラックだ。重戦車なみのパワーがあった。一方、王子が乗る車両は、銃撃や爆発物には備えのあるＶＩＰ専用車両であった。しかし、こういった攻撃は想定しておらず……。
トラックは数台の警察車両と護衛車両を弾き飛ばし、二人の王子を乗せた車両を巻き込み壁に激突。トラックの運転手は即死であった。
結局、車両は盗難車、運転手は身元不明で犯行声明もなかったのだ。
すぐ後ろにはクロード王子を乗せた車も走っていたが、巻き込まれずに無事だった。
当時は、その場にいなかったシオン王子の実家、クドウ伯爵家の陰謀説が囁かれたものである。それに反論して、現場にいながら無傷のクロード王子が怪しいと言われ、彼の実家ハヤシバラ伯爵家も叩かれた。
一方で、大怪我を負ったトーヤ王子の実家にも疑いの眼差しを向けられる。
なぜなら、直前で第一王子の車両が故障、コージュ王子の車に同乗することになったからだ。王妃の息子を狙ったはずが、当てが外れてヤマト公爵家も馬鹿な真似をしたものだ、と言われた。
どちらにしても、あの事故でトーヤ王子は重傷を負ったのだ。一

時期は重体とまで言われたが、現在は回復しているという。詳しい怪我の程度は伏せられており、コージュ王子には見舞いも許されなかった。
そしてあれほどの大事故に遭い、コージュ王子はかすり傷程度で済んだ。それを誰もが「神のご加護」「王の片鱗」と噂したのである。

あの事故が起きたのは、二人が結ばれて間もなくの頃だ。アリサはコージュ王子の無事な顔を見るなり、泣きじゃくって大変だった。
コージュ王子の場合、大学の往復など、圧倒的にアリサを同行しているケースが多い。彼女と一緒の時でなくて良かったと、王子は心底胸を撫で下ろした。
事故がきっかけとなり、王子は射撃や剣術、体術などあらゆる自衛手段を体得した。それだけでなく、機械工学から電子工学、果ては爆弾処理まで学んだのである。
自分だけではない。常に自分と共にいるアリサを守らねばならない。親衛隊や護衛官が守るのはコージュ王子だ。万一の時、アリサを守る人間は誰もいないのである。いや、彼女なら逆に、王子を守ろうとするだろう。
いつまでも、守られるだけの少年ではいたくない。それはコージュ王子の切なる願いだ。

直後、ひんやりしたアリサの手が、コージュ王子の額に当てられた。酷く心配そうな、子供の頃と同じ目で彼の瞳を覗き込んでいる。焦げ茶色の髪はしっかりと結い上げられ、襟足の後れ毛が何とも言えず艶(なまめ)かしい。
王子はアリサの手を掴み、
「大丈夫だと言ってる。それとも何か？　公務をキャンセルして、俺に可愛がって欲しいのか？」

「違いますっ！　もう、勝手にして下さい。倒れたって看病しませんからねっ」

アリサは少し怒っていて元気があるほうがいい。

そんな彼女を見たいが為に、わざと我がままを言うコージュ王子だった。

第１１話　扉の向こう側

王宮を出てトーキョーシティを西に向かう。車で約三十分、そこにトーキョー競馬場があった。
このトーキョー王国は十個の州に分かれていて、首都トーキョーシティはカントウ州に属する。他の州にも競馬場はあるが、基本的に大きなレースはここトーキョー競馬場で行うルールになっていた。

キャデラックベースのストレッチリムジンが、競馬場正面ゲート前に横付けされる。
後部座席ドアの左右に護衛官が立ち、その中央にコージュ王子が降り立った。周囲にはロープが張られ、警察官が数メートルおきに配置されている。物々しい警戒の中、一般市民からは一斉に拍手が沸き立つ。王子はいつものように穏やかに微笑み、手を上げて丁寧に国民たちの顔を見回した。

（本当に大丈夫かしら？　明日は……プリンスセスを空港まで出迎えなくてはいけないのに）

アリサは王子と反対のドアからそっと車を降りる。そのまま護衛官の後方を通り、王子の進む前方に先回りした。
コージュ王子の笑顔を見つめていると……。アリサの心は揺さぶられ、粉々に砕けてしまいそうな想いに囚われる。

今日の公務も年に一度の大事な行事だ。なんと言っても？プリンス・コージュ杯？である。コージュ王子が出席しなければ、色々言われることは目に見えているだろう。
しかも、王子は間もなく二十歳になる。これまで以上に王族とし

ての責務が重くなってくるはずだ。だが、コージュ王子は子供の頃から精一杯の笑顔で武装してきた。課せられた責任と懸命に戦ってきた少年である。なのに、王室関係者は更なる負荷を王子にかけるという。果たして、彼は無事に乗り越えて行けるのだろうか……。

そこまで考え、アリサは小さなため息をつく。

（わたしが心配することじゃないんだわ）

彼女は首を左右に振り、奥歯を噛み締めたのだった。

明日、王子の婚約者候補であるアイリーン王女が我が国を訪れる。王女をエスコートして空港から王宮に戻り、明日一杯を掛けて、コージュ王子が王宮内を案内する予定だ。どこに行くより、王宮の敷地内のほうがカメラを向けられずに済む。より、二人きりの時間が取れることは間違いないだろう。

アイリーン王女は現在十八歳。写真を見る限り、髪は緩くカーブしたブルネットで、母親のメアリ女王に良く似ていた。瞳はガラス細工のように煌くブルーだ。色々な血が混じり合った、独特な美しさと気品が垣間見える。何より、二十歳の王子にはお似合いのプリンセスであった。

翌日はトーキョーシティ近郊を案内する。日程はもちろん極秘だ。秘書官のアリサと近衛部隊の一部のみが知っている。計画書にも具体的な地名は入れず、カイヤ補佐官に提出した。

そして、歓迎レセプションは十一日に予定。コージュ王子の誕生パーティと合同で行う。

国王はパーティの席上でアイリーン王女との婚約を発表し、コージュ王子を王太子に指名するつもりらしい。

それは、アリサにとって世界の終わりと同じであった。

王子がこの日の為に敷かれた赤絨毯の上を歩き、アリサの方に向かってくる。前を通過する一瞬、軽く頭を下げ、コージュ王子の背後に付き従うのがアリサの役目だ。
その時、王子の左脇をガードするアヤカワ中尉と視線が合った。いつもなら優しく微笑んでくれる。だが、今日は違った。どこか険しい眼差しで、アリサを見定めている。
背筋がゾクッとして、思わず目を逸らしてしまうアリサであった。

☆。・‥＊‥・。★

「なあ、アリサ……こないだの夜なんだけど」

そんな風に、アヤカワ中尉から話しかけられたのは三日前のこと。
全ては式典の夜、コージュ王子の勝手な振る舞いのせいであった。電話中の出来事を思い出すとかなり恥ずかしい。アリサはどうにも気まずくて、中尉を避けていたのである。
だが、呼び止められては逃げる訳にもいかず……。

「何？　ユキちゃん」
「ん、いや、随分遅くまで起きてたんだなぁと思って、さ」
アリサは無理矢理笑顔を作り、
「いやだ。ウトウトしてたところに、ユキちゃんのメールが来たのよ。心配掛けたんだと思って、すぐに大丈夫だって伝えようと思って」
寝惚けていたから電話の応答がおかしかった、そう思って貰いたかった。

だが、アヤカワ中尉の表情はどこかよそよそしい。いや、緊張していると言うべきだろうか。何かを言いたくて、言えずにいる。そんな様子だった。
「あの……わたし、仕事の途中だから。今日は例の観光コースのルート確認に来たの。結局、三ヵ所に絞ったから、随分楽になったと思うわ」

ここは近衛部隊、別名、王宮親衛隊の庁舎内である。
王宮前広場から堀に掛かった橋を渡り、正門横にあるのが庁舎の建物だ。コンクリート打ちっ放しの、味も素っ気もない四階建ての庁舎である。深い緑に囲まれひっそりと建っているので、ほとんど目立たない。
時間はちょうど、昼の二時を過ぎた辺りだ。庁舎に残っている近衛兵は少ない。昼食を終え、それぞれの配置場所に戻った時間帯である。アヤカワ中尉の場合、アリサが持ち込んだ用件で上司に呼ばれて戻って来たところだった。

「それじゃ……」
「待てよ。ちょっと」
「え？　あっあの」

腕を掴まれ、引っ張り込まれたのはトイレ横にある備品倉庫であった。
アリサは、普段の中尉からは考えられない行動に面食らってしまう。
「どうしたの？　ねぇ、何かあった？」
アリサの質問に、アヤカワ中尉は沈黙で返した。窓もない倉庫では昼間とはいえ真っ暗だ。スイッチの場所もアリサには判らず、と

にかく外に出ようとする。
その時だ。アヤカワ中尉が口を開いたのだった。
「東の宮の四階フロアには、監視カメラは設置されてない。でも、エレベーターの中にはあるんだ。知ってるよな」
「だから……何？　それが何だって言うのよ」
中尉の言いたいことが判らず、アリサは背筋を伸ばすと、きつい口調で答えた。
だがそんなアリサに、アヤカワ中尉は恐ろしいことを口にしたのである。
「……お前が心配だった。本当に酷く疲れてる感じだったから。エレベーターの中で倒れるんじゃないかって、モニターを見つめてたんだ。すると、四階に到着して扉が開いた瞬間――誰かの腕が伸びて、お前は外に引っ張り出された。俺は慌ててカメラの向きを変えたけど……すぐに扉が閉まったんだ。初めは侵入者がいて、お前が襲われたんだと思った。けれど……窓も、非常扉も、開いた形跡は全くない。そして、四階に居るのはたった独り――」
次第に、アリサの頭から足に向かって血が流れ落ちていくのを感じた。今にも倒れそうだ。いや、いっそ倒れてしまいたい。
その後、アヤカワ中尉はセンサーを全て再チェックしたらしい。侵入者の可能性がないことを確信した上で、当直の女官に四階フロアを確認に行って貰ったという。当然、異常なし、だ。
あの腕はコージュ王子に違いない。だが、王子の人柄を思えば、秘書官にあんな乱暴な真似をするはずがないのだ。モニターに映ったそれは、男が自分の女を扱う時の仕草を似ていた。アヤカワ中尉はしばらく悶々と悩み続けたという。そして、深夜であることは承

知の上で、アリサにメールを送ったのだ。

「アリサ……まさかとは思うが、あの時、横に殿下がおられたのか？　あの時間、何をしていたんだ？　お前、まさか……」

この時アリサは真っ暗な部屋に感謝した。そのおかげで、動揺を露にした顔を、アヤカワ中尉に見られず済んだのである。

第１２話　ガラス張りの密室（Ｒ）（前書き）

☆軽い性的描写があります。Ｒ１５でお願いします。

第12話　ガラス張りの密室（R）

「……さん……シンザキ秘書官！　一体、どうしたんですか？」
アリサはハッとして顔を上げた。
すると、十歩ほど先にコージュ王子たちは進んでおり、全員がアリサを振り返っている。声を掛けたのはコージュ王子であった。
「失礼致しました！」
慌てて頭を下げると、アリサは小走りで王子たちに駆け寄った。

ここトーキョー競馬場の王室専用ブースは、Mスタンド側の六階にある。前面は防弾ガラス張りで、空調の整った安全快適な空間だった。
クラシカルなヴィクトリアチェアが五脚、窓ガラスの前に並んでいる。一人掛けで、専用のモニターがテーブルに組み込まれていた。
後方には同じチェアの二人掛け、三人掛けが……こちらは大きめのテーブルとセットだ。部屋の隅にはミニバーがあり、各種ドリンクが並んでいた。もちろん、アルコールも用意されている。
この国の飲酒可能年齢は二十歳だ。しかし、慣例のようにコージュ王子の時にも毎年アルコールがあった。

「ったく、迷惑な話だな。置いてあったら飲みたくなるのが人間だろ？」

案内係や場内支配人が部屋から出た途端、コージュ王子の口調が変わる。
ラベルに白い馬が描かれたスコットランドのウイスキーを手に取り、コージュ王子は不満そうに呟いた。彼はレモンを一滴垂らした、

ウイスキーのハイボールが好みなのだ。これを知ってるのもアリサだけであろう。

「戻ってからにして下さいね。今年までの辛抱ですし……」

「馬鹿言え。来年だって同じだ。公務中に酒を飲むようなプリンスがどこに居る？」

確かに成年王族だからといって、公務中に飲酒はまずい。では、このアルコールは何のために置かれたものなのか、アリサは首を捻った。

「昔の王族はピンキリだったんだ。ジイさんあたりの頃は、まだまだ王族男子も数がいたからな。不敬罪って奴もあったし」

そう言いながら、コージュ王子はウイスキーのボトルをカウンターに戻した。

「ここが出来た頃、女を連れ込んで騒いでた王族もいたって話だ。なあ、アリサ……そいつらは、何をやってたんだろうな？」

王子は不敵な視線をアリサに向けた。

トーキョー競馬場が開設して七十年以上が経つ。建物は増改築を繰り返し、ほんの十年前に全面リニューアルをしたばかりだ。その時に、王室専用ブースのガラスは全て防弾に取り替えられた。

リニューアル以降、この部屋で問題を起こした王族はいない。コージュ王子が言うのはそれ以前、ということだろう。

「殿下、ここはガラス張りなんですから！　外からカメラで撮られたらどうされるおつもりですか？」

アリサは警戒を露にして、コージュ王子を牽制する。

「おいおい、俺は何も言ってないぞ。何をやってたか聞いただけだ」

その言葉を聞いた瞬間、アリサは後悔した。気を回し過ぎて墓穴を掘ってしまったようだ。逆に、王子に付け入る隙を与えてしまった。

アリサは熱くなる頬を口元から引き締める。そして、なるべく平然とした声を作って言い返した。
「そうですか。わたしに聞かれましても、産まれる前のことなど存じ上げません」
「じゃあ、教えてやろうか？」
「ええ。ぜひ」

（そう何度も、殿下の罠にはまったりしないわ）

アリサはコージュ王子に視線を向けず、わざと冷たく答えた。そして、案内係から渡された出走表に目を落とす。
――その時である。
彼女に脚に何かが触れたのだ。
アリサは今、各チェアに備え付けられたモニターテーブルの前に立ち、操作を確認していた。馬券を買う訳ではないが、オッズや血統表などを見ることが出来るからだ。王子に指示されたらすぐに出せるようにしておきたかった。
コージュ王子はいつの間にか彼女の真横に立ち、ピッタリと体を添わせている。正面のガラス越しにカメラで撮られても、二人でモニターを覗き込んでいるようにしか見えないだろう。だが、テーブルの影に隠れた位置で、タイトミニの裾から王子の手が入り込んで来た。

「で、殿下……お止め下さいっ」
「とか言いながら。俺の好きなガーターストッキングを穿いてきたんだな」
「それは、わたし自身がパンストが嫌いなだけです！　殿下の為じゃな……やぁ」

人差し指に下着を掛けると、コージュ王子は何かを拾うふりをし

ながら座り込んだ。そのままスルスルと、くるぶし辺りまで白い小さな布地が引き下ろされる。王子は丁寧に片足ずつ上げさせ、アリサから下着を奪い取ったのだ。
「さて、シンザキ秘書官、コーヒーでも淹れて貰おうか」
しらっとした口調で、王子はそれを戦利品よろしくポケットに納める。
「今日は……短めのスカートなんですから。返して下さい」
「スカートの中身なんて、普通に歩いてたら見られやしないさ。タイトなら風に吹かれることもない。だろ？」
「そういう問題じゃ……」
アリサに下着を見せて歩く趣味はない。見られたら、ではなく、穿いていないことが酷く恥ずかしいのである。だが、王子もそれを判っていてアリサを困らせているのだ。
「そ、そんなものを、ポケットに入れていることが知られたら……殿下のほうこそ、お困りになるのでは？」
「その時は、落し物を拾ったとでも言っておこう」
コージュ王子はアリサを見つめ、意地悪に、それでいて魅惑的に微笑んだ。

☆。・：＊：・　。★　。・☆。・：＊：・　。★　。

脚をピッタリ閉じて、アリサは壁際に立っている。
出走馬の本馬場入場が始まり、それに先立って王子の観覧が場内にアナウンスされた。その時だけ、彼はカメラに映る位置まで移動し、場内モニターにはコージュ王子の上半身が映し出された。
それ以外は、三人掛け用のチェアに座り、アリサの淹れてくれた温かいコーヒーを口に運ぶ。

「ん？　ああ、なんだ支配人の言ってた馬はコイツか……。すっかり忘れてた」
出走表に書かれた馬名に見覚えがあった。
それもそのはず、一歳馬のセールを見学に行き、その時の一頭に王子は名前を与えたのだ。馬主の娘という小学生にねだられ、快く応じたのである。
「何が特別な馬でも？」
「？シャインブラッサム？俺の名付けた牝馬だ。こんなレースに出るような、強い馬だったんだな」
「それは……確か二年前の」
アリサも思い出したらしい。
彼女も気になるのか、少しずつ王子に近づいて来た。
「輝く花ですか？　殿下のことですか？」
気付いているのか、いないのか。アリサはコージュ王子の手が届く範囲まで来て、嬉しそうに微笑む。

（――お前のことだよ）

そう口に出して言ったら、アリサはどんな顔をするだろうか？
二人の出逢った桜の花（チェリーブラッサム）から取った馬名。規定によりカタカナ九文字以内と言われ？シャインブラッサム？になった。
コージュ王子にとってアリサは、桜の下で見つけたたった一つの光。

王子の瞳に妖しい輝きを感じたのだろう。アリサは身を翻そうとした。その寸前、王子は彼女の手首を掴む。逃げる暇を与えず、彼の腕の中に抱き寄せた。
そして唇を奪った瞬間、アリサの身体が小さく震えたのだ。抵抗らしい抵抗もせず、彼女は王子にされるがままになっている。どう

やら無防備な下半身が、彼女の理性に目隠しをしたらしい。

「アリサ、出走まで後二十分ある。そのまま、俺の上に乗れよ。？シャインブラッサム？より先に、ゴールさせてやる」

桜より鮮やかな色に耳まで染め、慎ましやかな秘書官は脚を開いた。

第13話　愛さないで…

『――さあ、四コーナー回って最後の直線に向きました。ピンクの帽子、ゼッケン十八番、シャインブラッサムが抜け出した！　後続に三馬身四馬身と引き離して行く。――残り六百メートル、シャインブラッサム先頭だ。八馬身引き離して、今、ゴーールイン！本年度のプリンス・コージュ杯、桜華賞馬はシャインブラッサム号です！！』

カメラに映るポジション、ガラスの前に立ちコージュ王子はスピーカーから流れる声に相好を崩した。
どこから撮られているか判らない。大袈裟に喜びを表すポーズは厳禁である。そんなことを考えながら、コージュ王子は指を揃えたままゆっくりと手を叩いた。

「アリサ、俺たちの馬が勝ったぞ！」
壁際のチェアにしどけない姿で横たわるアリサに向かって、コージュ王子は声高に言う。
「おめでとう、ございます……殿下」
ゆっくりと体を起こしてアリサは答えた。
その返事がどうも気に入らない。コージュ王子は大股でアリサに近づくと、無言で彼女の顎に手を掛け上を向かせた。
「もっと喜べよ。シャインブラッサム――桜の花の下で出逢った光砂（リサ）、お前のことだ」
「で……ん、か？」
アリサの瞳が大きく開かれた。何を言われたのかよく判らない、

といった様子だ。そして、ようやく声を出そうとしたアリサの口を、コージュ王子は強引に塞いだ。
照れくさいと言うのもある。泣かれるのも面倒だ。いやそれ以上に、ただ……アリサの唇が欲しかった。
コージュ王子にとって女性はアリサ独りである。他には誰も要らないし、欲しくもない。
三人の兄たちがさっさと結婚して後継者を作り、誰かが王太子に立つことだけが彼の願いだ。どれほど頑張っても父にとって、コージュ王子は最愛の妻を奪った不要な息子でしかないのだから。王国の為にも、そして国民の為にも、後ろ盾のしっかりした王に相応しい人間が王太子になるべきだ。王位争いなど、王室を衰退させるだけで愚の骨頂である。
そしてその時こそ、コージュ王子は？王妃の息子？という呪縛から逃れることが出来る。

「殿下……もうだめ、すぐに人が」

わずかな隙間から、喘ぐようなアリサの声が漏れ聞こえた。
胸に触れたい衝動を抑えながら、コージュ王子は彼女の上着を整え、ボタンをはめてやる。だが、結い上げた髪が数本ほつれていた。解いて結びなおすのは無理だろう。後れ毛の数が増えていることに、目敏い人間なら気付くかも知れない。例えば、ユキト・アヤカワ中尉。アリサにプロポーズしている男なら……。
直後、ドアをノックする音が聞こえた。
「護衛官のアヤカワです。殿下、表彰式の為、ウィナーズサークルに移動していただくお時間です。開けてよろしいでしょうか？」

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

アヤカワ中尉がドアを開け、中に入って来た。その瞬間、中尉の頬が歪んだのだ。アリサは思わず、目を伏せてしまう。

（気付かれた？　いいえ、例えそうでも、証拠はないんだから）

アリサは膝をしっかりと閉じ、出来る限り怪しまれないよう背筋を伸ばして立っていた。しかし、歩き出そうとした時、思い出したのだ。下半身を包むはずの下着が、王子のポケットに入ったままであることに。

身体の一番深い部分に放出され、アリサの中に残ったものが少しずつ流れ落ちてくる。そこには遮るものが何も無い。床に滴り落ちたら、その正体はすぐに知られてしまうだろう。ぬめりが内股を伝う感触に、アリサの動きが止まった。

「あの……申し訳ありません。先に行って頂けますでしょうか？」

「では、ドアの外で待っていよう。出ようか、中尉」

コージュ王子は事情を知ってか知らずか、女性に対する優しさを示した。

王室専用ブースには、当然、洗面所も完備している。男性用と女性用に分かれ、女性用にはパウダールームもあった。

そこに駆け込もうとしたアリサの背に、アヤカワ中尉の声が突き刺さったのだ。

「殿下、室内に妙な匂いが致しますね。換気が止まっているのでしょうか？　それとも……殿下が何か、特別なことをなさいましたか？」

「そうかな？　不審な物には気付かなかったが……。気になるなら、後で調べさせておくように」

「……承知致しました」

二人の会話を壁越しに聞き、アリサの鼓動は激しく打ち始めた。

あの日、庁舎内の倉庫でアリサは言ったのだ。

「ええ、そう。わたしの腕を掴んだのは殿下よ。ああ見えて、時々悪戯をするの。小さい頃から一緒で、わたしをビックリさせて笑ってるのよ。それで殿下の息抜きになるなら、別に構わないと思って……。電話は、ほんと言うと掛けるつもりはなかったの。何となく触ってたら繋がっちゃって……だから挙動不審に感じたんじゃないかな？　ユキちゃんの考え過ぎよ」

そんな風に、努めて明るく答えた。だが、アヤカワ中尉の瞳は冷たく「だったら……いい」と一言。アリサには、彼の疑惑を消すことは出来なかった。

あれ以来、中尉の視線が怖い。特にコージュ王子と一緒の時は、探るような眼差しを向けてくる。中尉に全てを知られるのではないか、いや、もう知られているのかも知れない。堂々としようと思えば思うほど、アヤカワ中尉の存在にアリサは怯えていた。

それでも、王子に話すことだけは出来ない。

王子のアリサに対する執着はかなりのものだ。そして彼の温和な性格が、表面的なものに過ぎないことを彼女は知っている。王子の様子から、中尉がアリサに求婚していることを聞いたのかも知れない。その中尉にアリサと王子の関係を知られたとなれば……彼女を失うまいと暴走する可能性がある。

全てが明るみに出る前に、そして王子から捨てられる前に、自分から終わらせなければならない。それが、年長者であるアリサの責任なのだ。

（なのに……どうして、あんな）

コージュ王子は競走馬に、あんな名前を付けたりしたのだろう。

そして「俺たちの馬だ」――王子は確かにそう言った。ひょっとしたら、彼はアリサに特別な想いを抱いているのかも知れない。

アリサは個室に入り、震える指で丁寧に後始末をする。

最初の時は何も注意を払わなかった。月のものが遅れた時、アリサはヒヤッとしたのを覚えている。その後数回は、ドラッグストアで購入した避妊具を使った。もちろん、買いに行くのはアリサだ。まさか一国のプリンスに、『ゴム用品』を買いに行かせる訳にはいかないだろう。だが、手渡すのも気恥ずかしい。それに、お互いに慣れていない為、使用中に外れることもままあった。

万に一つでも妊娠したら、それこそ取り返しがつかない。アリサはトーキョーシティの外まで行き、病院でピルを処方して貰うようになった。それ以来、毎日欠かさず飲み続けている。

コージュ王子はアリサがピルを飲んでいると聞いて以降、一切の避妊は彼女任せだ。

（もし……私がピルを飲んでないと言えば、どうするかしら？）

亡くなった王妃のこともあり、民間出身のお妃には反対意見も多い。おそらく、コージュ王子が王太子に選ばれなくても、妃には貴族か海外のプリンセスが選ばれるだろう。でも、妊娠していたら……。幸か不幸か側室制度は廃止にならず存続している。コージュ王子誕生時のドタバタに紛れて、廃止の決定がされないまま二十年経ってしまったのだ。

しかし？王太子の側室？それは愛人に等しい呼び名であった。

三王子の母親は、それぞれ王制存続の為という大義名分があり、鳴り物入りで輿入れしたのである。国王自身も「側室を娶る」と発言し、妻に等しい扱いだった。

だが、二十年前とは状況が違う。今は誰も側室など必要としていないのだ。もし、五歳も年上の秘書官を妊娠させたとなると……。悪く言われるのはアリサだけではない。聖人君子と讃えられてきたコージュ王子の名誉は地に堕ちる。そして、下品な噂と共に嘲笑の的となるのが目に見えていた。

（出来ないわ……そんなことだけは出来ない）

コージュ王子は知らないのだ。

国王が彼を認め、王太子にすべく一計を案じていることを。後見のない彼の為に、ワシントン王国の第一王女を王妃に決めたのだろう。そうすれば、二国間の同盟強化に賛成する議員や実業家、有識者など、あらゆるバックアップをコージュ王子は得ることが出来る。

国王に認められることは、王子の長年の夢であった。その邪魔だけは出来ない。

（悲しむのは、わたしだけのはずだったのに……）

アリサは一つの決意を胸に秘めたのだった。

第１４話　君を守る資格

全て例年通りであるはずだった。
コージュ王子の登場と共に、観客からは歓声が上がる。場内は熱気で包まれ、人々は興奮の渦に巻き込まれた。何と言っても、王子が名付けた牝馬が彼の名前を冠する大レースで優勝したのだ。しかも大差をつけての勝利である。偶然とも奇跡とも呼べる瞬間に立会い、黙って見ていられる方が不思議だ。

ウィナーズサークルに足を踏み入れた一瞬、コージュ王子は何かの違和感を感じた。
しかしそれは、大歓声に飲み込まれ……消えてしまう。

（気の……せいか？）

そこには、馬主、騎手、調教師、厩務員、生産者と多くの関係者が並んでいた。王子は緑の芝生の上に立ち、プリンス・コージュ杯を授与する。表彰式を終えると次は写真撮影だ。王子の口取りで記念撮影をして、表彰式はお終いとなる。
コージュ王子は、シャインブラッサム号を目の当たりにして息を飲んだ。
一歳馬の頃とは馬体の張りや毛づやが違う。四白流星、美しい尾花栗毛（ばなくりげ）のシャインブラッサム号は、まるで愛くるしい幼稚園児が美少女に変身したかのようであった。
コージュ王子にとって馬は身近な存在だ。王宮には厩舎があり、記念行事のパレードは馬車で行う決まりになっていた。そして乗馬は王室の人間に課せられた、たしなみの一つである。
それでも、これほど美しい馬を見たのは初めてだ。その名の通り

『光り輝く華』が咲き誇っていた。

（まるで、アリサのようだ）

そんな想いが王子の視線をアリサに向けさせる。と同時に、先ほどのアヤカワ中尉の言葉を思い出していた。

中尉は間違いなく、コージュ王子とアリサの関係を疑っている。式典の夜の電話がきっかけになった可能性は高い。だが、アリサは一言も彼に話してはくれなかった。

プロポーズされていることも。ここ数日、中尉の彼女に向ける眼差しが微妙である理由も。二人に何かあったことは、王子の目にも明らだ。なのに、アリサは何も言わない。

（アリサは……本当は俺との関係を望んでなかったのか？）

どんな時も彼女は飛んできてくれた。王子の要求に逆らったことなど一度もない。あれは全て、ただの忠誠心に過ぎなかったのか。アリサだけは、頑張らなくてもコージュ王子の存在を認めてくれた。アリサの愛が幻なら……この先、何を信じていいのか判らない。

彼の体はわずかに傾き、地面が揺れるような錯覚に囚われた。

「殿下。いかがなさいました？　やはり、ご気分でも」

スッとアリサが隣に立ち、周囲に不安を感じさせない笑顔でコージュ王子に問い掛ける。

「大丈夫。後は撮影だけです。行きましょう」

公務用のスマイルを顔に張り付かせ、彼は数歩馬に近づいた。

その時だ。空気を切り裂くような、極めて小さな音が王子をはじめ数人の耳に届いた。

直後、シャインブラッサム号が嘶（いなな）き――なんと後ろ足で立ち上が

った！

「殿下っ！　こちらへっ！」
「誰か、コージュ王子殿下を」
「馬を押さえろ！」

ウィナーズサークルでは一斉に怒号が飛び交う。その切迫感は馬を更に怯えさせた。手綱を掴み、懸命に落ち着かせようとする厩務員を振り払い、暴れながら後ろ足で後方を蹴り始める。
その時、なんとアリサはコージュ王子の前に立ち、彼を庇おうとしたのだ。王子は慌てて手を伸ばし、アリサを自分の方に引き寄せようとした。
しかし、彼女の服に触れた瞬間、上着の袖が指先からスルリと抜ける。
「アリサ！　何をしているんだ！」
アリサの視線の先には小学生の少女がいた。馬主の娘で、二年前コージュ王子に名づけをねだった本人である。少女は腰を抜かしたように、半泣きで馬の横に座り込んでいた。アリサはその少女目掛けて走って行く。
「アリサッ！」
コージュ王子も駆け寄ろうとするが、護衛官たちに阻まれた。そのまま、ウィナーズサークルから押し出されそうになる。
だが、この時の王子の目は、アリサしか映してはいなかった。彼は数人の護衛官を振り払い、ウィナーズサークルに駆け戻ろうとしたのだ。だが、彼が走り出そうとした時、横をすり抜けて行く人影が……。アヤカワ中尉だ。
中尉は一目散にアリサに向かって行く。あと数メートルの位置で、彼は体を前のめりにしてアリサに飛びついた。
その時、少女を抱き締め座り込むアリサの頭上に、馬は前足を下

ろそうと……。

☆。・‥＊‥・　。★　。・☆。・‥＊‥・　。★　。

最初は王子に怪我が無いように、アリサの思いはそれだけだった。しかし目の前で少女が転んだのだ。しばらく見つめるが、近くの大人はそのことに気付かない。このままでは少女が馬に蹴られてしまう。馬が再び前足を上げて立ち上がった時、アリサは無意識で少女に向かい走り出していた。

アリサは衝撃に耐えようとグッと息を止める。だが、そんな彼女に誰かが覆い被さったのだ。それが誰か、確認する余裕もなく。数秒後、彼女の耳にどよめきが広がった。

アリサはゆっくりと顔を上げる。恐る恐る開いた瞳に映ったのは……金色（こんじき）のたてがみを持つシャインブロッサム号に跨るコージュ王子の姿であった。

王子は渾身の力で手綱を引き絞り、中腰になって馬を操る。逆光の中、浮かび上がる姿は――まさしく騎士と呼ぶに相応しい。その類稀（たぐいまれ）なる凛々しさに、アリサの目は釘付けとなり、激しく心を揺さぶられた。

「シンザキ秘書官、怪我はないですか？」

馬上から、異様なほど落ち着いた王子の声が聞こえた。

「は……はい」

「アヤカワ中尉はどうです？」

「はっ！　申し訳ございません」
中尉はすぐさま片膝を芝生につき、頭（こうべ）を垂れる。
アリサは自分に覆い被さった人物が、アヤカワ中尉であったことを知り驚いた。彼はコージュ王子の護衛官なのだ。何をさて置いても、最優先で守るべきは王子であった。中尉の行動は、たとえどんな理由があっても、職務怠慢のそしりは免れない。
アリサは立ち上がると、体を二つに折り頭を下げた。
「申し訳ありませんっ！　わたしが勝手なことをしたばかりに……。殿下にお怪我はございませんでしょうか？」

……しばらく待つが、コージュ王子からの返事はない。アリサは不安になってソッと顔を上げた。そして二人の視線が絡んだ直後、王子は目を逸らしたのだ。
「大事無い」
一言呟き、彼は馬から下りる。
そのまま、アヤカワ中尉ら護衛官に守られて、コージュ王子はウィナーズサークルから出て行くのだった。

アリサはショックのあまり、後を追うことも出来ない。
目を逸らす寸前――王子の瞳の中に悲しみと孤独が浮かんだ。捨てられた子犬のような……例え様のない切なさに、彼女は胸が詰まるような罪悪感を覚える。
その時、上着の裾をクイと引かれた。振り返ると、先ほどの少女が立っている。
アリサは少女の背中を撫でながら「大丈夫？　怪我はなかった？」と優しく尋ねる。
まだ十歳にもなってはいないだろう。少女はカタカタ震えながら、アリサに何かを差し出したのだ。少女の手の平には銀色の小さな玉が乗っていた。
「誰かが……シャインにコレを当てたの。それでびっくりして……。

シャインはホントはいい子なの」
少女は目に涙を一杯浮かべ、必死で言う。
「ええ、判ったわ。プリンスにそう伝えるから」
アリサは玉を受け取り優しく微笑んだ。すると少女も、「ありがとう」と少しだけ笑顔を見せてくれた。

銀の玉を握り締め、アリサは少し考えた。そして、王子たちと入れ替わるようにやって来た警察官に会釈をして、その場を立ち去ったのである。

第１５話　愛の犯した罪（Ｒ）（前書き）

☆陵辱的な描写があります。Ｒ１５でお願いします。

第15話　愛の犯した罪（R）

「ユキちゃん！」
アリサは近衛部隊の庁舎前で、アヤカワ中尉が出てくるのを待っていた。
ポケットの中には例の『銀の玉』がある。馬主の娘から手渡されたものだ。事故か事件か調査するのは警察の仕事だろう。本来なら駆けつけた警察官に事情を説明して、証拠の品を預けるのが筋である。
だが……。

「これがコージュ王子を狙ったものだ、と？」
「もちろん、こんな物で殿下のお命が狙えるなんて思ってないわ。でも、もう少し消極的に……。例えば怪我をさせて、アイリーン王女の接待を出来なくさせるとか」
「そんなことをしてどうするんだ？　代わりのプリンスか……駄目でも別の人間がご案内すれば済むことだろう」
中尉にアッサリと言い返され、アリサは口を閉じた。

アイリーン王女の接待は他の人間では駄目なのだ。ワシントン王国第一王女との婚約は、彼を王太子にするための第一歩なのだから。
だが、それをアヤカワ中尉に話していいものかどうか、アリサは悩んだ。
「これは……殿下にとって、成年王族として初めての公務と言えるものよ。仮に不測の事態であったとしても、直前のキャンセルはマイナスになるわ」

アリサはどうにか言い繕う。
そんな彼女にアヤカワ中尉は冷ややかな視線を向けた。
「ふーん。随分熱心なんだな。そんなにポイントを稼いで、何が手に入るんだ？」
「何って。わたしはただ、これが自分の仕事だから」
アリサの言葉を無視し、中尉は銀の玉を手の平で玩(もてあそ)んだ。
「どこにでもありそうだが……パチンコ玉より少し大きい、か。ゲームで使う物かも知れないな。刻印があるから、製造元はすぐに割れるだろう。それに、場内の監視映像を確認してみてもいい。運が良ければ犯人が映ってる可能性もある」
中尉の言葉にアリサは目の前が開けた感じがした。

現場の警察官には渡せなかった。理由は明白だ。？王妃の息子？を煙たがるのは、かなりの権力を持つ人間に他ならない。これが唯一の物証であるなら、証拠隠滅に乗り出すに決まっているからだ。
その点、王宮親衛隊のアヤカワ中尉なら、少なくとも国王陛下に背く行為はしない。

アリサがホッとして、
「ありがとう、ユキちゃ」
「礼を言うのはまだ早い――」
唐突に、アリサはお礼の言葉を遮られた。しかも、中尉の唇によって。

二人は人目を避けるように建物の陰で話をしていた。人に聞かれたくなかったので、アリサから誘ったのだ。それが裏目に出てしまう。
コージュ王子以外の男性と、初めて唇を重ねた。煙草の匂いがす

る。アヤカワ中尉自身が吸うのではなく、同じ分隊に喫煙者がいるのだろう。髪や制服にも染み付いていた。

「や……いや……めて……ユ、キ」

離れようとすると、今度は庁舎の建物に背中を押し付けられた。アリサは身動きが取れない。

キスはしだいに激しさを増し、中尉の舌先は彼女の唇を割り込もうと必死になる。無精ひげがチクチク肌に当たって痛い。王子のキスをそんな風に感じたことはなかった。おそらく王子は髭の薄い体質なのだろう。男性によって違うのだ、とアリサは初めて知った。

その時、中尉の大きな手が彼女の太腿に触れたのだ。

「ん……んんっ」

無骨な指先がスカートの裾を捲り上げ、秘密の場所に向かって進む。

「んっ！　や……いやっ！　何するの……やめ」

唇が離れた瞬間、アリサは声を上げた。だが、すぐにもう片方の手で口を塞がれてしまう。もがいて逃げようとするが、大柄な男性相手ではどうにもならない。しかもこの場合、どこを押さえれば動けなくなるか熟知しているのだ。肘と膝で動きを封じられ、アリサは中尉にされるがままだった。

「あのままリムジンで戻って来て、ずっとここで待ってたんだよな。東の宮にも王宮の秘書官室にも行ってないなら……スカートの下は何も穿いてないんだろう？」

中尉の吐き捨てるような言葉に、アリサは目を見開いた。

（まさか……王室専用ブースでのことを知ってるの？　そんな……どうして？）

アリサは懸命に首を左右に振り続ける。だが、中尉は途中で止めようとはしない。そのまま、彼女の首筋に唇を押し当て、痛いほど吸い付いた。ざらついた舌が肌を這う感触に、アリサは吐き気を覚える。

「お前が……殿下を誘ったのか？　何でそんな真似を……。俺たち平民が王子の妃になれるわけがないだろう？　どうして俺じゃ駄目なんだ。アリサ、頼むから目を覚ましてくれ！」

アヤカワ中尉の顔は苦悩に満ちていた。

今、中尉に襲われているのはアリサのほうだ。それなのに、まるで彼女に責任があるとでも言いたげだ。或いは、アリサがコージュ王子を誘惑したかのような……。

（殿下が……わたしのことを話したの？）

下着を取り上げたまま返してくれなかった。そのことを知っているのは、アリサとコージュ王子本人だけである。

この暗がりでは顔を近づけて、やっと表情が見えるくらいだ。それ以外の動作は音と感覚で知るしかない。

その時だ。腰の辺りでファスナーを下ろす音が聞こえた。しばらくすると、中尉の荒い息を耳の奥で感じ……。同時に、火傷しそうなほど熱い高ぶりが、内股を伝って潜り込んで来たのだ。

「殿下のことは諦めろ。俺が幸せにしてやる……アリサ」

強引に片方の脚を持ち上げられた。脚の間に中尉の欲情が押し当てられ――その瞬間、薄い布地が彼の侵入を阻んだ。
その瞳が大きく開き、アリサの目を食い入るように見つめている。直後、彼女の手足は自由になり、当然のように中尉を突き飛ばしたのだ。彼は数歩よろけて、地面に座り込む。

「……殿下に、何を聞いたの？」
アリサの声は掠れて、震えていた。
「それは……」
「いいえっ！　たとえ何を言われたとしても、力尽くで――なんて。レイプに正当な理由なんてないわ！　最低……信頼してたのに。だから……今日だってずっと待ってたのよ。ユキちゃんなら、ってお願いしたのに」
「アリサ……すまない。殿下に……君の下着を見せられ、それで」
「聞きたくないっ！」

アリサはスカートの裾を整えると、外灯のある道路に向かって走り出した。

☆。・：＊：・　。★　。・☆。・：＊：・　。★　。

「殿下……その。アリサ、いえ、シンザキ秘書官のことですが」
王宮に戻った直後、わずかな時間だけコージュ王子とアヤカワ中尉は二人きりになった。
「彼女がどうかしましたか？」
「結婚と同時に、秘書官を辞めさせて頂きたいと思いまして……」

「それは、なぜです？」
「その、子供も早く欲しいですし」
中尉の真剣な口調に、コージュ王子はわざとらしく笑ったのだ。
「それは……確かに。ひょっとしたら、もう出来ているかも知れない」
「い、いえ、そんなことは」
「もし、私の子供が出来ていたら……彼女を手放す訳にはいかなくなる。そうでしょう？」
瞬時に、中尉の瞳孔が開いた。
邪魔な護衛官さえいなければ、アリサは王子ひとりで守れたのだ。彼は表彰台を踏み台にして、馬の背に飛び乗った。危険な真似をした、と父の怒りを買っても構わない。何としてもアリサを守りたかった。そんな彼の目に映ったのは、アリサをしっかりと抱き締めるアヤカワ中尉の姿だった。
「で……んか？　何も仰っているのか」
「とぼけなくてもいいんだ、中尉。君も気づいていただろう？　積極的に上に乗られては、抗う術はなかったよ。不慣れなもので、彼女を妊娠させてしまったかも知れない。だが……どうやら、アリサはそれを望んでいるようだった」
絶句する中尉の目の前に、コージュ王子は白いレースの塊を差し出した。ひらひらと思わせぶりに振って見せる。そして、コージュ王子は眼球に力を入れ、中尉の双眸を睨みつけ言ったのだ。
「アリサからの贈り物だ。今、彼女の下半身は非常に無防備なはず

だよ。確かめても結構だが、充分に注意するように。彼女のお腹には、プリンスかプリンセスがいるかも知れないのだから……判るね？」

（これで、この男なら諦めるはずだ。たとえアリサがＯＫしても、こいつがプロポーズを撤回さえすれば）

それが甘い考えであることに、この時の王子は気づかなかった。

第１６話　情熱の行方（Ｒ）（前書き）

☆軽い性的描写があります。Ｒ１５でお願いします。

第16話　情熱の行方（R）

エレベーターが四階に到着し、アリサが廊下に出た瞬間、暗がりにうずくまる影が見えた。コージュ王子である。手にウイスキーのボトルを抱え、とても女官などには見せられない姿だ。

「……殿下」

「その分なら、中尉殿にふられたんだろ？　そりゃそうだよな。プリンスを誘惑しようなんて女、ヤツなら嫁にはしたがらないさ」

コージュ王子はふらりと立ち上がり、アリサの傍にやって来る。ひどいアルコール臭だ。一体、いつから飲んでいたのか。怒ってはいても、アリサは王子の体が心配になる。

「残念だったな。出世頭を捕まえ損ねて……。お前は、俺がいいって言うまで傍にいるんだ。自由になんかしてやるもんか。十四年前から……お前は俺のものなんだからな」

王子はあおるようにウイスキーを飲み、アリサの顔を見ようとしなかった。そのため、彼女の髪が乱れていることも、青褪めて小刻み震えていることすら気付かない。

「だから……中尉にわたしを抱いたと。それもわたしから、王子の妃になるために誘ったと言ったんですね。わたしから取り上げた下着を見せて……」

「ア……リサ？」

ようやく、コージュ王子は顔を上げた。その漆黒の瞳を数回瞬(またた)かせ、アリサを凝視する。

彼女に見えたのはそこまでだった。王子の表情が涙に滲んで行く。ここまで我慢してきた想いが堰を切ったように溢れ出し、透明な雫

となって次々に顎から滴り落ちた。

「どう、した。お前……そんなに、あの男が」

コージュ王子は息を止め、アリサの首筋に視線をやる。そこに見えたのは、真紅の薔薇を散らしたような充血。

「待て……ちょっと待て。奴は諦めたんじゃないのか？　プロポーズを取り消したんじゃないのかっ！？」

コージュ王子はアリサの両腕を掴み、叫びながら揺さぶった。だが、その王子の手を彼女を振り切る。

「――殿下のことは諦めろ。俺が幸せにしてやる。……あの人はそう言ったわ。そう言って」

次の瞬間、コージュ王子は酒瓶を床に叩き付けた。

派手な音がしてボトルは砕け散り、廊下には香りの芸術と呼ばれるモルトウイスキーの匂いが広がった。そのまま、王子は公務用のクローゼットに飛び込み、指揮刀（サーベル）を手に飛び出してきたのだ。

「殿下っ」

「殺してやる！　お前を傷つけた。あの男をこの手で斬り捨てる！」

「わたしを傷つけたのは彼じゃないわ！　殿下です……殿下のせいで……欲望のままにわたしを抱いて、ずっと傷つけてるくせにっ」

アリサは我慢できず、興奮したまま口に出してしまった。

主君であるコージュ王子に言うべき言葉ではない。二人は対等ではないのだ。現代社会において、そしてこの国において、身分の差は歴然としている。

「違う！　それは……アリサ……」

王子の瞳に頼りなげな光が浮かび、ふいに途切れた。彼は目を閉じ、サーベルを床に落とす。と同時に、崩れるように膝をついたのだ。

「殿下？　……殿下、いかがされました！？」

怒りを忘れ、アリサはコージュ王子に駆け寄った。

「大事……ない。心配するな」

そう言ってアリサを押し退けようとする。だがその指先は、恐ろしいほどの熱を放出していた。

「殿下っ！　こんな高熱でお休みにもならず、お酒を召し上がるなんて。不摂生にもほどがあります！　成年王族となられるご自覚を持って頂きませんと……わたし」

（――心配で、殿下のお傍から離れることが出来ません）

アリサは続く言葉を胸の中で唱えた。

そのまま、コージュ王子を脇から支え、寝室まで連れて行くアリサだった。

☆。・　：＊：・　。★

「……アリサ……ゴメン……俺のせいで」

「殿下？」

小さく声を掛けるが、コージュ王子が目を開ける気配はない。

熱は三十八度を超えていたが、王子は頑として典医を呼ぶことを認めなかった。常備してある解熱剤を飲み、そのままベッドに横になる。ずっとアリサが傍に居るように、そう命じると目を閉じで浅

い眠りについた。

昔から、熱が上がるたびにそうだった。アリサがいなければ薬を飲もうともせず、傍に居ないと眠らないと言って譲らない。そして、普段は決して口にしない謝罪を、夢の中では何度も呟くのだ。

コージュ王子は大人びていて、どんな時も冷静で慎重な態度を崩さない。

そんな王子がアリサにだけは我がまま放題の姿を見せる。それは彼女にとって、密かな自慢であった。男女の愛でなくとも、特別な想いで繋がれている。王子の望むものが単なる欲望のはけ口であっても、王子の？特別？であることをアリサは誇りに思っていた。

（でも……もうだめ。少しでも、王子の想いを感じたら……さっきのように甘えてしまう）

アリサから言葉や態度を望むことは一度もなかった。

王子の欲しがるものを与えるだけが、アリサの愛だったのだ。それが……？シャインブラッサム？。あの馬名に籠めた想いを知った途端、アリサは王子を責めてしまった。彼女を傷つけているのは王子だと、そんなことを言ってしまえば後は際限がなくなる。

次はきっと、愛の言葉が欲しくなる。そして彼の子供や、未来が欲しくなるのだ。

コージュ王子が王妃の息子でなかったら……。

王子の額に玉の汗が浮かび上がる。それを固く絞ったタオルで拭き取り、襟元を開いて汗を掻き過ぎないようにした。空調を整え、氷枕を二時間おきに入れ替える。すると、夜明け前には少しずつ荒い呼吸が治まり始めたのだ。

王子がうわ言も口にしなくなった頃、アリサもベッドにもたれ掛かり短い眠りに引き込まれたのだった。

王子のキスは決して優しい訳ではない。愛撫も性急で自分本位だ。でも、その手が胸に触れると……アリサの身体に信じられないほどの快感が突き抜ける。

どう考えても、女遊びが出来る立場ではない。アリサの他に女性経験など皆無であろう。購入する本の一冊、インターネットで閲覧するページまで、すべてが筒抜けの生活環境なのだ。この状態に耐えられるのは、本物の聖人君子くらいだろうか。

コージュ王子の場合は、アリサがいるから、に他ならなかった。

アリサは夢の中で首筋に熱いものを感じていた。

それはちょうど、アヤカワ中尉にキスマークをつけられた辺りだ。いつもの舌先がその部分を何度も何度もなぞり、噛み付くように吸い上げる。

「んん……んんっ」

アリサの上に重いものが圧し掛かり、次第に身体が開いていくのを感じていた。熱い感覚に女の中心が満たされて行く。

（やだ……殿下がいるみたい……わたしって欲求不満だったの？）

アリサは――夢なら何をやっても構わない。もっと大胆になってみよう。

そんな風に思いながら、脚を自分から開き、激しく腰を動かした。そして、今まで一度も伝えたことのない想い……「愛してる」を何

度も何度も口走る。やがて全身が弾け飛ぶような快感を味わい、アリサは心地良いまどろみに身を委ねたのだった。

第１６話　情熱の行方（Ｒ）（後書き）

長く間が空いてすみませんｏｒｚ
今月中の完結を目指します！（あくまで目標ということで＾＾；）

第１７話　別れのとき（Ｒ）（前書き）

☆若干の性的描写があります。念のため、Ｒ１５でお願いします。

第17話　別れのとき（R）

朝の陽射しが閉め忘れたカーテンの間から入り込む。北向きの窓なので、幾分青白く感じる明るさだ。ハッとしてアリサが身を起こした瞬間、

「痛っ」

枕にしていた腕を思い切り押さえてしまった。

「あ、申し訳あり……え？」

謝りかけたが、アリサは自分が全裸であることに気付き驚いて声を上げた。

「殿下！　どうして？　一体なんでこんな……」

「いまさら、何を騒いでるんだ？」

「熱はどうされたんです！？　それに、いま何時ですか？　こんなことなさっている場合じゃ」

王子は右腕を軽く振りながら体を起こすと、気分が良さそうに首を回した。

「お前が一晩中介抱してくれたから完全復活だ。こっちの方も、な」

そう言って指さしたのは下半身のあの部分である。

この時、王子も全裸であることを知り、アリサは愕然とした。なぜならそれは、彼女が夢の中で経験したセックスが現実かも知れないということで……。

直後、アリサの顔面は蒼白になった。夢の中の彼女は、決して受身とは言えないだろう。しかも、「愛してる」と何度も口にしてしまった。

「昨夜は凄かったな。あんなに乱れたアリサを見たのは初めてだ。

あまりに激しくて、コイツが千切れるかと思ったよ。それに……お前、俺になんて言ったか覚えてるか？」

コージュ王子は爽やかな笑顔を見せながら、朝に相応しくない台詞を口にする。

口をパクパク開き、声も出ないアリサとは対照的に、王子はすこぶる嬉しそうだ。実に晴れやかな顔で、それでいて照れ臭そうに笑っている。彼はその笑顔に十代の名残りを漂わせつつ、とんでもないことを口にしたのであった。

「明後日の誕生日、俺は父上に全部話すつもりだから」

「な、なにを、でございますか？」

「決まってる。お前との関係だ」

「なっ！」

「俺はアリサと結婚するから、王位継承順位から外してくれって、な」

あっさりと、実に簡単にコージュ王子は言い切った。

しかし、現実はそれほど甘くないはずだ。真実を告げれば、アリサはすぐさま王宮から追い出されるだろう。？未成年の王子を誑(たぶら)かした女？その汚名から逃れる術はない。未成年者と性的関係を持った以上、責任は年長者であるアリサが負うことになる。例え、二人が主従関係にあったとしても……。

ただ一つの気掛かりは、両親や妹たちにまで累が及ぶことである。それだけは避けたいとアリサは思っていた。

「お止めください……殿下。そのようなこと、申し上げても……陛下がお困りになるだけです」

唐突ではあるが王子からのプロポーズだった。なのに、アリサは

喜ぶ気配もない。困惑するように眉根を寄せ、王子から身体を離そうとしている。

コージュ王子はそんなアリサの様子に不満を覚えたのだろう。

自嘲めいた笑みを浮かべ、

「父上は困るよりホッとするんじゃないか？　確かな後ろ盾がない、ということは、どんな後見人がついて利用されるか判らない、ということだ。不確定要素を持った俺より、確実に計算出来る兄上たちの中から、王太子を選ぶほうがいいに決まってる」

国王は決して冷酷な人間ではない。寧ろ、温かな人柄だと国民からも、王宮で働く人々からも慕われている。ただ、王妃に対する愛情があまりに大き過ぎた。その為、コージュ王子が最も父親を必要とする時期、国王はそれを放棄してしまったのだ。ある年齢まで達すると、息子は父に本心を明かさなくなる。それまでに築くべき絆が、国王と王子たちの間にはなかった。

王子は顔を背け、諦めを口にする。彼の中で、国王の愛情は王妃と共に死んでしまった、と結論が出ていた。

コージュ王子は真剣な眼差しをアリサに向け、体を寄せた。心の奥底まで見透かされそうな黒曜石の瞳に、彼女は囚われそうになる。

そしてアリサの心に一つの欲望が芽生えた。

――コージュ王子はアリサを愛しているのだ。

彼女を永遠の伴侶に選ぼうとしている。ならば、国王の真意は黙っていたほうが良い。王子の愛と信頼を独り占めするチャンスではないか。王の愛情など今まで無かったものである。それ以上にアリサが愛すれば、何も不都合はない。

そう、アリサさえ口を噤(つぐ)めば――

王子がゆっくりと口を開いた。
「アリサ……他には何も要らない。もう一度、俺を？愛してる？と言え。俺はお前のことを……」

次の瞬間、アリサは心の扉を閉じた。王子の幻を追い出し、しっかりと鍵を掛ける。
そして、
「わたしは、殿下の妻にはなれません。わたしは中尉と」
「中尉のことなら忘れろ！　何も無かった。お前は昨夜そう言ったんだ。俺にも責任はある。だから、お前の言葉を信じて、奴の事は不問に付す。それでいいだろ？」

そんなことまで口にしていたのか、とアリサは自分に呆れてしまう。

「いいえ、そうではありません。殿下、わたしはアヤカワ中尉を愛しています」
「馬鹿を言うなっ！？　昨夜あれほど」
「昨夜は、殿下を中尉と間違えました。彼に、殿下とのことを正直に話します。そして……彼が許してくれるなら、わたしはアヤカワ中尉と結婚したいと思います」

それはアリサの祈りであった。

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

アリサがコージュ王子と訣別した同時刻――。

窓のない薄暗い室内、おそらくは地下の一室。複数の人間が一つのテーブルを囲んでいた。
テーブルの上には大きめの灰皿が置かれ、その中は煙草の吸殻が山になっている。目を引くのは灰皿の横に置かれたポータブルテレビ。高さが十センチもない小型のものだ。映っているのは、服を着たままセックスに興じる男女の姿。
女は紺のスーツを着て、タイトスカートを腰まで捲り、大きなヴィクトリアチェアに横たわっている。その上に覆いかぶさる男はスラックスを穿いたままだ。男の肩口から女の白い足が見え……それはかなり長い間、一定のリズムを刻んで揺れていた。
小型のカメラで撮影したせいか、音声までは入っておらず、無音で行為の様子が流れる。
やがてクライマックスを迎え、二人の動きが止まった。数秒後、男は女から離れ……それまで背中を向けていた男の顔がしっかりとレンズに映る。
男はトーキョー王国第四王子、聡明で潔癖と名高いプリンス・コージュ――。

テーブルを囲んだ男の一人が、灰皿に煙草を押し付けながら口にした。

「アリサ・シンザキ秘書官――か。この女も殺す必要があるな」

第17話　別れのとき（R）（後書き）

第2章終了、次回から第3章「偽りの王宮」です。
よろしくお願い致しますm（__）m

第１８話　アイリーン王女

トーキョーシティ国際空港。
ワシントン王室専用機にタラップが取り付けられる。ロープの内外を囲むのは、出迎えの政府関係者に一般の警察官、近衛部隊の中なら選ばれた国賓専用の護衛隊。そして取材許可が下りたマスコミ各社だ。その最前列に立ち、アイリーン王女の到着を待つのが接待役を仰せつかったコージュ王子である。
アイリーン王女の滞在期間は七日。王子が接待を命じられているのは、明後日の歓迎レセプションまでだ。その翌日から、王子は通常の生活に戻る予定であった。

「……んか。コージュ王子殿下。アイリーン王女がタラップから降りられます」
静かに前を見つめる王子であったが、実際には何も見ていなかった。
横に立つ国王の首席補佐官カイヤに促され、王女を迎えるべく歩を進める。
（なぜ、この場のアリサがいないんだ）
彼の頭を駆け巡っているのは、今朝のアリサの言葉だけであった。

☆。・：＊：・　。★　。

「わたしはアヤカワ中尉を愛しています」
「アヤカワ中尉と結婚したいと思います」

プロポーズの返事として、これより悪いものはないだろう。アリ

サは確かに昨夜、何度も「愛してる」と言ったのだ。それを中尉と間違ったなどと、にわかに信じられるものではない。だが、彼女は頑なにコージュ王子の求婚を断わった。

（……他に、理由があるに決まってる）

はじめは、中尉が無理矢理アリサを抱いたのか、と考えた。それで彼女がコージュ王子に遠慮をしているのかも知れない、と。だが、じっくりと思い返せば、アリサの身体に男を受け入れて間もないような形跡はなかった。いくらアリサしか知らないとはいえ、彼女の身体だけは隅々まで知っている。

あと考えられるとすれば……この、アイリーン王女の来訪以外になかった。

アリサは空港までの同行をカイヤと交代する。王女を迎え入れる準備の為、という名目であった。しかしこれまで、そんな理由でアリサが公務に付き添わなかったことなど皆無だ。

（まさか、秘書官を辞める気か！？）

王子は暗闇の中、何度も耳に響いた声を繰り返し再生した。「愛してる……殿下。コージュ殿下を愛してるの。離れたくない」――間違いようのない、アリサの愛の告白を。

☆。・：＊：・。★。

『三年ぶりですね、プリンセス・アイリーン。ようこそ、トーキョーシティへ。再会出来て光栄です』

滑らかなワシントン英語で挨拶をしつつ、コージュ王子は微笑んで手を差し出した。

アイリーン王女の緩くウェーブしたブルネットは、以前に会った

時と変わらない。違う点は長さだろうか。肩を掠めるくらいが、今は背中の真ん中辺りまで伸びていた。
繊細なフェイスラインも変わっていない。まるでビスクドールのようだ。そして最も印象的な瞳は、晴れ渡る空の色を映したような、透明なブルーをしていた。

三年前、彼女の祖母であるサトミ……通称サミー王太后が亡くなった時、コージュ王子は葬儀に参列した。
当時、王子は十七歳。まだ公務に出ることはなかった。しかし、諸事情からトーキョー王国の王族で参列可能なのが彼だけだったのだ。コージュ王子が単独で外国を訪問したのはあの時が初めてだった。

「はい、お久しぶりです。トーキョープリンス・アルフレッド……いえ、プリンス・コージュがよろしいですか？」
スカイブルーの瞳を煌かせ、アイリーン王女は愛らしい声で挨拶をした。それもトーキョー語で。三年前はワシントン英語しか話せなかったはずである。どうやら、かなり勉強したらしい。
「これはこれは、驚きました。我が国の言葉を覚えて下さったのですね。この、訪問のために、ですか？」
「もちろん、それもあります。ですがそれ以上に、わたくしにとって大切な国の言葉になる、と聞いて……懸命に覚えました」
コージュ王子の手を取り、アイリーン王女は小首を傾げて微笑む。
しかし、その言葉の内容が王子にはよく判らない。聞きなおそうとしたが、後方からカイヤ補佐官に突付かれ、王子はスッと身を引いた。

アイリーン王女は次々と、彼女を出迎えたトーキョー王国の要人たちと握手を交わして行く。そのほとんどが同盟の強化を望む連中ばかりだ。現時点でこの国の主流は同盟強化組のほうである。それ

は同時に、戦争反対派が多数を占めているということだ。
今年、コージュ王子が成年に達することで、四王子全てが対等な立場となる。いよいよ王太子が選ばれるのでは、とトーキョーシティを中心にマスコミは特集を組むくらいだ。
そしてこの時期、アイリーン王女が我が国を訪問したということは……。
王子は嫌な予感を覚えるのだった。

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

「本当に申し訳ないっ」
アヤカワ中尉は廊下に土下座すると、床に頭を擦りつけ謝罪を始めた。
「ちょっと！　いい加減にしてちょうだい！」
場所は王宮内。事務所が多数ある裏方スペースとはいえ、同じ王宮で働く連中が目を丸くしている。どうやら、中尉は一晩中外に居たらしい。朝まで反省を続け、一刻も早く謝ろうと、東の宮近くの通路でアリサを待っていたのだという。
アヤカワ中尉は彼女の顔を見るなり、体を二つに折り頭を下げた。しかし、アリサは彼を無視し……そのまま王宮の秘書官室までやって来たのである。
その間中、中尉はアリサの後ろを歩き、「悪かった。すみません でした。ごめんなさい」と数パターンの謝罪を繰り返す。
アリサに、
「言い方を変えて謝ればいいってものじゃないでしょう？　忙しい

んです。間もなくコージュ殿下が出発されますよ。護衛官の仕事に戻って下さい」
冷たく突き放される。
そして、とうとう土下座に至ったのだった。
「謝って許されることじゃないのは充分に判っている。任務があるから行くけど……。許してくれるまで毎日来るから」
中尉の言葉に驚いたのはアリサだ。
毎日こんな真似をされたのでは仕事にならない。これだけでも、後で何があったのか根掘り葉掘り聞かれるはずである。
「判ったわ。中尉の謝罪を受け入れます。ですから……これ以上困らせないで下さい」
「ありがとう！　こんな真似をして済まない。でも時間が経つと、来る勇気がなくなるし……。多分、二人きりでは会って貰えないだろうし……」
アヤカワ中尉はさらに言い訳を始める。
「もうっ！　判ったから早く行って！」
敬礼して一旦背中を向けた中尉がクルッと振り向いた。そして、アリサの近くに来ると声を潜めて言ったのだ。
「例の競馬場の件だけど……」
「え？」
「頭を冷やす為に昨夜行って調査して来た。王室専用ブースのスピーカー付近に、何か取り付けた痕跡があった。隠しカメラかも知れない。もう取り外されていたから、断定は出来ないけど……。確かに、不穏な動きがある。この時期ということは、アイリーン王女絡みの可能性も大だ。アリサ、気をつけろ」
中尉は早口で伝えると、回れ右をして駆けて行く。

（隠しカメラなんて……そんな）

凍りついた表情で、アヤカワ中尉の後姿を見送るアリサであった。

第１９話　王宮の森

アイリーン王女を乗せたリムジンは橋を渡り、王宮の正門をくぐり抜けた。
午前中に王女はハルイ国王との挨拶を終え、正午から奥宮で会食の予定である。国王が私的昼食会に、四人の王子とアイリーン王女を招くというもの。午後は再び、コージュ王子は王女の接待に戻る。

王宮に戻るとアリサは歓迎の列に並んでいた。
王女がトーキョーシティで宿泊するのは、全て王宮の右隣に設けられた迎賓館である。その間、この王宮は民間人立ち入り禁止となり、各通用門は第一級の警備体制となるのだ。他所に迎賓用の施設を作るより、警備効率を考えた上での措置だった。
アリサは、王女を受け入れる部屋の最終チェックという名目で、コージュ王子に同行しなかった。護衛官であるアヤカワ中尉は、当然のように王子と一緒だった。この数時間、二人が一緒だった訳ではない、と王子は自分を納得させるが……。

彼は気付いてしまったのだ。歓迎の列の前を通り過ぎる一瞬、中尉はアリサを見て笑顔を作った。そして、そんな中尉の眼差しにアリサの瞳から険しい光が消えたのである。
瞬きをするくらい短い時間、二人は見つめ合い互いの存在を認め合っていた。

（俺は……無視か）

王子は愕然とした想いを表情に出さないことで精一杯だ。
コージュ王子がアリサの前を通過したとき、彼女は張り付いたよ

うな笑顔を浮かべ、ひたすらアイリーン王女を見ていた。チラリとも王子には視線を向けず、そのまま護衛官に目を移したのだ。
父王や二人の兄と共に王女を囲んでの昼食など、砂を噛むようなものだった。怪我を理由に欠席した第一王子が羨ましいくらいだ。
「成年王族として、プリンセス・アイリーンの接待役をちゃんと務めるように」
そんな父王の言葉は覚えている。だが、何と返したのか記憶にないほど、彼は落ち込んでいたのだった。

☆。・：＊：・。★。

王子たちが住む四つの宮の中央に緑豊かな森がある。
小川も池も人工的な物には違いない。だが、木々はたくさんの光を浴び、輝いていた。池の中央には浮島があり、そこには丸木の橋が掛かっている。浮島には西洋風の東屋もあり、デートに使うならさぞやロマンティックだろう。

「ご存知ですか？　トーキョーのおばあ様が、初めてワシントンの王太子であるおじい様に会われたのが、この東屋（ガゼボ）であると」
「いえ……。そうなのですか？」
「ええ、おばあ様が教えて下さいました。空色の瞳をした王子様に一目で恋をしたのよ、って」
「それは……素敵なロマンスですね」

それがどうした、と言葉に出さないのが精一杯だ。
王宮内は安全だと言われ、散策に送り出された。周囲には護衛官の姿も見えず……まるで二人きりだ。

（一体、何がどうなってるんだ！）

苛立ちが限界まで達し、体調不良を理由に接待役を降りようか、と思った直後、思い掛けぬことを王女が口にした。

「わたくしと一緒では楽しくありませんか？」

王女の話をほとんど聞いてなかったとこに気付き、コージュ王子はハッとする。

「いえ。とんでもありません。世紀のロマンスが聞けて嬉しく思います」

そこまで言うと、王子は英語に切り替えた。

『ですが、そろそろ本音で行きましょう。妙にしおらしいアイリーン王女に、私は驚いているだけですから』

「あら……なんのことでしょうか？」

『近くには誰もいませんよ。その理由を――あなたはご存知でしょうか？』

王子自身は全て知っている、とばかりに微笑む。本当は何も知らず、戸惑うばかりだったのだが……。その時、アイリーン王女の表情が変わった。目がパッと見開き、わずかに目尻も吊り上げる。陶器のような肌に血が通い。それはまるで、ビスクドールに命が宿り、人間に変身したかのようであった。

『そうよね？　私の本性は三年前に知られてるんですもの。それにあっちじゃ？ワガママプリンセス？ってタブロイド紙の見出しに書かれるくらいなのよ。トーキョー王国の人たちだって知ってるはずなのに。全く、肩が凝るったらないわ！』

東屋のベンチに腰掛け、アイリーン王女は上品なロータイプのサンダルを脱ぎ捨てた。身長一七〇センチはあると聞く。どうやら、

コージュ王子を追い抜かない為に、ハイヒールは選択肢から外されたらしい。
彼女のせいではないと思いつつ、王子の口から嫌味が零れ出た。
『なるほど、ヒールの高さまで気遣って頂き、恐れ入ります』
『別に。私はハイヒールなんて好きじゃないもの。向こうじゃ、いつもスニーカーよ。……へぇ、でも、プリンス・コージュもそんな口をきくのね』
王女は半ばからかう口調だ。そのまま裸足で床を歩き、浮島の周囲に取り付けられた丸木の手すりに「ヨイショ」と座った。
アリサが見たら目を丸くしそうだ。怪我をしたらどうするんですか、とすぐに喚き立てる。だが……ここにアリサはいない。そう思った瞬間、王子も靴と靴下を脱いでいた。
『プリンス？』
『私も裸足は好きですよ。宮殿内を裸足で歩き回り、よく秘書官に叱られます』
王子はスタスタと歩き、アイリーン王女の隣に腰掛けた。言葉は崩さないままだ。
『ねえ、わざと合わせてる？』
予想外にも厳しい王女の声に、コージュ王子は内心驚いた。
王女は続けて、
『私、媚びる男って大嫌い！』
そう言うとツンとすまして横を向いた。
その様子は三年前と変わらない。十五歳のアイリーン王女は十七

歳のコージュ王子を見るなり、怒鳴ったのだ。
『おばあ様が亡くなったのに、一番年下の第四王子しか寄越さないなんてどういうことっ！　トーキョー政府は私たちを馬鹿にしてるのっ？』
　コージュ王子は内心ムカッとしたが……。それでも王室の代表である。国王の体調不良と、第一王子の怪我、第二・第三王子の不在を告げ、四人の王子は全員対等であることを伝えた。
『じゃあ、私に取り入って、ワシントンを乗っ取りに来た訳じゃないのね？　我が国の次の国王はイーサンよ。私は女王になんかならないわ！　おあいにくさまっ』
　イーサン王子はアイリーン王女の三つ年上の兄だ。だが、子供の頃から病弱だという噂が諸外国まで届いている。十五歳で王太子に立ったが、アイリーン王女のほうが次期女王に相応しいのでは、という声もあると聞く。
　そのためワシントン王国には、様々な王室から王子が送り込まれていた。もちろん、目当てはアイリーン王女である。トーキョー王国も王位から最も遠い第四王子を送り込み、彼女との結婚を目論んでいる、と誤解したらしい。
　我がままで傍若無人の振る舞いをする。王女にあるまじき下品さ。――そんな言葉がタブロイド紙にちらつき始めたのはちょうどその頃だ。

「ふざけるな。何で俺がお前みたいなガキに媚びるんだよ」
　突如変わった王子の口調にアイリーン王女はポカンと口を開けている。どうやら、理解不能なトーキョー語だったらしい。
『これなら判るだろ、お嬢ちゃん。あんたは俺の趣味じゃない。それに、どっちの王冠にも興味はないんだ。明後日のレセプションまでの辛抱だ。いい子で俺に付き合ってくれ』

『あ、あなたも周囲を騙してるのね。私とは逆みたいだけど』
呆気に取られていた王女もようやく正気に戻ったようだ。
『まあね。それも明後日でお終いだ。もう、子供でいる必要はないからな』
コージュ王子の言葉を聞いた瞬間、彼女は真剣にビックリした声を上げた。
『あなた知らないの？　私はトーキョー王国次期国王と婚約するためにこの国に来たのよ』
『……それは誰だ？　名前を教えてくれ』
王子の中に嫌な予感が一気に甦る。
そしてアイリーン王女の返事は……
『トーキョープリンス、コージュ・アルフレッド・エインズレイ・カノウ』

第２０話　疑惑の補佐官

「護衛官の一人と随分親密なご関係ですって？」
首席秘書官アソウの第一声だ。
「結婚なら早めに言って頂戴ね。判っていると思うけれど……。秘書官は主婦と両立出来るような、生易しい仕事ではありませんよ。まあ、子供さんを作らないなら別かも知れませんけど」

アリサはげんなりしつつ、それでも笑顔で取り繕う。

「誤解から、業務に支障を来しかねないほどの行き違いが生じたんです。その誤解が解けて、アヤカワ中尉の謝罪を受け入れました。プライベートなこととは関係ありません」

どちらにしても急に国賓が発表されドタバタしているこの時期に……。そんなことを口の中で呟きながら、アソウ秘書官は去って行く。その後姿を睨む女性がひとり、国王第三秘書官のチグサ・タカマだ。
アリサはスッと近寄り、
「あの……。アソウさんの嫉妬もあると思いますよ。だって、彼女は独身でチグサさんには素敵な旦那様がいらっしゃるから。わたしも羨ましいです」
小さな声でチグサに伝える。子供が出来ないことを気にするチグサに、アソウは嫌味を言うのだ。
「ええ、そうね。欲求不満の中年女なんて、まともに相手していられないわ」
アリサの気遣いにチグサは薄く笑った。
「あなたも……妊娠には気をつけなさい。結婚前にそんなことにな

ったら、きっと呪われるでしょうね」
その棘のある口調に「はあ」以外は答えられないアリサであった。

ただ、アソウ秘書官が苛立っても無理はないと思う。
祝賀行事は四月一日。その後すぐ、王女ひとりとはいえ、国賓の正式な来訪が四月九日にあると発表された。通常ならありえないことである。
よほど極秘裏に、水面下で調整がされていたのだろう。

今、アリサの目の前でコージュ王子はアイリーン王女と二人きりの時間を過ごしていた。
森を散策する王子らの様子を遠巻きにしているのが、護衛官と側近たちである。王女側の護衛官と協力して、森への立ち入りは一般の衛兵すら制限していた。籠の中とはいえ、二人の会話が聞こえる位置に誰もいない。それは、王子らの身分を考えれば、極めて珍しいことであろう。

（殿下も気付かれたかも知れない……）

アイリーン王女が事情を聞かされている可能性もある。彼女の口から、コージュ王子に国王の真意が伝われば、王子は運命を受け入れるだろう。十代のプリンセスを妻に出来るのだ。年上の秘書官との情事など、すぐに忘れるに決まっている。
アリサは胸の中で自らに言い聞かせ、それでいて落ち込んだ。

「シンザキ秘書官、様子はどうです？」

アリサが深いため息を吐いた時、背後から声が掛かる。国王の腹

心、カイヤ補佐官だ。この縁談の最高責任者とも言うべき人であった。

「ほぼ順調だと思われます。ただ、殿下にもお話した方が良かったのではないでしょうか？」

「君も気づいているでしょう。レセプションを挟んで、後半はクロード、シオン両王子が接待役となっています。しかし、実際にはパーティで陛下ご自身の口から例の件が発表されます。それまで各王子のご実家に知られては不味いのですよ。良からぬ事を考える輩もおりますからね」

カイヤ補佐官の深刻そうな言葉に、競馬場での一件を思い出した。

「それは……トーキョー競馬場での件も含まれますか？　あの件は」

「ウィナーズサークルの件ですね。あれは全ての責任は馬にある、ということで落ち着きそうです。優勝馬のオーナーには気の毒ではありますが……」

それはアリサの恐れていたことだった。なんと、シャインブラッサム号の薬殺処分で決着がつきそうだと言うのだ。

「待って下さい！　殿下にお怪我があった訳でもなく、何の被害もなかったんですよ。それがどうして」

「殿下の身に、危険が及びそうになったことに違いはないでしょう。誰かが責任を取らねばなりません。場長と警備主任は減俸と厳重注意、馬主は馬を失うことで処罰を免れます。それとも、馬を救う為に馬主を収監しろ、とでも？」

眼鏡の縁を押し上げながら、カイヤ補佐官は抑揚のない声で言った。

しかし、昨日の今日である。まさか、こんなに早く話が進むとは思ってもみなかった。あの少女に渡された銀の玉のことを告げようか、と悩む。だがもし、このカイヤ補佐官が三王子の後見人に繋がっていたら……。

「ああ、それと……護衛官のアヤカワ中尉ですが。彼も専属護衛官から一衛兵に格下げが決定しました。レセプションの翌日付けです」

「それはコージュ殿下がお決めになられたんですか？」

アリサの声は震えていた。

「この場合、殿下の意見は関係ありません。報告書にある限り、彼は護衛官としての職務を放棄しています。中尉自身にも確認しました。彼も深く反省し、降格を受け入れたと聞きます」

昨夜の振る舞いはともかく、降格はアリサのせいである。彼女を守るために、アヤカワ中尉は職務を忘れた。アリサが願ったことではないにせよ、彼女は申し訳なさで一杯になる。

「わたしは……わたしにはどんな処分がなされるのでしょう？」

「処分？」

「はい。迂闊にも殿下のお傍を離れ、子供を助けようとしました。そのせいで、殿下を無用な危険に巻き込んでしまいました。全てわたしの責任です」

カイヤ補佐官はスッと背を向け、

「秘書官の役目は殿下をお守りすることではありません。それに、見ましたか？　今朝の新聞の第一面」

「……いえ」

「？自らの危険も恐れず少女を救った英雄？――誉れ高きコージュ王子の武勇伝が増えて結構なことだと思いますよ」

肩越しの横顔が冷たく微笑んでいた。

☆。・：＊：・。★。

トーキョー王国側でコージュ王子の件を知っているのは数名のはずだ。アリサはカイヤ補佐官から聞き、他の誰が知っているかは聞かされていない。ここ数日の様子から見て、アソウ秘書官ですら知らされていないと思える。

他にいるとすれば、この微妙な警備体制から察するかも知れないコージュ王子専属の護衛官たちくらいか。

だが、国王自身が侍従や女官に話している可能性もないとは言えない。

それらの状況を考えた上で、アリサは周囲の警戒にあたっているアヤカワ中尉を探した。

まずは、降格になったことを謝らなければならない。そして、カイヤ補佐官の周辺を探って貰うのだ。中尉の言った通り、隠しカメラが仕掛けられていたとしたら……。すでにアリサとコージュ王子の関係は知られていることになる。

（あの冷ややかな視線……ひょっとして、殿下とのことを知ってるから？）

考えれば考えるほど疑惑が浮かぶ。だが、証拠はない。第一、元からがフレンドリーとは言い難い男性だ。時間が経つと、アリサはその考えが被害妄想のような気もしてくる。

（落ち着かないと。でも、殿下から目を離して良かったのかしら……）

不意に不安を覚える。
だが、アリサは慌てて首を振った。
（レセプションが終わったら、秘書官は辞めるつもりでいるのに。しっかりしなきゃ）
そう思った直後、彼女の背後で茂みが揺れ……。

第２１話　嵐の予感

「きゃ！」
急に手首を掴まれ、アリサは声を上げる。
「待て！　俺だ。急ぎで話があって……」
それはアヤカワ中尉であった。
「もう、嚇かさないで！」
「こっちだ」
「ちょっと！　わたしをどこに連れて行く気！？」
「何もしない。見て欲しいものがあるだけだ」

森から少し離れ、護衛官の目に触れない辺りまでアリサは連れて来られた。
そして中尉が差し出した物は……一枚の写真である。チラリと目をやった瞬間、アリサは息を飲み、顔を背けた。

「悪い。あまり気持ち良いもんじゃないのは判ってる。でも、この男に見覚えがないか、思い出して欲しいんだ」

中尉の真剣な声に、彼女は再び写真を覗き込んだ。それには男の死体が写っている。なぜ死体だと判るのか……男の額にはポッカリと空洞が開き、その形相は悪魔とでも遭遇したかのようであった。アリサはこれまで、頭部を撃たれたら砕け散ると思っていた。だが違うらしい。中尉の話では弾の抜けた後頭部の方が悲惨だという。……それ以上は怖くて聞けなかった。

「ないわ。覚えてないし、見たこともない」
「……そうか」

「一体何？　この人がどうかしたの？」
アリサは少し早口で叫ぶように尋ねる。
「場内の監視カメラに映ってたんだ。ウィナーズサークルの周囲にもいた。そして――」
事件直後、この男はゆっくりと騒動に背中を向け、人混みを掻き分けて消えたのだという。出入り口のカメラ映像には、事件からわずか数分で場外に出て行く姿が確認された。
「今朝、警察庁の友人に頼んで政治犯の逮捕者リストと、こっちは王制反対派の活動者リストをチェックしてたんだ。ところが、友人から写真の男が死体で見つかったって連絡を貰って」

また、だ。
アリサは背筋が寒くなるのを感じた。あまりにも対応が早過ぎる。中尉に調査を依頼したことは、誰にも言っていない。なのに、中尉が目をつけた男が殺された。

「どちらのリストにも載っていなかったのね。だからわたしに聞きに来たの？　それって……この男が王宮の関係者とか。まさか三人の王子たちの」
「いや、三王子たちの実家関係者は全て使用人までリストが出来上がってる。親父が作らせた物だけど、それを真っ先にチェックした。でも、どこにも載ってない。それに、素性の判る物は何も所持してなかった」
中尉の父は国王専属護衛官の筆頭で、アヤカワ大佐だ。彼の返事を聞き、アリサはわずかな望みを口にする。
「それって……馬券のトラブルで殺されたなんてことは？　昨日の事件には無関係なんじゃ」
「おいおい、アリサ。一発で眉間を撃ち抜かれてるんだ。これはプロの仕業だよ」
中尉は呆れた様子だ。確かに、足が付きそうになったのでさっさ

と始末した、と考えたほうが早い。

カイヤ補佐官の様子といい、この殺人事件といい、これ以上アリサ独りで抱え込むのは無理だ。彼女は意を決して、アイリーン王女が緊急で訪れた理由と国王の真意を話した。もちろん、この件はカイヤ補佐官から聞いたことで、彼の様子に疑問を抱いたことも。

ただ、コージュ王子との関係は……中尉には言えなかった。

「やっぱりな……あまりの手際の良さに内部の人間が絡んでると思ってたんだ。クソッ！　明日の行程も補佐官殿には筒抜けか」

中尉は地面の土を蹴る。今となっては変更も出来ないだろう。だが、馬を驚かせた方法といい、王族の命までは狙っていないのかも知れない。

アリサはそう考えたが、

「いや、人を殺すほどの計画だ。あんな悪戯程度のもので済むとは思えないな。競馬場の一件にはきっと裏がある」

中尉はあっさりと否定した。

カイヤ補佐官は三人の王子の実家と繋がっているのだろうか？

それとも他に理由があるのかどうか。アイリーン王女は標的に入っているのか……そもそも、国王は本当にコージュ王子を王太子にするつもりか。

様々な疑問が浮かび、足が竦むアリサであった。

☆。・：＊：・。★。

その夜、アリサは東の宮に戻りながら別れ際の中尉の言葉を思い出していた。

彼は、「明後日まで、俺はコージュ王子専属護衛官の責任者として指示が出せる」そう言って、コージュ王子とアイリーン王女の警備を強化してくれた。
「ごめんなさい……わたしのせいで降格なんて」
「お前のせいじゃない。好きな女を守るのに理由は要らない。だから結婚してくれなんて、了見の狭い男じゃないぜ」
なんでもないことのように言われると、余計にアリサは後ろめたくなる。
「殿下はお前に惚れてるんだな」
「え……あの、そんな」
「殿下が護衛官の制止を振り切って、馬に飛び乗ったのも理由は俺と同じだろ？　アリサ、側室なんて辛いだけだ。お前には似合わないよ」
中尉はアリサの頭に手をやると、ほんの一瞬だけ自分の胸に抱き寄せた。
「……殿下を忘れたら俺の嫁になれ。待っててやるから」
小さく呟き、アリサの返事は聞かずに走り去ったのだった。

アヤカワ中尉は確信している。コージュ王子の言葉に偽りはない、と。
昨夜王子に言った通り、いっそ中尉の胸に飛び込んでしまえば楽かも知れない。そんな想いが嵐のように、アリサの胸に吹き荒れる。
そして嵐は、王子たちの姿を見た時に一層激しくなった。
森から出た二人は、王宮内の馬場に立ち寄り乗馬を楽しんでいた。アイリーン王女の希望だという。彼女は手馴れたもので、さっさと着替えると大きなサラブレットに跨った。どうやら見た目より行動的なプリンセスらしい。
「まあ、お綺麗なプリンスとプリンセスで、お似合いでございますね」

厩舎担当の職員からもそんな声があがり、二人から目を背けるアリサであった。

今夜は王子とは顔を合わさずに休もう。
アリサがそう思って自室に飛び込んだ時、正面の椅子にコージュ王子が座っていた。

「で、殿下……どうして」

この階はどの部屋も鍵を掛けないのが通例だ。確かに、建物自体のセキュリティも万全でその必要はない。だが、アリサの部屋に限っては……施錠することを王子が嫌がった為である。ついつい、開け放しにするのが癖になっていた。

「さっき、奥宮の陛下に会って来た」
いつもより大人びた口調だ。アリサは無言で次の言葉を待つ。
「俺を王太子に指名するってさ。アイリーン王女を妻に迎えて、親ワシントン派閥が俺の後見になる。これで世界平和に向けて、更に貢献出来るって言ってたな」

リラックスチェアに深く腰掛け、オットマンの上で脚を組んでいた。まるで力が抜けたような様子だ。いつもとは違う王子にアリサは何と言ったらいいのか判らない。

「お、めでとう、ございます。これで、わたしも安心して」
「お前、知ってたな」
不意に遮られた。しかも、王子の声のトーンが変わる。
「そ、それは……」
「知ってて、だから、奴を好きだと言ったんだな。正直に言えっ！」

勢いをつけて立ち上がると、コージュ王子は大股でアリサに近寄った。次の瞬間、彼女は王子の腕の中にいて……ごく自然に二人の唇は重なっていた。

第２２話　初めての痛み（Ｒ）（前書き）

☆軽い性的描写があります。Ｒ１５でお願いします。

第２２話　初めての痛み（Ｒ）

感情が理性を凌駕する。
同じように結ばれた瞬間を、王子は思い出していた。

スキップして進学・進級して行く兄たちに、コージュ王子は十四歳で追いついた。そして十五歳で、彼は兄弟の誰よりも早く、王立大学に入学を決めたのだった。
しかしそれにより、コージュ王子は優しい兄たちを失うことになる。
彼らは小さく可愛い弟を庇護した。だが、自分より優秀で評判の良い弟を、黙って甘受出来るほど大人ではなかったのだ。
？王妃の息子？としての役目を果たせたと、コージュ王子は意気揚々と奥宮に向かった。今度こそ、父は褒めてくれるはずだ。「愛する妻が命懸けで産んだ価値のある息子だ」コージュ王子はその言葉を期待した。

「コージュにも困ったものだ。何ゆえもう少し、立場を弁えることが出来ぬのか。およそ女官らが焚き付けているのだろうが……。全く、王子ばかり四人とは頭の痛いことだ」

目通り直前、父が侍従に話す言葉を彼は聞いてしまった。
案の定、「合格おめでとう。王室の為、国民の為、よく学ぶように」父は機械的に祝いを述べると、一切の感情を見せず、息子の前から消えたのだった。
東の宮に戻るなり、笑顔でコージュ王子を待つアリサがいた。

「おめでとうございます、殿下！　陛下もさぞやお喜びでしょう！」
満面の笑顔がこの時ほど眩しく感じたことはない。胸が焦げるように熱く……ほんの少し見下ろせるようになったアリサの瞳に吸い寄せられていた。
唇がゆっくりと重なる――二人の歯がカチッと当たり、王子は慌てて飛び退いた。

「わ、わるい……」
「……いえ……」

突然のことに驚いたのだろう。アリサは真っ赤になって俯いている。それは、コージュ王子にとって初めてのキスだ。だが、すでに大学生で二十歳のアリサにとっては違うだろう。
「そんな顔するなよ。どうせ、キスの一つや二つ経験済みだろう？」
「わたしはそんなっ！」
「ひょっとして……ないのか？」
王子の問いにアリサは無言で頷く。トクン、と王子の胸が高鳴った。
「そ、そんなことより……お祝いを」
「壁越しに陛下の声が聞こえた。俺は立場を弁えない困った奴らしい」
「まさか……そんなこと」

自嘲気味の王子に、アリサは絶句している。今度こそ、国王は？王妃の息子？に王妃以上の存在価値を認めると思っていたのだろう。それは王子も同じであった。
何の為に、生まれてきたのか……誰の為に、生きて行けばいいのか。誇りと義務感だけで立ち上がれるほど、コージュ王子は強くなかった。

「アリサ……祝いなら、お前から貰いたいものがある」
「何でしょうか？　わたしに出来ることでしたら」
「お前が欲しい。お前を抱きたい――駄目か？」
アリサは驚くように声を上げる。
「殿下は十五歳ではありませんか。そういったことは……十八歳になられませんと」
しどろもどろになりつつ、常識論を口にする彼女を王子は床に押し倒していた。
「お前まで俺を拒絶するのか？　存在すら邪魔になるならいっそ……この世から消し去ってくれ」

卑怯な言い方だったと今は思う。泣くようにアリサにしがみ付き、彼女の体に溺れた。深く、深く、泉の底に沈むように……。罪悪感と言う錘（おもり）をつけて、アリサを水底まで引っ張り込んだのだ。
乱暴な王子の仕草にアリサは苦痛の声を漏らした。その時につけた絨毯の染みは、目を凝らせば五年経った今も残っている。

――明後日、お前とアイリーン王女の婚約を報告する。その上で、お前を王太子に命じるつもりだ。王室の為、国民の為、そして世界平和の為、務めを怠らぬように――

コージュ王子の耳に、父王の冷ややかな声が広がる。
王族に生まれた以上、国民の尊敬に値する行動を取る義務がある。そんなことはこの二十年、嫌と言うほど叩き込まれて来た。王子として、王妃の息子として、恥じぬ言動を……。心を凍らせ、ひび割れを見られぬよう懸命に取り繕ってきた。王子はただの人間であってはならないのだ。判ってはいても、彼の心は悲鳴を上げる。

「俺は……最低の王子だ。王室や国民の為に努力したことなど一度もない。？清廉潔白で神に愛されたコージュ王子？など、どこにもいないんだ」
アリサの柔らかな白い谷間に顔を埋め、王子は喘ぐように呟いた。
「殿下は優しく立派なお方です。どうか……ご自分の評価を低く誤らないで下さい」
王子の頭を包み込むように抱き締め、アリサは耳元で囁く。

彼女の言葉が胸に刺さった。
即座に、立太子を断わる、という道が選べなかった。父の真意は判らぬまでも、最大の評価を得たことに喜びを感じたのだ。だがそれは、アリサを諦め、アイリーン王女との結婚を選んだも同然だろう。

「い、やだ。俺はお前を離さない。絶対に別れない！」

我がままは承知の上であった。『アリサがいなければ生きていけない』――九年前と変わらぬ熱が、王子の中を駆け巡る。
ほんのわずか下着をずらし、アリサの片膝を持ち上げた瞬間、二人の熱は同じ温度で溶け合った。

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

思った通りコージュ王子は苦しんでいる。
彼女のベッドに横たわる王子の寝顔を見つめながら、アリサは胸を痛めた。
情熱のままに求められたら、彼女に拒否することなど出来ない。

今なら、プリンスは全て自分のものだと叫び、王女との間に割り込むだろう。
このままいつまでも、人知れず王子を独占したい。だが後二日で、二人の関係は確実に終わりを告げる。
コージュ王子は国王に逆らうことなど出来ない。それは弱さではなく、王族が生まれながらに担う重責を彼も持っているからだ。自らは何の犠牲もなく、思う様に振舞う王なら、国民はノーを唱えるだろう。

それでも……こうして抱かれてしまう。この引力には恐怖すら感じる。
もし王子に敵対する組織が隠し撮りの映像を公開したとき、その時は――。

アリサは不安を押し退けるように、王子の腕の中で目を閉じた。
その直後、廊下に大勢の気配を感じ、ハッと目を開けたのだ。

（何事なの？　初めてだわ、こんな……）

この東の宮に大挙して人が押し寄せたことなどない。ありえない事態に、アリサは血の気が引くのを感じる。
彼女が身を起こすより早く、コージュ王子はベッドの外に足を下ろしていた。彼はシーツを一枚抜き取り、サッと腰に巻く。ズボンを探して穿くだけの余裕はない、と判断したのだろう。
そして、アリサの上に布団を被せ「一声も出すな」――緊迫した声で短く命令したのだった。

第２３話　不穏な気配

コージュ王子は扉の前に立ち、壁に立てかけた予備のサーベルを掴んだ。
訓練はした。何度か襲われ、サーベルを抜き撃退したことはある。だが、人を斬ったことは一度もない。
（アリサを守る為なら、敵が何人いても斬る！）
強く心に念じて、王子は扉を開いた。

「コージュ王子殿下！　ご無事でしたかっ」
叫びながら駆け寄ったのは護衛官の一人、シュウ・タカマ少尉であった。

「いったい何があったのか説明して下さい。それと、アヤカワ中尉はどこです？」
努めて気持ちを落ち着かせながら、コージュ王子はいつもの口調で護衛官たちに話しかけた。有事に必ず傍にいるはずの中尉が不在とは妙な話だ。
だが、タカマ少尉の説明を聞き、彼は息を飲む。

「迎賓館で警報が鳴りまして、中尉が駆けつけたところ……」
なんと、アイリーン王女の部屋に数匹の蛇がいたという。何者かが侵入して、国賓室に蛇を放った。警報は逃げた時にセンサーに掛かったようだ、とのこと。蛇は無毒の種類だった。
「それで、中尉のご命令で殿下のご無事を確認しようとしたのです

が……。何度コールしても出て頂けませんでしたので、已む無く突入致しました」

冷静なタカマ少尉らしく、膝を折ると何事もなかったかのように報告する。

だが、部下たちはそう簡単にはいかないようだ。数人は少尉に倣って跪くが、十人以上が口を開いたまま立ち尽くしている。何と言っても、王族の鑑（かがみ）と言われるコージュ王子が、秘書官の個室から？半裸？で飛び出して来たのだ。二人の関係を問われたら、言い訳など出来るはずもない。

「それで、アイリーン王女に怪我は？」

「ございません。蛇は全て中尉が処理し、お付きの方にも怪我はありませんでした」

「それは良かった。しかし、王宮内に侵入者とは、あってはならぬことですね。決して外には出さぬよう」

「はっ！」

あってはならないこと、と言うより、ありえないことだった。

国賓滞在中は第一級の警備体制だ。それも全ての出入り口だけでなく、地下や空からの侵入にも備えている。これで入り込めるのは魔法使いか超能力者くらいだろう。

或いは……初めから中に居た、というケースも充分に考えられる。

「全員ご苦労さまです。私はこの通り無事です。担当者はこのまま一階の警備に戻るよう。他は侵入者の確保にあたって下さい。それと……言うまでもありませんが、私がシンザキ秘書官の個室に居たことは他言無用です」

コージュ王子は当たり前のように付け足し、爽やかな笑顔で箝口

令を敷いたのである。

☆。・‥＊‥・。★。

「では……蛇はご自分で？」
「はい、そうです。わたくし、蛇など怖くありませんから」

ストレッチリムジンの車内。今回はコージュ王子とアイリーン王女の二人ではなく、アリサとアヤカワ中尉も同乗していた。
昨夜の騒動をアイリーン王女はさも楽しげに笑いながら話す。怯えたアイリーン王女が帰国すると言い出すことを密かに期待していた王子は拍子抜けだ。
いささか不謹慎ではあるが、ワシントン王国側の都合で縁談が壊れれば、と願わざるを得ない。または、国王が正式に発表する前に王子自身の口から断わる。だが、本当に後悔しないか、と問われたら即答する自信がない。長年抱え続けてきた問題だ。一夜で結論を出すなど、若さを理由にしなくても簡単ではなかった。

「最後の一匹は、わたくしが抓んで放り出しました。他は、こちらの護衛官殿が処分して下さいましたけれど」
蛇の類が大嫌いなアリサは、頬を引き攣らせながら相槌を打っている。
アリサは蜘蛛やムカデも苦手だ。これまでは、全てコージュ王子が始末してきた。しかし、実を言えば彼も得意ではない。幼い頃は、壁を這うアブラムシに悲鳴を上げたこともある。だがアリサの前では、少しでも頼りがいのある所を見せたい一心であった。
「こちらの不手際で申し訳ない限りです。今夜は別のお部屋を用意

させて頂きましたので……」
アリサが頭を下げながら王女に答える。
「まあ、構いませんのに。それと、昨夜のことは本国に報告はいたしません。面倒なことにしたくはありませんから」
「……恐れ入ります」
アリサは更に頭を低くした。
コージュ王子としては残念だが、それを見せる訳にはいかない。
「ところで、侵入者とは何者でしたの？　我が国との同盟をよく思わない連中かしら？」
王女は視線をアヤカワ中尉に向ける。
「侵入者は確保しましたのでご安心下さいませ。背後関係は現在調査中です」
中尉は表情一つ変えずに答えた。

確保はしたのだ、但し、死体という形で。
侵入者は二十代前半の男で、頭部を撃ち抜き、王子たちが散策した森の池に浮かんでいた。歓迎レセプションに向けて、出入りが許可された業者の身分証を所持。しかし、別人であることがすでに判明している。
大きな問題は、その男が小型の時限爆弾を所持していた点だろう。
どうやって荷物検査を通過したのか。なぜ爆弾を使用せず、無毒の蛇を放つというふざけた手段を使ったのか。蛇は王宮の森に数多く見られる青大将であった。番号こそ付いてはいないが、王宮内で調達したことは間違いない。
そして、男の死が自殺でない場合、殺人犯は王宮内で働く人間となる。

トーキョーシティの観光スポットを三ヶ所回った。最後にトーキョータワーからシティを一望して帰路につく。タワーから王宮まで

は一キロもなく、交通規制もしてあり、あっという間に到着する予定であった。

「殿下、申し訳ございません。リムジンの調子が悪いようでございます。別の車両を回しましたので、そちらにお乗り頂けますでしょうか？」

立ち入り禁止の札にロープが張られ、随所に警察官が立つ。その外側から、多くの国民が王子とワシントン王国のプリンセスに手を振っていた。いつもなら目にする国旗がないのは、抜き打ちに近かったせいだろう。

背後にアリサが立ち、小さな声で予定に変更を告げた。

用意されていたのは一回り小さなリムジンが二台。安全性において問題はないが、居住性が重要視されていないタイプだ。主に、王子らが学校への往復で使用する車両だった。後部座席に四人乗れなくはないが、かなり窮屈だろう。

そこにタカマ少尉が駆けて来た。

「アイリーン王女殿下におかれましては、自国の護衛官とご一緒に別車両に、という連絡を受けております」

王女がワシントン王国から連れて来た護衛官が少尉の後ろに立つ。王女は素直に頷き、二台目の車両に乗り込もうとするが……。

「待て。タカマ少尉、それは誰からの命令か」

護衛官たちを呼び止めたのはコージュ王子だ。

「ワシントン側の判断とこちらの護衛官から聞きました。確認を取って参りましょうか？」

少尉はどこか怪訝な表情をしている。王子は少し考えると、アヤカワ中尉に向き直った。

「いや中尉、彼と共に後続車両に乗り込み、王女の警護にあたって

下さい」
「承知致しました」
即答するアヤカワ中尉の後姿を見送り、アリサと二人、先頭車両に乗り込む王子であった。

第２４話　ターゲット

「殿下……昨夜のことですが」
今日初めての二人きりだ。リムジンの車内、運転席とは完全に仕切られていて声は届かない。アリサは戸惑う様子で口を開いた。
「護衛官の方たちにはなんと……」
彼らは、王子の命令をきちんと守っている。アヤカワ中尉の態度から見ても、誰も告げ口はしていないようだ。

「四階で見たことは誰にも言うな、と命じた。お前の部屋から出て来たことも、俺がシーツ一枚だったこともな」
「二十名近くいたと思われますが……全員が守るでしょうか？」
アリサの声は震えている。おそらく、国王に知られることを恐れているのだろう。
「さあ、全員唖然としていたからな。数日経って、正気に戻ったら……口が軽くなるかも知れん」
「そんなっ！　そんなこと。どうなさるおつもりですか？　まさか、こんな時期に知られてしまうなんて」
コージュ王子は一呼吸置くと、
「シンザキ家に類は及ばないようにするから心配は要らない。俺が無理矢理……」
「そんなことを言ってるんじゃありません！　王太子に指名される大事な時期なのに。せっかく、殿下が国王陛下から認められたと言うのに……。わたしのせいで殿下が……」

あんなことがあったのに、アリサは秘書官の顔を崩さない。コージュ王子の婚約者候補、アイリーン王女にも笑顔で接している。本当に、何もかも振り切ったのかも知れない。そう思うだけで胸が焦

げるほど痛かった。
だが、今のアリサはコージュ王子のことだけを案じてくれている。彼が王太子に選ばれることだけを……。
彼女の肩に手を伸ばしかけ、王子はギュッと拳を握り締めた。
激しい衝動をコントロール出来ない未熟さが口惜しくてならない。自分の置かれた状況を考え、冷静に判断しなければならないこの時すら、彼の全てがアリサを求めてしまう。

その時だ。

不意に車がガクンと揺れた。
コージュ王子はハッとして透明な仕切り越しに運転席を見る。運転手はハンドルから手を放し、胸元を押さえていた。両足は激しく突っ張り、全身が痙攣し始める。
車がスピードを上げ始めたのは、突っ張った足がアクセルを踏んでいるせいだ。
彼が仕切りを下ろそうとした瞬間、前輪が中央分離帯の縁石に乗り上げた。

「キャッ」
「アリサ！」

コージュ王子の脳裏に五年前の事故が浮かんだ。
何も出来ず、壁とトラックに挟まれた一瞬――。彼の体に覆い被さったのは長兄トーヤ王子であった。なぜ庇ってくれたのか、兄の怪我はどの程度なのか、五年経った今でも不明なままである。
だが今度こそ、守られるだけの立場では居たくない！

リムジンは中央分離帯を乗り越え、反対車線で一転二転する。壁に激突して炎上すれば、いくらリムジンとはいえ助からない。

しかし、リムジンは二転半……屋根を地面に擦り、火花を散らしながら数十メートル滑るように進み、やがて停止したのだった。

「アリサ！　アリサ！　目を開けろっ」

止まると同時にシートベルトを外し、ロックを開けてドアを蹴破る。さすがリムジンと言うべきか。横転にも関わらず、外装はボロボロでも全ての衝撃を受け止めている。座席に傷はなく、防弾ガラスの一枚も割れてはいなかった。

だが、万に一つも引火の可能性は捨て切れない。

コージュ王子は気を失ったアリサを横抱きにし、車から飛び出す。

反対車線で、後続車両が急停止した。降りて来たアヤカワ中尉が分離帯を飛び越え、血相を変えて駆け寄る。

（アリサは俺のものだ。誰にもやりたくない。他の何と引き替えにしても……絶対に）

心の中で唱えると、グッと息を飲み込んだ。

そして、

「中尉！　そちらは大事無いかっ！？」

「はっ。殿下にお怪我はございませんか？　アリサは……いえ、秘書官殿は」

「私は大丈夫です。アリサも……気を失っているが怪我はないでしょう。中尉、彼女を頼みます」

そう言うと、アリサを中尉の腕に託す。

一つの覚悟を胸に、コージュ王子はアリサに背を向けた。

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

アリサがゆっくりと目を開けた時、そこは王宮内の医務室だった。

「アリサ、大丈夫か？」

彼女の顔を覗きこんでいたのはアヤカワ中尉である。

一体何が起こったのか、不意に車が縁石に乗り上げ……何度も上下が入れ替わって、もの凄い音がしたのだ。

「殿下……コージュ王子殿下はどちらに？　まさか、お怪我が酷いとか……」

「いや、ほとんど無傷だよ。そのままアイリーン王女と王宮に戻られた」

無傷の言葉にアリサは安堵の息を吐いた。

「でしたら早く殿下のお傍に。護衛官のあなたが殿下に付いてなくてどうするの？　殿下のお命を狙う者がいるのよ。お願い、殿下をお守りして」

呑気な顔でアリサの横にいる中尉に、苛立ちすら覚える。王子だけでなく、アイリーン王女も危険なはずだ。護衛官でなくとも、王宮親衛隊に所属する衛兵がプライベートを優先して許される事態ではない。

「仕方ないだろ……殿下のご命令だ」

アヤカワ中尉はため息を吐きつつ、そんな言葉を口にする。

「判らないわ。それってどういう……」

現在の所、車両には何の仕掛けも見られない。人為的なものではなく、運転手の心臓発作による事故。そんな予測で実況見分が進め

られているという。
　確かに定年寸前の運転手ではあった。アリサは父が車両部にいる関係から、運転手とは全体的に親しくしている。万一、健康診断に引っ掛かった人間は、車両部内で運転から整備に交代させられる規則であった。

「事故って……じゃあ、運転手の健康管理に問題があったというの？　でも、とてもそんな」
「だから、仕方ないって言ってるんだ。殿下ともご相談して、内部に不穏分子がいる以上、表面的には事故で済ませるほうが無難だろう、って」
　アヤカワ中尉の声は、これまでと微妙に違った。今が如何に差し迫った事態か、アリサはそれを察して口を噤む。

「競馬場での事件絡みで、殺人が起こっていることも話した。拳銃を使った殺人、それもプロの仕業らしい、と。侵入者は逃げられないと見ての自殺、ならいいが……。両方とも拳銃だからな」
　コージュ王子と中尉は、アイリーン王女の部屋に放たれた蛇は別に犯人がいるか……可能性として高いのは？陽動？。真の狙いは、東の宮に爆弾をセットしてコージュ王子の殺害だったに違いないと結論付けた。
「そして、殿下が仰ったんだ。隠しカメラの痕跡があったなら、敵はアリサも狙うだろう、と」

　――敵が一気に動き出したのは、王女の来訪の意味をここに来て知ったせいだろう。明日のレセプションパーティまで、私同様にアリサを守れ。

「パーティまで？　殿下はそう仰ったのね？」
「ああ、そうだ」

パーティが終われば、誰もアリサなど狙わなくなる、と言うことだ。

次の瞬間、アリサは前が見えなくなり……彼女の流れる涙は、中尉の胸に吸い込まれて行くのだった。

第２５話　大人になった夜

王宮の東の宮という狭い社会（スペース）で、二人は幸福な時間を過ごしてきた。

それは、お互いがお互いにとって楽しいおもちゃだったのかも知れない。アリサは、自由に選べないコージュ王子に与えられたおもちゃ。アリサもまた、孤独なプリンスを守れるのは自分だけ……そんな幻想から抜け出せずにいたのだった。

東の宮の周囲は厳戒態勢だ。国王が眠る奥の宮も同様だと聞く。アイリーンは迎賓館から王宮内部に部屋を移し、こちらの警備も厳重であった。

廊下の窓から一斉に点灯された森を眺め、アリサは息を吐いた。どこもかしこも煌々と照らし出され、不審な動きをするものはすぐに判るようになっている。

彼女はそのまま廊下を歩き、王子の私室に繋がる扉を開けた。

「シンザキです」

内扉をノックして待つ。

しかし、中から返事は聞こえなかった。どうやら、コージュ王子は奥の寝室にいるようだ。アリサはそう判断して扉を開ける。

「――失礼します」

室内に入った瞬間、アリサはドキッとした。

扉の正面にコージュ王子がいた。

壁にもたれ掛かり、彼はジッとこちらを見て佇んでいる。一体、いつからそこに居たのだろう。どうして返事をしなかったのか、ア

リサに彼の考えは読めなかった。

「ノックが聞こえませんでしたでしょうか？　申し訳ありません」

当然のように、アリサは先に頭を下げた。

「いや……。目立つ外傷はなかったと聞いたが」

スッと背を向け、王子は暖炉の前を通り過ぎ、奥のソファまで歩いて行く。

アリサはその後について行きながら、

「はい。殿下のおかげです。ありがとうございました。それをお伝えしようと思い、こちらに参りました」

それだけではなかったが……。アリサは想いを胸の奥に押し留めた。

王子はソファの背に腰を下ろし、

「カイヤ補佐官に言われたよ。ご婚約後の秘書官は男性がよろしいでしょう。だとさ」

長い脚を組み替えながら言う。

しかしそれはアリサも言われたことだった。

競馬場といい、自動車事故といい、王子は公衆の面前でアリサを庇っている。その様子が一々テレビカメラに納められ、コージュ王子の支援者から、「妙齢の秘書官は王子に不適当」といった声が出始めたという。

加えて、護衛官たちから昨夜の王子の様子を聞いたらしい。

「私は助言を求めただけのつもりでした。まさか、そこまで指導するとは。これは、あまり好ましいことではありませんね。予防に関しては、あなたの誠意を信じるしかありませんが」

カイヤ補佐官は、アリサがコージュ王子を誘惑したと信じている。そして、故意に妊娠するつもりではないか、と。
もし補佐官が敵に与(くみ)しているとすれば、王子に子供が出来るのは避けたい状況だろう。スキャンダルから王子が失脚するのは好ましいが、もし男子を儲けたりすれば……。逆に、後継者を持つ王子は、王太子に相応しいと言われかねない。
それほど、トーキョー王国の国民は、未来の女王ではなく国王を求めている。
アリサは慎重に言葉を選び、
「それに関してはお答えしかねます」
そう言って押し通したのだった。

「お前も、秘書官を辞めたいんだって？」
「それは……」

辞める覚悟は出来ていた。
カイヤ補佐官には、リムジンの変更が事故に繋がったので責任を取りたい、と伝えたのだ。コージュ王子とベッドを共にしたから――では、決してない。二人の関係は、可能な限り誤魔化し続けるつもりでいる。少なくとも護衛官たちは、二人が抱き合ったシーンを見たわけではないのだから。

「俺は明日、二十歳になる」
「はい。おめでとうございます」
「前から考えてた。二十歳を過ぎたら、なるべく早く結婚しよう、って」
「それは……存じませんでした。降るようなご縁談を、断わり続けていらしたので」
アリサは少しだけ微笑んだ。

すると、コージュ王子も同じように微笑を浮かべたのだ。
「父上から、王太子に指名されて……嬉しかったよ。母上もきっと、喜んでくれたと思う」
「殿下……」
それは十四年間、一度も見たことのない王子の顔だった。
「なあ、アリサ。一番大事なモノを手に入れる為には、諦めなきゃならないことってあるよな？」
「はい。仰る通りです」
「どれだけ大事にしたくても、全部は無理なんだ。俺が何を選んでも、お前は許してくれるか？」
「……はい」
アリサはゆっくり頭を下げた後、王子の部屋から出て行こうとした。
これまで、強引な力で王子に引き止められて来た。王子から繋ぎとめようとしなければ、アリサからは出来ない。それが身分の差である。
だが……。
アリサは思わず振り返り、コージュ王子に向かって駆け寄った。そのまま、王子の首に抱きつき――初めて、アリサからキスしたのだ。
「お願いです。どうか、最後のお願い……わたしを抱いて下さい」
それはありったけの勇気であった。
ところが、そんなアリサをコージュ王子は冷たく突き放した。
「駄目だ」

「殿下……たった一度です。最後にもう一度だけ」
「アリサ！　勘違いするな。この俺が抱きたいから抱くんだ。お前に、セックスを要求する権利はない。身分を弁えろっ」
手の平を返したような拒絶に、アリサはただ王子の部屋から逃げ出した。

☆。・‥＊‥・　。★　。・☆。・‥＊‥・　。★　。

王宮内に急遽用意された国賓用の部屋。その前に立つ衛兵が二人。アイリーン王女が母国から同行した護衛官は、室内で警備にあたっている。
空気がわずかに揺れた。サーモセンサーがあればそこだけ赤く光っただろう。柱に身を隠し、衛兵の動きを凝視する人影が……。しばらく様子を窺い、やがてその場から離れたのだった。

「今夜は襲う隙がありませんか？　カイヤ補佐官殿」
人影の背後から声を掛けたのは、アヤカワ中尉だ。
彼の手には拳銃が握られている。何と言っても、相手はすでに人を殺している。中尉は油断せず、補佐官の動向に充分な注意を払った。
「君は、アヤカワ大佐のご子息でしたね。東の宮から離れていいのですか？」
「殿下の了解は取ってあります。言うまでもありませんが、振り返る時は両手を頭の後ろで組んでからにして下さい。さもなくば――

発砲します」
セーフティのロックを解除して構える。
国王第一補佐官は真面目一方の堅物。父であるアヤカワ大佐も「彼に限って」と疑問を口にした。だが、中尉の流した偽物の情報に釣られて、王女の部屋まで来たのは事実だ。本当は、王女の居室は動かしていなかった。
「トーキョー競馬場付近の川で、ある男が死体で発見されました。男は王室御用達、子供用玩具の製造会社に勤める社員です。そして調査により、あなたの指示で動いていたことが判明しました」
補佐官の眼鏡に常夜灯の弱い光が反射し、二人を取り巻く空気がにわかに張り詰めた。

第２５話　大人になった夜（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。
３章が終わり、次回から最終章「戦う王子」です。
すみませんっｏｒｚ
年内完結は絶対無理っ！！
とにかく全力で進めますので何卒ご容赦をｍ（＿＿）ｍ
最後までよろしくお願い致します。

第２６話　運命の朝

携帯電話のコール音が聞こえる。
アリサは昨日の服を着たまま、ベッドから体を起こした。泣きながら、いつの間にか眠ってしまったらしい。朝方の五時に時計を見たのは覚えている。今は……七時。二時間も眠れたなら充分だろう。

自分から求めて、辛辣な言葉と共に拒絶された。
王子の態度は当然のことだ。いつの間にかアリサは、コージュ王子と自分が対等であるかのように錯覚していた。それは多分、？シャインブロッサム？のことを聞いた時から……。或いは、王子の口から結婚の言葉が出た時から……。

（……そんなはず、ないのに）

王子は遠回しに、王太子の指名を受けると言った。アリサではなく、アイリーン王女を選ぶという意味だ。彼は決して女性を弄んで喜ぶ人間ではない。自ら婚約者を決めた以上、アリサに触れるはずがないのだ。

すぐに零れ落ちそうになる涙を押し留め、アリサはのろのろと電話に出た。
『はい。シンザキです』
『補佐官のカイヤです』

アリサは瞬時に目が覚めた。
確か、アヤカワ中尉が補佐官を見張ると言っていたはずだ。動きがあれば、力尽くで止める、と。

『あの……わたしに何か。まだ、時間は』
『アヤカワ中尉の件でしたら、彼の疑問は解決しました。――今の王家は複雑で、君たちがコージュ王子のため内密に動くように、私も陛下のご命令で動いております』
『……はぁ』
少しも詳しい説明になってはいない。
電話を切りしだい、中尉に連絡を取ろう。アリサがそう思った時だった。
『本日の歓迎レセプション、ならびにコージュ王子の誕生パーティですが。シンザキ秘書官、君はそのまま東の宮で待機するように』
『そ、そんな……それは……国王陛下のご命令ですか？　わたしは……決して殿下の立太子やご婚約の障害になるようなことは』

秘書官として、最後の仕事も出来ないなんて――。

アリサは懸命に言葉を選ぶが、
『これはコージュ王子のご命令です。今朝早く奥宮の陛下のもとに王子よりお電話がありました。全てが終わるまで、君を東の宮から出さぬように、と。こちらから、護衛を回して欲しいとのご希望です』
カイヤ補佐官は『命令です』を繰り返して電話を切った。

コージュ王子を怒らせたのだ。
昨夜の態度から、国王やアイリーン王女の前で二人の関係を暴露すると思われたのかも知れない。アリサは人生の半分以上を掛けて積み上げた大切な物が、音を立てて崩れるのを感じていた。

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

「全ては陛下のご命令ですよ」
カイヤ補佐官はそう言うと、アヤカワ中尉を奥宮に同行した。そこに、今年六十歳になられたばかりのハルイ国王が姿を見せたのである。

国王の話によると――。
トーキョー王国陸軍の若年層を中心に、近隣国家の安定に武力介入すべきという声が上がっていると言う。我が国の強大な軍事力は使用して見せてこそ、真の意味で世界平和に寄与する、と。
確かに、アヤカワ中尉もそれらしき噂は聞いたことがある。だが、王宮親衛隊とは無縁だと思っていた。
そう答える中尉にカイヤ補佐官が、口を開いた。

「ある情報筋から、王宮親衛隊の中に戦争賛成派がいて、国王とコージュ王子を疎ましく思っている。そんな報告が入ったのです」
「まさかっ！？　親衛隊にそのような」
「ですから、アヤカワ大佐にも昨日までお話することが出来ませんでした」

国王はコージュ王子に強力な後ろ盾を探し、早急に王太子にすべく動いた。全てが極秘裏に、ハルイ国王はワシントン王国メアリ女王に直接縁談を持ちかけ、了解を得たのだ。
ワシントン王国との結びつきが強化すれば、尚更、国家的規模の戦争は起こり難くなる。強大な軍事力は抑制にこそ力を発揮する、そんな国王の信念をコージュ王子であれば受け継いでくれると期待した。
しかし、その情報がギリギリで外部に漏れたらしい。
プリンスコージュ杯のレース当日、カイヤ補佐官の情報網に『コ

ージュ王子狙撃計画』が入った。補佐官は個人的に様々な依頼をしている男に、表彰式を中止するような工作を命じたという。

「王室専用ブースは全面防弾ガラスです。狙うとすれば、周囲のガードが減る表彰式しかないでしょう」

しかも、ウィナーズサークルは見通しの良い場所に設置されている。

それを指示された男は、自社の玩具でゲームに使うピストルを持参し、馬に当てたのだろう、という。

「彼はそういった仕事のプロではないので、馬を驚かせる手段が他に思い当たらなかったのだと思います。気の毒なことをしました」

「では、無毒の蛇を放ったのも補佐官殿ですか？」

一応は納得しつつ、中尉は補佐官に尋ねる。

「まさか。アイリーン王女に何かあっては、とんでもないことになります」

何と言っても親衛隊の中に敵がいるのだ。名前はおろか人数も判明していない。コージュ王子とアイリーン王女が森を散策していた時も、補佐官は心配で周囲を個人的に警戒していた。

そして昨夜も、王女の身を案じて迎賓館の内部を巡回。その時、警報機の電源がオフになっていることに気付いたのだ。それは明らかに内部の者の仕業であった。

「しかし、警報機が鳴って、私は迎賓館の駆けつけたのですが」

「もちろん、すぐに元に戻しました。同時に警報機が鳴ったのですよ」

補佐官が気付かなければ警報機が鳴ることはなかった。当然、本部にいた中尉が気付くのも遅れ、タカマ少尉らを東の宮に派遣する

ことも遅れただろう。

「アヤカワ中尉。私は親衛隊を敵に回すつもりはない。アヤカワ大佐も信頼している。君らは、私たち王族の為に命を投げ出してくれる者たちだと、そう思いたい。だが、一部の若者たちに行き過ぎがあるようだ。コージュは私に似ず、いかなる時も沈着で礼儀正しい人間に育ってくれた。王に最も相応しいと思う。私の愚かさゆえに招いた混乱は、必ずやコージュが納めてくれるだろう」

「陛下！　そのようなことを迂闊に口にされては」

カイヤ補佐官が国王を諌める。

国王という立場は孤独なのだろう。王室に残ったただ一人の男子――その重圧は中尉には計り知れない。だが今の国王の言葉は、王太子を定めたらすぐにも譲位したい、そんな風に聞こえた。補佐官も中尉と同じ懸念を持ち、声を荒げたに違いない。

「恐れながら。コージュ王子殿下は、陛下に大変よく似ておられると思います。特に、一人の女性を真摯に求めるお姿は……」

パーティ当日の早朝、アヤカワ中尉はトーキョー競馬場にいた。

ここ数日、ほとんど眠っていないがそれどころではない。昨夜は、何か言いたげな国王の矛先をカイヤ補佐官に向けつつ、彼は御前を辞した。

父に確認したところ、三百名に及ぶ衛兵全ての背後関係を探れ、と命じられたのが二日前。しかも信頼のおける数人で始めた為、調査は遅々として進まないという。当然、息子である中尉も真っ先に調べられた。道理で、中尉が尋ねた情報に最小限の答えしか寄越さ

ないはずである。
確実に安全と判断された衛兵の中から、レセプションの警備に回される予定であった。
その時、中尉の携帯が震えた。それは事件当日、場内監視カメラで録画された全映像をチェックした警官からの報告で……。

第27話　敵の正体

ほんの十日前、舞踏会が行われた会場である。
今また、盛大に飾りつけが行われ、正午開始の歓迎レセプションを待つばかりとなっていた。

「あら？　コレって何？」
給仕担当の女性職員が声を上げる。ステージの脇に置かれた黒いケース。ほんの数分前にはなかったものだ。
「ああ、さっき秘書官の方が来られて置いて行ったわ。レセプションに使うものだからって」
「ふーん」
別の給仕担当に言われ、不審そうな声を出すが……。
「ねえねえ、知ってる？　秘書官って言えば例のコージュ王子の秘書官」
「え？　何々？」

あっという間に、彼女の意識は黒いケースからゴシップに移るのだった。

☆。・‥＊‥・　。★　。・☆。・‥＊‥・　。★　。

（これで……連中がアリサをターゲットから外してくれたらいいんだが）

コージュ王子は先日同様、陸軍の軍服に身を包んだ。王子として

最上級の正装である。これまでは、いつもアリサに手伝わせてきた。だが、今朝は別の女官を呼び、彼はアリサを無視したのだ。

擬似暖炉に一つ、テレビに近いソファの隙間に一つ、寝室はベッドの下に一つとウォークインクローゼットの棚の影に一つ。王子自身がセンサーで確認したのはその四ヵ所。あえて取り外さず、盗聴器は生きたままにしてあった。

微弱な電波が王宮敷地内で確認されている。だが、そこまでだ。それ以上のことは、さすがの中尉も短時間では調査し切れなかった。こちらをコージュ王子に任せ、彼は補佐官の動向を探るため、王宮に向かったのである。

（結局、補佐官はシロか……）

だが、大佐側にこちらの情報を流すことが出来た。

――戦争賛成派は、コージュ王子の護衛官の中にいる。

理由は明白だ。東の宮の四階フロアには、一部の女官とアリサ以外は立ち入りが許可されていない。そして昨日、事故のあと自室に戻ったコージュ王子が盗聴器を発見したということは……。

一昨日の夜、緊急だといって踏み込んだ護衛官たちの中に仕掛けた者がいる。その数、十九名。この程度であれば、半日もあれば怪しい人間の見当はつけられるはずであった。

（ギリギリ、正午までに間に合えばいいんだが）

アヤカワ中尉からの連絡はメールで受けている。彼はやはり競馬場での一件が気になるらしい。何か掴めばすぐに連絡が入るはずだが……。現在のところ、何の知らせもなかった。

王宮内に入ると携帯での連絡は取れない。敵の連携を阻み、無線での爆発操作を妨害する為に、ジャミング用の電波を流すことにな

っていた。
最悪、時間までには戻り、中尉にはアリサを守るように言いつけてあるが……。

コージュ王子は昨夜のことを思い出し、深いため息を吐く。

（アリサを傷つけたかも知れない）

彼女の誘いを拒みたくなかった。許されるなら、もう一度と言わず何度でも抱きたい。彼女を抱いて死ねるなら本望だ。
だが、今の王子にはやらねばならないことがある。
この窮地を乗り越えなければ、たった一つのものすら手に入れることは不可能だろう。

「指揮刀（サーベル）を」

王子が短く命じると、女官は金色（こんじき）に輝く陸軍指揮刀を、恭しく両手で差し出した。
ほんのわずか鞘から抜き、刃を確認する。

「行って来る」

サーベルを腰に吊るし、コージュ王子は一歩踏み出した。

☆。・：＊：・。★。・☆。・：＊：・。★。

「ああっ、クソッ！」

アヤカワ中尉は携帯を手に苛々していた。今にも床に投げつけそうだ。先ほどからメールや電話で連絡を取ろうと必死なのだが、まるで繋がらない。
コージュ王子は早めに王宮入りしたのかも知れない。そう考え、中尉は青褪めた。

中尉が動ける時間はどうしても限られてくる。どれほど睡眠を削っても、調査には時間が足りない。彼は警察庁の友人に、映像のチェックを頼んでいたのである。そして呼び出されるまま部屋に行き、中尉は一つの映像を見せられる。
それは、王室専用ブースを斜め上方から撮影したものだ。防弾ガラスの前に立ち、レースを観戦するコージュ王子の姿が映っている。アリサも一緒にいたはずだが姿は見えなかった。部屋の半分も映ってはいないので、おそらく死角に居るのだろう。
「おっと、まだ先だった」
彼はそう言うと、キーボードで時間を指定した。すると、画面が急に切り替わる。そこには二人の護衛官の姿が映っていた。

あの日、親衛隊から同行した護衛官は中尉を合わせて五名。そのうち二名がコージュ王子の両脇に付き、三名は距離を取って周囲の警戒に当たった。
画面に映っている二名は、中尉が事前に専用ブースの危険物確認に向かわせた二名だ。時間を確認したら、ウィナーズサークルでのアクシデント後で間違いない。
（どうして、あの後に専用ブースに入ったんだ？）
ガラスに近いポジション以外は、出入り口の扉付近しか映らない。彼らが中に入り、三分程度で出て行った所だけ映っている。

「本来、この位置のカメラは監視用じゃないそうだ。サイトに掲載したり、マスコミに流したり、王族のポートレート用らしい。終了後、すぐに切るらしいんだが、例の事故でうっかり回しっ放しになってたそうだ」
「中の様子までは……判らんよな」
「それは無理。でも、何か持って出てるみたいだぞ」
目を凝らすと、確かに一人の手に何かが見える。黒い塊のようだ。ひょっとすると、隠しカメラかも知れない。
「ところが、だ」
警察庁の友人はキーボードをポンポン叩き、別のカメラの映像を出す。
「専用ブースのある六階から直通のエレベーターに乗り、一階の監視カメラに映った時には……」
「持ってない？」
どちらも、何も手にしていなかった。
アヤカワ中尉は懸命に記憶を辿る。狙撃計画が事実で、この二人が戦争賛成派であるなら、すでに狙撃失敗を判っていたはずだ。中尉はこの時、もう一人の護衛官と共にコージュ王子とアリサを連れ、急いで競馬場から離れていた所だった。中尉が後を託したのは……。
「それで、次の画像だ」
それは正面入り口をゲートの外側から撮ったものであった。遠くにエレベーターの扉が映る。軽快にキーボードを叩くたびに画面はズームして行き……。
そこに映っていたのは、エレベーターから降りて来た二人を待ち構えるようにして、何かを受け取る護衛官がひとり――シュウ・タカマ少尉であった。

タカマ少尉が戦争賛成派であるなら……彼の妻、チグサ・タカマ国王第三秘書官も敵の可能性が高い。

秘書官なら護衛官より王宮内で自在に動ける。現に今も、十九名の護衛官には監視がついているが、秘書官はノーチェックのはずだ。

アヤカワ中尉は王子と連絡を取るのを諦め、アリサに電話を掛けるが……。

第２８話　アリサの危機

レセプションが始まる。
同じ時刻、アリサは可能な限りの荷物をバッグに詰めた。東の宮から退出する準備だけはしっかり整える。コージュ王子の不興を買ったのだ。もう二度と、顔を合わさないようにする以外にない。
パーティが無事に終われば、この厳戒態勢も解かれるはずだ。そうしたらすぐに出て行こう。
アリサはぼんやりと椅子に座り、その時が来るのを待っていた。
すると、不意をつくように携帯が鳴り始め、彼女は反射的に通話ボタンを押し……。

「チグサさん。どうなさったんですか？」
東の宮の正面玄関からアリサは飛び出した。
現在、宮殿内には予め定められた護衛官と女官以外は立ち入り禁止になっている。チグサは建物の外まで来て、携帯に電話して来たのだった。
「いえ、間もなく始まる時間なのに……。アリサさんの姿が見えないので」
アリサは疑問を持ちつつも、すぐ背後に護衛官がいることを確認してホッと息を吐く。
「カイヤ補佐官から連絡があったんです。わたしは東の宮に待機、と。……コージュ王子殿下のご命令と聞いてますが」
そんな風に答えたアリサの前でチグサは不思議そうな顔をして見せた。
「まさか！　そんなことありえないわ。私にあなたのことを尋ねた

のはコージュ王子殿下なのよ」
その言葉はアリサに混乱を齎す。
チグサは続けて、
「あなたはそれを殿下から直接お聞きになったの？　それとも……カイヤ補佐官から？　私、正直に言うとあの補佐官って信用ならないと思うの。同じ陛下の側近をしているから判るんだけれど……」
王子自身の言葉ではなかった。アヤカワ中尉の件は解決した、と補佐官が言ったのだ。そして、中尉本人からの連絡はない。迂闊に信用して良かったのか、アリサの胸に不安が押し寄せる。
「でも……わたし、殿下を怒らせてしまったから……」
アリサはうっかりそんな言葉を口にしてしまった。
「ああ、そのことなら殿下も仰っていたわ。昨夜のことは気にしてないって。もちろん、詳しいことは聞いてないけど。ご自分は離れられないから、あなたを呼んで来て欲しいと命じられたの。そちらの護衛官も一緒でいいから、来てくれるでしょう？」
アリサは出て行くつもりで、なんの変哲もないスーツしか着ていない。
「こんな格好でレセプションなんて失礼だわ……せめて着替えて来ないと」
「時間がないのよ。判るでしょ？　遅れたら、アソウ女史がうるさいし……」
「じゃあせめて携帯とバックだけでも取ってきていい？」
「早くしてね」
苛々と腕時計を見るチグサに背を向け、アリサは小走りに東の宮に戻ろうとした。

護衛官の横をすり抜ける時、小石に躓きしゃがみ込む。
「どうかされましたか？」
カイヤ補佐官が回してくれた護衛官が声を掛けてきた。どうやら、不自然な彼女の動作に気付いてくれたらしい。
「タカマ秘書官から目を離さないで下さい。お願いします」
「……それは、どういう」
「とにかく、言われた通りにして！　お願いだから」
アリサは声を潜めつつも、厳しく言った。

コージュ王子がアリサとのやり取りを簡単に他人に言うだろうか。というのも大きな疑問だ。しかし、アリサが引っ掛かったのはそのことではなかった。
王子を怒らせてしまった、とアリサは言ったのだ。
アリサを含むごく一部の人間は、コージュ王子の気性が荒いことをよく心得ている。だが、それ以外の人間にとって、王子は聖人君子のような存在であった。
普通なら、
「まさか殿下に限ってお怒りになるわけがないわ」
そんな言葉が返ってくるだろう。
チグサは何の疑問も抱かず、王子が秘書官に向けた怒りを肯定した。それは彼が実際にアリサを叱り付けたことを知っている、ということだ。
なぜチグサがそんなことを知っているのだろう。
――アリサの心臓は激しく鼓動を打ち始める。
競馬場の王室専用ブースに仕掛けられた痕跡があったビデオカメラ……それが事実なら、東の宮にも仕掛けられているのかも知れない。

スッと立ち上がり、東の宮に向かった瞬間――。
予想外の事態がアリサを襲った。なんと、彼女の背中に尖った物が当てられたのだ。

「そういうことなら……あなたから目を離す訳にはいきませんね」

その護衛官はサーベルを抜き、アリサの背中に切っ先を押し付ける。
王宮内では奥宮を守る衛兵のみ拳銃の携帯が許されている。或いは特別な事情で国王から許可された者か。護衛官らは王宮を出る時に携行する義務になっていた。

「あなた……カイヤ補佐官の回した護衛官じゃないわね？」

アリサは護衛官を睨みつけ、必死で冷静さを装った。
男はニヤリと口角を上げて笑う。そしてアリサの質問に答えたのは……。

「おとなしくついてくればいいのに。馬鹿な女ね。ま、コージュ王子を色仕掛けで誑し込んだ女だもの。仕方ないわねぇ」

そう言いながらチグサはゆっくりとアリサに近づいた。結い上げた髪は一筋の乱れもなく、分厚い眼鏡の奥で、黒い瞳が怪しく光っている。
そんな彼女がポケットから取り出したのは、コージュ王子に跨るアリサの写真だった。ビデオの画像から印刷した物らしい。画像は粗いが二人の行為はハッキリと映っている。

「私もマスターテープを見たわ。一体、いつからの関係なの？　五歳も年上のくせに、よく恥ずかしげもなくあんな真似が出来たものね。コージュ王子も国民を騙してたなんて……」
「殿下のことを悪く言わないでっ！」
アリサは頬に力を入れ、言い返した。
「ふーん。あなたって、王子のお妃の座でも狙っていたわけ？」
「違うわ！　わたしは……」
「そうよねぇ。――最後のお願い、もう一度だけ抱いて――なんて言ってたものねぇ」

それは昨夜の台詞に間違いない。
また隠しカメラだろうか。アリサはグッと奥歯を噛み締める。

「残念だけど、あなたを見逃すことは出来なくなったわ。だって、妊娠でもされてたら厄介だもの。さあ、王宮まで行きましょうか。コージュ王子と一緒に死なせてあげる。嬉しいでしょう？」

これまでの陰気な女性からは想像も出来ない、華やかな笑顔だ。
チグサはさも嬉しそうに笑うと、アリサの脇腹にナイフの刃を押し当てた。

第２９話　渦巻く狂気（Ｒ）（前書き）

☆後半に少しだけ陵辱的な表現があります。苦手な方はご注意下さい。Ｒ１５でお願いします。

第２９話　渦巻く狂気（Ｒ）

――シンザキ秘書官もレセプションに出席されることになりました。

奥宮から回されたはずの護衛官は、東の宮の女官や衛兵にアリサの伝言を伝えた。秘書官の護衛は自分が責任をもって行います、と付け加えることも忘れない。

女官らは遠目に、同僚の女性秘書官とにこやかに話すアリサの姿を見たことだろう。何と言っても、相手は秘書官の中で最も地味なチグサである。そんな彼女の手にナイフが握られていることなど、誰も想像できまい。

（何とかしなくては……）

アリサは気持ちばかり焦った。

「ねぇ、どうして？　チグサさん……どうしてあなたがこんな」

「夫は私と結婚したことで、コージュ王子の護衛官に抜擢されたのよ。彼は、私たちと違って一般採用の親衛隊員だから……」

それはアリサも知っていた。

代々王家に使える家系とそれ以外の一般採用者。同じ平民であってもそこには歴然とした差がある。アリサやアヤカワ中尉、そしてチグサの家も王家に仕えて来た。彼らは幼い頃から王家に忠誠を誓い、その為の教育を施されて成長する。彼らにとって採用試験とは名ばかりで、半ば世襲制とも言える体制で王家を支えてきた。

一方、一般採用の職員にとって王宮で働くことは一衛兵か事務職

がほとんどだ。それでもハードルは高い。どれだけ優秀でも、補佐官や秘書官、侍従、女官といった側近にはなれない決まりもある。かろうじて王族の傍に付けるのは、各軍から推薦を受けて親衛隊に登用され、更に護衛官に抜擢されるくらいだろうか。

シュウ・タカマはチグサと結婚することで少尉に昇進した。それが三年前、彼が三十二歳の時である。そして彼の上司は十歳も年下のアヤカワ中尉なのだ。

「採用や昇進のシステムに不満があると言うの？　それと王子の命を狙うことと、何の関係があるの？」

「彼はもっとチャンスが欲しいのよ。平等に評価してもらえるチャンスが。それには……軍人として腕を揮う場が必要なの。戦争ほど、英雄が誕生する場所はないものね」

トーキョー王国は強大な軍事力を持っている。世界平和のために、様々な問題を武力で解決して行けばいい。それは閉塞感を見せている国内経済の活性化に繋がり、最終的には国民の為である、と。

そんな国内の過激派が口にするような台詞を、まさかチグサが語り出すとは思ってもみなかった。

「馬鹿を言わないで！　その結果、国は焦土と化して、わたしたちは大事な人を失うのよ！　何世紀、何十世紀も掛けて、人間が繰り返してきた愚かな過ちだわ。わたしたちはそれをしない！　軍事力はそんなことのためにあるんじゃないわっ！」

だがアリサの叫びも、チグサの耳に届くことはなかった。

彼女は滔々と歌うように語り続ける。

「国王は穏健派で、ワシントンの女王に擦り寄ることしか考えていない。そしてコージュ王子は最も危険な存在……」

コージュ王子の背後には何もない。それは逆に、どんな後見が付

くかで全く変わる、と言うことだ。三人の王子たちの実家は利益優先の立場を崩さない。彼ら貴族階級の人間は安全な場所にいて、資産が増えるなら文句は言わないだろう。

「私の夫をバックアップしてくれる組織にとって、これ以上、ワシントン王国と仲良くなって欲しくないらしいの。でも、敵には回したくない。……苦労したわ、アイリーン王女と一緒の時は狙えないんだもの。あの蛇で、王女が泣いて国に帰ってくれたら良かったのに」

森の中の通路を歩きながら、三人は王宮へ向かう。護衛官は少し離れた位置で、アリサの横にはチグサがピタッと寄り添った。

「今日の王宮にはアイリーン王女もいらっしゃるわ」

「ええ、そうよ。だから、あなたにはここで少し時間を潰してから来て貰うつもりよ」

そう言って指し示したのは、例の死体が見つかった人工池の東屋。思えば、王子のデート用に森の監視カメラを取り外したのは失敗だった。熱センサーは残っているものの、これでは識別出来ないし、証拠にもならない。

チグサは護衛官とアリサを残し、レセプションに戻って行く。彼女は最後に言った。――アリサの出番はアイリーン王女がお召し替えに王宮から出た後、

「全ての犯人はあなたになって貰うわ。理由？　決まってるじゃない。シンザキ秘書官は、国民の宝とも言うべきコージュ王子を色仕掛けで堕とし、お妃の座を狙ったの。でも王子に捨てられて……国王陛下も巻き込んで心中なんて、素敵なシナリオじゃない？　証拠の映像や音声もあるから、誰も疑わないでしょうね。……ご愁傷様」

☆。．．：＊：．。★。

その護衛官は下士官でトダと名乗った。アヤカワ中尉より年上であろう。極端に大柄という訳ではない。だが、陸軍から選抜されて親衛隊に入っただけのことはある。アリサはロープや手錠で拘束されてはいなかったが、とても逃げ出せる隙はない。

しかも二人きりになった途端、トダはアリサの体を舐めるように見つめ始めた。

「競馬場でもそんなスーツを着てたな」

唐突に話しかけられ、アリサは横を向く。

池のほぼ中央、浮島に建てられた西洋風東屋の中だ。それなりに目隠しはされているが、基本的に扉もなければ窓も無い。素通しの空間である。

誰か、近くを通り掛かってくれないか、と思うが……。

ただでさえ、今日は各出入り口と王宮内部の警備に人が集中しているのだ。こんな王宮から離れた森の真ん中に、人が来るはずがない。

もし来るとしたら……それは、チグサやこの男の一味だろう。

「スーツ姿の秘書官との情事……ね」

トダが思い浮かべているのは盗撮画像に違いない。

アリサはわざと相手にせず、毅然として顔を上げていた。

「あんなお子様のプリンス相手じゃ楽しめなかっただろ？　死ぬ前に気持ち良くしてやろうか？」

一瞬で間合いを詰め、トダはアリサの脚に触れる。
だが、その手を勢いよく払い、彼女は怒鳴りつけたのだ。
「わたしに触らないで！　私利私欲のために軍事力を利用するなんて、テロ組織と同じじゃない！　彼らはまだ犯行声明を出すだけマシね。あなたたちは？世界平和？や？国民の為？と口にしながら、結局は罪をわたしに押し付けようとしている。単なる殺人集団に過ぎないのよっ！」

見る間にトダの形相が変わった。
彼はアリサの髪を掴むと床に引き摺り倒す。

「きゃあっ！　いやっ」
トダはサーベルを引く抜き、白い首筋の横に突き立てた。冷たい刃が肌に触れ、銀色の光が目の端に映る。
「少しでも首を動かしたら血管が切れるぜ。でかい声を上げても同じだ。俺が楽しむ間、じっとしてろ」

白いブラウスをキャミソールごと引き裂かれ、ボタンが床に転がる音を聞いた。スカートは腰の上までめくれ上がり、上下の下着を剥ぎ取られ――。
四月の冷たい風にアリサの肌は総毛立ち、その瞳に、木で組まれた天井とトダの顔が映った。

第３０話　秘めた情熱

池の水が震えている。数匹の鯉が只ならぬ気配を察したようだ。水音を立て、水面に波紋を広げる。
東屋の中ではトダがズボンを下ろし、アリサの脚を割り込んだところだった。

「動くなよ。ちょっとでも動いたら首がザックリ斬れちまうぞ」
トダは興奮した様子で笑うと、
「よがり声も上げんじゃねえぞ。いい子にしてたら天国に逝かせてやるよ」

ほぼ同時に、トダの背後から男の声が上がる。

「貴様は地獄に逝かせてやろう」

サーベルを抜き、トダの首筋にピタリと当てたのはコージュ王子であった。

☆。．：＊：．。★。．☆。．：＊：．。★。

『タカマ少尉と下士官のホンダにアイザワ、計三名を緊急逮捕して下さい。あと、東の宮の四階フロアに入った護衛官全員を拘束。不審な動きをする人間を片っ端から取り押さえて……』

歓迎レセプションの最中であった。

コージュ王子はカイヤ補佐官に王宮事務室まで案内され電話を取る。受話器から流れてきたのは、切羽詰ったアヤカワ中尉の声だった。

『中尉、落ち着いて下さい。その三名は証拠があるんですね？』
『そうです！　早く……あ、少尉の妻は秘書官です。彼女も至急拘束したほうが』

中尉の言葉を聞きながら、サラサラとメモに名前を書きとめ、それをカイヤ補佐官に見せる。アヤカワ大佐に連絡を取り、直属の部下に逮捕させるよう……そういった内容だった。

『殿下！　アリサは……彼女は無事なんですよね？　携帯に掛けても出ないんです』
『東の宮に待機を命じています。護衛には大佐の部下から回してもらいました。ですから彼女に危険は』

コージュ王子がそこまで言った時、脇にカイヤ補佐官が立つ。

「お待ち下さい、殿下。アヤカワ中尉の名前で、レセプション直前、護衛官を替えるように通達が来ていました。間違いなく、親衛隊本部の中尉専用ＦＡＸから送信されたものでした。私は了解したのですが……」
カイヤ補佐官の顔は青褪めている。
そんな補佐官の声が聞こえたらしい。受話器からは『違う！　俺はそんな指示は出してないっ！』そう叫ぶ中尉の声が流れた。

その瞬間、コージュ王子の中で何かのスイッチが入った。
ドクンと胸の鼓動が聞こえ、体中に熱いものが漲り始める。呼吸が乱れ、耳鳴りがした。式典用のシルクシャツに覆われた背中が汗

でびっしょりになり……。

「この、馬鹿野郎っ！　どうしてそれを先に言わないっ！」

彼らにとって初めて耳にする王子の怒声だ。

どんな時でも慈愛に満ちた笑みを絶やさず、身分など関係なく一人一人に優しい言葉を掛ける。その天使の化身とも言うべきコージュ王子が……。

これにはその場にいた全員と、事務室の窓ガラスまで小刻みに震えた。

「東の宮に連絡だ。アリサの所在を確認させろ。王宮の出入り口は全て封鎖。ネズミ一匹外には出すなっ！　怪しい護衛官は全て取り押さえろ。――くそったれ！　アリサに何かあってみろ。全員この手でぶっ殺してやる！」

拳を握り締め、王子はガンッとスチール製のデスクを殴った。それほど丈夫なものでなかったのか、表面がわずかに凹む。

コージュ王子の様子に、カイヤ補佐官も他の護衛官たちも、あんぐりと口を開いたままだ。

今度はそんな彼らに向かって、

「何ボヤッとしてるんだ！　さっさと動けっ！」

そう怒鳴りつけたのだった。

『殿下！　今、そちらに向かっています。道が混んでいて……三十分は掛かります。どうかアリサを』

『判ってる。アリサはどんなことをしても俺が守る！』

『……殿下？　それは』

中尉の質問は軽く無視して、受話器を叩き付けた。そのまま、王子はレセプションを放り出し、東の宮に向かったのである。

東の宮にはすでに連絡が入っていた。タカマ秘書官がアリサを迎えに来て、二人は王宮に向かったと言う。もちろん、護衛官も一緒だった、と。

東の宮から王宮までは一本道だ。

無論、遠回りするつもりなら北の宮に向かっても王宮には辿り着ける。他には王宮までの道中で森に入る数本の脇道と、西の宮に向かう脇道が一本あった。

その時、王子の耳に一つの報告が入る。それは森の中、池の浮島でサーモセンサーが人間の体温を感知している――というもの。

護衛官など無視してコージュ王子は走り出した。

☆。・：＊：・。★。

「そのまま、指一本動かさずアリサから離れろ。従わねば――殺す」

丸木の橋を渡った瞬間、下卑た男の声が聞こえた。そして目に入ったのは、アリサの真っ白な二本の脚！

「これは、これは、殿下。この女は男なら誰でも咥え込む、娼婦のようなものです。殿下もよくご存知なのでは？」

トダはわざとらしくアリサを見下し、コージュ王子を挑発する。

「無駄なことはするな」

王子の短い命令に、トダは舌打ちしつつアリサから体を離した。

トダのサーベルは木の床に斜めに突き刺さり、アリサの動きを完全に封じている。頚動脈に数センチといった辺りか。

「アリサ、そのままゆっくり右に体をずらせ。立ち上がったら、俺の後ろに来るんだ」

アリサはビクビクしながら、ようやく銀の刃から逃れる。王子もホッと息を吐いた瞬間だった。トダが王子の体に飛びついたのだ。

すぐに気がついた。そのままサーベルで喉を切り裂けばよかったのだ。だが、コージュ王子は人を殺したことがない。彼は躊躇し、そのため、反応が遅れたのだった。

サーベルを持つ右手を押さえられ、背後を取られる。

「殿下っ！」

泣くようなアリサの声が東屋に響く。

「頭が良いだけの聖人君子様かと思いきや、年上の愛人をお持ちとは羨ましい限りですねぇ、殿下。あんたが死んだら時代が変わる。俺たちのような下っ端でも、腕一本で名前を挙げることができる世の中になる。どうせ、あんたは要らない王子様だ。――死んで下さい」

自身のサーベルの刃が首筋に近づき……。

トダとコージュ王子では体格に大きな差があった。そして『どうせ要らない王子様』その一言に彼の胸は抉られる。

だが――。

「笑わせるな。自国の王子に刃を向ける――貴様に相応しい呼び名は、罪人以外の何者でもない！　恥を知れっ！」

コージュ王子の放つ凛然たる叱声にトダは怯んだ。

その一瞬の隙に、王子は自らサーベルを離す。膝を屈め、素早く床に転がり――。再び、身構えたその時、トダは奇声を上げ、王子に突っ込んできた。

その手には王子自身のサーベルが握られ……。

第３１話　戦う王子

振り下ろされる寸前――

空気が弾ける音と共に火花が飛び散った。

コージュ王子の手には、灰色の鈍い光を放つ拳銃が握られている。

銃弾はトダの右肩を貫く。苦痛に満ちた呻き声と共に、トダはもんどりうって床に倒れ込んだ。それでも王子から奪ったサーベルを床につき、どうにか起き上がる。そのまま身を翻し、橋を渡って逃げようとした。

――正体が知られた上に手負い。今の奴なら、誰かを傷つけることはおろか、殺すことすら厭わないだろう。

王子は立ち上がり、片手で銃を構え二発目を発砲。今度は左足を撃ち抜く。トダは橋の上に倒れ、遂には動かなくなった。

「アリサ、動けるか？」

「……殿下……」

彼が手にしているのは『ＳＩＧ　ＳＡＵＥＲ　Ｐ２３０』――王宮親衛隊が使用している公式拳銃だ。それを軍服の下、腰に付けたホルスターに仕舞い、アリサに歩み寄る。

間近で見ると、アリサの身体はボロボロだった。あちこちに擦過傷があり、髪も酷い有様だ。スーツの前を押さえて胸元を隠すが……。肩にはブラジャーの紐で付けられたような青痣が見える。床に落ちたショーツも引き千切られており……。

コージュ王子は再び腰に手をやると、

「あの、クソ野郎、頭に一発ブチ込んでやる！」
「ま、待って下さい。わたしは大丈夫ですから……殿下、どうしてここに？　今はレセプションの最中では？　わたしのことより、早く王女の許へお戻り下さい。タカマ秘書官は夫である少尉のために動いてるんです。王宮で何かするつもりなんです！　陛下とアイリーン王女を守らないと」

アリサは骨の髄まで王家に仕える人間だ。そして、コージュ王子の為を考えて動く。
義務とか責任とか、最初に逢った時ですら「親に迷惑を掛けるな」「相手の気持ちになれ」と王子に説教したくらいだ。
下士官のトダに襲われ、本当は怖かったに違いない。今も小刻みに震えている。すぐにも王子の胸に飛び込みたいだろう。それでも毅然と前を向き、公人として為すべきことを為せ、と言う。

「殿下……あの、いつの間に拳銃を」
よほど気になったのか、アリサは不思議そうに尋ねる。通常なら、王族が拳銃まで携帯することは稀だ。しかし今は普通の事態ではない。
「陛下に許可を貰った。少尉らのことは心配要らない。アヤカワ大佐直属の部下が、逮捕に当たっている。タカマ秘書官も、カイヤ補佐官が拘束するはずだ。とにかくお前を安全な場所に避難させるのが先だ」
言いながら、コージュ王子は意識がなくなったトダの手からサーベルを取り上げる。やはり、拳銃よりこっちのほうがしっくりくる。そんなことを考えつつ、サーベルを鞘に戻した。
そのままアリサの手を引き、浮島から丸木橋を渡ろうとした時、何者か橋を駆け抜け正面から王子に斬りかかった！

「コージュ王子！　死ねぇーーっ！」

その一声に、王子の胸から迷いが消えた。

彼は咄嗟にアリサを東屋に向かって突き飛ばす。そのままサーベルを引き抜き、問答無用で下から斜め上に斬り上げた。陸軍指揮刀はやや浅めに反っており、?突き?より?斬る?のに適している。確かな手ごたえと共に、王子はサーベルを振り切り再び構えなおした。

足元に護衛官の制服を着た男がうつ伏せで倒れ込んだ。男から流れ出る血が、池を赤く染めていく。

「なかなかどうして、大したものですねコージュ王子殿下」

橋の正面に立ち、薄ら笑いを浮かべていたのはタカマ少尉であった。隣に立つのはおそらく下士官のホンダと言ったか。そうなると、王子が斬った男は下士官のアイザワかも知れない。

「お前たちの背任行為について、アヤカワ中尉が証拠を押さえたと言っている。諦めて投降せよ。――タカマ少尉、何処の誰に唆されたかは知らぬが、私ひとり殺したところで、我が国は戦争など起こさぬ。無駄なことだ」

「そんなこと、やって見なければ判らないでしょう？」

そう言ってタカマ少尉が手にしたのは、サーベルではなく……王子と同じ拳銃であった。

「貴様に許可は下りてないはずだ。すぐに衛兵が飛んでくるぞ」

「チップに細工をしました。奥宮の護衛官が駆けつけた格好になっているはずです」

下士官の方を見るが、拳銃を所持しているのは少尉だけのようだ。
少尉も、そんな王子の視線に気付いたらしい。
「さすがに複数は調達出来ませんでした。王子のサーベルの腕前はアヤカワ中尉並と聞いてますからね。だが、射撃はそれほどでもない。違いますか？」
拳銃には一丁ずつチップが取り付けられている。それだけで誰の銃かすぐに判り、王宮敷地内の何処にいるのかも親衛隊本部のモニターで確認できるのだ。
おそらく、奥宮の護衛官のチップを奪い、付け替えたのだろう。
少尉自身の拳銃がここで確認された衛兵らが飛んでくるはずだ。しかし、奥宮護衛官が王子の傍に居ると判断されたらどうだろう。
頼みの綱はトダを撃った時の発砲音だが……。それは、王宮まで届くとは思えない音量だった。

浅い呼吸音が人工池の上を交差した。
銀色の銃口がコージュ王子を睨んでいる。仮に、彼が死んだところで、王子は他に三人もいるのだ。だが、間違いなくアリサも一緒に殺されるだろう。
春の風に飛ばされ、森の中にはない桜の花がコージュ王子の前に舞い落ちた。盛りは過ぎ、すでに散ったはずなのに。たった一枚、それはひらひらと踊るように揺れ……。
――風が止まる。
引き金に掛かったタカマ少尉の指がかすかに動く。同時に、コージュ王子は身を屈めサーベルを矢の如く放った。
次の瞬間、衝撃が耳の横を通過する。左肩に走った痛みは、まるでバーナーの炎に焼かれたようだ。乾いた発砲音と火薬の匂いを感

じたのは、銃弾が肩を掠めた後だった。

「殿下っ、殿下！　殿下ーっ！」

背後からアリサが駆け寄る音が聞こえた。

「来るな！　ガゼボから出るんじゃないっ！」

王子の投げたサーベルは目晦(めくら)ましに過ぎない。体勢を整えたら、奴はニ発目を撃つだろう。その前に――。王子は腰のホルスターから拳銃を抜き、床にうつ伏せに飛び込む。

「俺たちは戦場に出る！　最強の軍事力で――世界を平和に導く英雄になるんだーっ！」

少尉の雄叫びが聞こえた。彼は再び銃を構え、王子に照準を定めている。

それはほんのわずかな差だった。王子は片肘で支え、寝撃ちで発砲する。続けて三発。うち二発がタカマ少尉の腹部に、一発が右腕に命中した。その衝撃で、少尉は踊るように背中から地面に倒れる。

しかし、息つく暇もない。

少尉の手からこぼれ落ちた銃を下士官のホンダが拾い上げ、コージュ王子に向ける。

「なんでこんな子供(ガキ)ひとり……に……っ！」

下士官の声が途切れた。

引き金を引く寸前、腹部に二発の銃弾が撃ち込まれたからだ。

「ふざけんじゃねーぞ。役立たずの王子ひとり始末できないで、どんな戦場で英雄になるつもりだ？」

コージュ王子は橋の上を転がり、欄干に右腕を固定して発砲したのだ。

Ｐ２３０のマガジン装弾数は六発、薬室に一発の計七発。弾切れでは使い物にならない。王子がホルスターに銃を納めたその時、アリサの叫び声が――。

「殿下、後ろーーっ！」

第３２話　ただ、守るために…（前書き）

☆少し残虐的な表現があります。苦手な方はご注意下さい。

第３２話　ただ、守るために…

頭の後ろで風を斬る音がした。
振り向くより先に、コージュ王子は再び床に転がる。たった今まで、彼の首があった場所をサーベルの刃が切り裂いた。

タカマ少尉に先駆けて、正面から突っ込んできた下士官だ。王子のサーベルを体に受け、相当な量の出血があり、すでに死んだものとばかり思っていた。

「……お前も道連れだ……コージュ王子、死ね……」

途切れる声、荒い呼吸で肩を上下させつつ、下士官は王子に斬りかかる。
幸運なことに、少尉の弾は王子の左肩を掠めただけだ。とはいえ、皮膚は裂け、信じられないほど肩が熱く重い。素早く体を起こし、逃げることもままならず……反撃する武器もなかった。
王子は仰向けで橋の上に転がり、サーベルを持つ下士官の手首を右手で掴む。そのまま横に振り払おうとするが……片手では力が出ない。

最早、下士官に助かる道はない。コージュ王子の命だけを狙って、血走った目で最期の力を振り絞ってくる。

（まずい、これでは……力負けする）

下士官は傷口が裂けるのも構わず、サーベルに体重を乗せた。
コージュ王子の喉元に白刃（はくじん）が迫る。せめて、相打ちにしなければ

……アリサを守ることが出来ない。

その時、不意に下士官の力が弱まった。

☆。・‥＊‥・　。★　。・☆。・‥＊‥・　。★　。

傍に居られないなら、死んでも構わない。だが、同じ死ぬなら……コージュ王子の役に立って死にたい。

王家に仕え続けたシンザキ家に流れる血だろうか。どんな手段であれ、王宮に連れて行かれたらチグサを道連れにしてもコージュ王子を守ろう。

アリサはトダに襲われながらも、そのことだけを考えていた。

なのに……彼女を救ってくれたのがコージュ王子だと判った瞬間、死にたくないと思ったのだ。

アリサは懸命に涙を堪えた。王子に抱きつき、一旦涙を流してしまえばもう止めることは出来ない。身分も責任も忘れ、愚かな独りの女になる。今この時すら、コージュ王子さえ無事なら……他の誰がどうなっても構わない。そんな想いに囚われている。

最悪の窮地にあっても、コージュ王子はまさに光の王子であった。

王族貴族をはじめ、将官の多くはサーベルなど飾りに過ぎないと聞く。だが、王子は違う。親衛隊生え抜きの護衛官の攻撃をかわし、サーベルも銃も遜色なく扱う。いや、それ以上だ。

アリサを庇い、戦う王子から彼女は目が離せない。

強がりで我がままで、思い通りにいかないとすぐに駄々をこねる。そのくせ、涙もろくて甘えん坊で……。

アリサが十四年前に出逢った、天使のような幼い王子はもういな

い。

コージュ王子が銃の弾を撃ち尽くしたところで、立っている敵はいなくなった。いい加減騒ぎを聞きつけ、衛兵もやって来るだろう。

ホッとして王子の許に行こうとしたとき、アリサの視界で何かが動いたのだ。

サーベルを手に正面からコージュ王子に突撃し、一刀に斬り捨てられた下士官がゆらりと体を起こした。それは一見、操り人形のような動きだ。気配を殺しているのだろうか、王子は背中を向けたまま、気付く素振りもない。

「殿下、後ろーーっ！」

素人のアリサの目にも、明らかに王子の劣勢が映った。

（殿下が死んでしまう……わたしのプリンスが……）

自分の命より、何より大事なコージュ王子だ。

その時、アリサの目に一本のサーベルが映った。東屋の床にトダが突き刺したサーベル――アリサは無言で引き抜いた。

彼女に使い方など判ろうはずもない。およそ一～二キロの重みが腕にグンと掛かる。だが、アリサは両手でしっかりと掴み、躊躇うことなく突撃した。刃先が下士官の背に触れ、瞬く間に吸い込まれる。

噴き出すような出血はなかった。下士官は唐突に振り返り、アリサを睨んだ直後……糸が切れたように、垂直に床に崩れ落ちて行く。

「ア、アリサ……お前」

王子の声に彼女は現実に引き戻された。
足元には、男が仰向けで転がっている。目を剥き、小刻みに痙攣し、今にも息絶えそうだ。当の昔に、男の体から抜けたサーベルを、アリサは掴んだままである。離したいのに、手が離れない。まるで、接着剤で固められたかのようだ。

「あ……あ……わたし、人を殺して……」
コージュ王子は跳ねるようにして立ち、アリサの横に駆け寄る。
「こいつは王子殺害を企てた反逆者だ」
「でも……」
王子は問答無用でアリサの手からサーベルをもぎ取った。そして……あろうことか、男の体に突き立てたのだ！
一瞬で痙攣が止まり、それはただの屍（しかばね）となる。
「殿下っ！？」
「俺が殺した。お前は俺を助けただけだ。余計なことは一切考えるな！　これは王子としての命令だ、判ったなっ！」

夢中でした事とはいえ、人の背中に刃物を突き刺したのだ。震えの止まらないアリサの体を、王子は渾身の力で抱き締める。王子の体からは、咽るような火薬と鉄の匂いがした。

「殿下！　コージュ王子殿下っ！　ご無事でございますかっ！？」

森の中から数人の衛兵が走ってくる。
だが、王子の顔に浮かんだのは安堵ではなく、緊張の色だった。アリサを背後に庇い、男に突き立てたサーベルに再び手を掛ける。駆けつけた衛兵が、敵の一味であった場合を考えているに違いない。およそ十名以上……もし、彼らが敵なら王子に勝ち目はあるのだろ

うか。
アリサは動揺を押しのけ、奥歯を噛み締めた。王子を守るためなら、自らの手を血に染めるくらい何だと言うのだろう。
しかし……。
「タカマ少尉がリーダーを務めるピストル射撃のサークルが活動拠点になっていました。親衛隊のメンバーで構成されており、人数は九名。うち五名をすでに確保。残り四名は……」
コージュ王子に撃たれた少尉本人と、下士官のホンダ、足元に転がるアイザワ、東屋の近くに倒れたままのトダ、以上の四名であった。
アイザワ以外の三名は息があり、駆けつけた衛兵らにより運ばれる。

ようやく、アリサの全身から力が抜け……その時、大きな軍服が彼女の体を包み込んだ。
「胸が見える。前のボタンをしっかり留めろ」
軍服の丈夫な生地が破れ、肩口が焼け焦げていた。シルクの白いシャツ一枚になると、王子の左肩が血で染まっているのが判る。
「誰か！　すぐにご典医を呼んで下さい！　殿下の傷の手当てを……」
「そんなことより、タカマ秘書官も拘束したんだろうな？」
「殿下っ」
アリサの心配を無視してコージュ王子は衛兵に尋ねる。
ところが、
「そ、それは……王宮の敷地から出ていないのは確かなんですが……」
秘書官のチグサがいまだに見つからないと言うのだ。

コージュ王子のどこにそれほどの力が残っていたのだろうか。報告を聞いた直後、木々を揺るがすほどの怒声が森全体に響き渡った。

「馬鹿者ーーーっ！！　なんでそれを先に言わないっ！　奴らは時限爆弾を作る技術があるんだぞ！」

アリサの胸にも不安が広がる。

チグサは『国王陛下も巻き込んで心中』確かにそう言ったのだ。

アリサがそのことを王子に伝えた時、彼は王宮に向かって走り出した。

第３３話　王子様のキス

国王は専属護衛官に守られ奥宮に避難していた。アイリーン王女も迎賓館に引き上げている。王宮内は衛兵が駆けずり回り、タカマ秘書官の捜索に必死であった。

「タカマ秘書官はまだ見つからんのかっ！？」

王宮に飛び込むなり、コージュ王子は叫んだ。

一箇所に集められている招待客や、レセプションパーティのスタッフは王子の姿を見て息を呑む。彼らは出入り口が封鎖されている為、王宮の門外に出ることが出来ないのだ。好き勝手に動き回ることも許されず、全員がその場に留まっていた。

国王命令で王子の保護に来たカイヤ補佐官まで動きが止まる。

その只ならぬ姿に言葉が出て来ないらしい。

「コージュ……王子殿下、ご無事で何よりでした。陛下からのご伝言です。殿下もすぐに奥宮に避難するよう、とのことで……」

「避難なんぞしてる場合かっ！　タカマ秘書官が爆弾を所持している可能性が高い。とっとと捜せ！」

「し、しかし、肩から血が出ております。早く手当てを」

それでも、カイヤ補佐官はコージュ王子を奥宮に誘導しようとしたのだ。

だが、そんな補佐官の襟首を掴み、王子はグイと引き寄せた。

「やかましい！　王宮を吹っ飛ばされたくなければ、ごちゃごちゃ言わずに捜すんだっ！」

補佐官は無言で頷くと、数名の衛兵を伴い走り去る。

アリサはそんな王子の様子を少し下がった位置で見ていた。
この危機に変な話だが、コージュ王子は生き生きしている。まるで？王妃の息子？という足枷が外れたかのようだ。
王子に言われた通り、アリサは軍服の前をしっかりと留めた。すると、裾が膝の上辺りにきて、まるでスカートを穿き忘れたように見える。どう考えても異様な格好だが……この騒ぎに誰も気に留める様子がない。

チグサはどこに行ったのだろう。
アリサに深い考えなどない。何気なく王宮大広間の吹き抜けを見上げた時だった。そこに、三階バルコニーからこちらを見下ろすチグサの姿が！

「殿下！　上です。三階のバルコニーにチグサさんが！」

コージュ王子は衛兵を連れ、三階に繋がるオープン階段に向かう。当然のようにアリサも後を追おうとするが……。

「アリサ、お前はここに居ろ」
「いいえ、わたしも殿下のお傍に」
「駄目だっ！　これは命令……」
声を荒げた瞬間、王子はわずかに体が傾いだ。掠めただけとはいえ、銃弾に肩の肉が削がれている。出血もかなりの量だろう。ここまで来たら、男の意地と王子のプライドだけで立っている可能性が高い。
相手は秘書官、それも女だ。とはいえ、夫がコージュ王子に撃たれたことを知れば、何をするか判らない。いざという時は、アリサ

が王子の盾になるつもりであった。
「嫌です。ご命令には従えません。後でいかなる処罰も受けます。わたしは」
アリサがそこまで言った時、王子は信じられない行動に出たのだ。
彼はアリサの手首を掴み、引き寄せると数百名の面前で唇を重ねた。予想外の王子の振る舞いに、アリサは声も出ず、目を見開いたままキスされていた。
「お前は俺の女なんだっ！　言う通りにしろ。俺が待てと言ったら、ここで待ってるんだ！」
まるで二人きりのような口調に、アリサの思考は完全に停止した。機械のように首を縦に振るだけで……。ハッとした時には、コージュ王子はすでに階段を駆け上がっていた。

☆。・：＊：・　。★　。・☆。・：＊：・　。★　。

アリサを守るために、腕を磨いてきたのだ。
それが、肝心なところでアリサに助けられてどうする。サーベルを手に立ち尽くす彼女を見た時、王子は自分の不甲斐なさに苛立った。
チグサはすでに三階にはいないだろう。だが、この付近にいることは間違いない。下の階には下りて来られないように封鎖した。後は上に追い込み、爆弾を仕掛けた場所を吐かせれば……。

「待っていましたわ。コージュ王子殿下」
三階のバルコニーにチグサは立っていた。
コージュ王子は驚きを隠してチグサに対峙する。
「アリサに罪を押し付け、俺や陛下を巻き込んで心中する予定だったらしいな。ってことは、爆弾だな？　お前の亭主をはじめ全員が捕まった。俺が……少尉を撃った。奴の傍に行ってやれよ」
チグサが諦めて投降してくれるのが一番だ。それが駄目なら、夫を撃たれたと聞き、激昂してコージュ王子に殴り掛かってくれたらいい。いざとなれば夫の処遇を盾に、爆弾の場所を聞き出そう。
だが、そんな思惑をチグサは見事に外してくれた。
真面目で通っていた女性秘書官は、何かが壊れたように笑い始めた。
「私が傍に行って、あの人が喜ぶ訳がないじゃない。昇進目的で私と結婚したような男よ。こんな美人でもなければ若くもない女と……。そこを、戦争賛成派に見事に煽られたのね。――馬鹿な男」
チグサの言動はあまりに予測からずれており、王子らは動きが取れない。
気持ちばかり焦るが、その時、チグサが動いた。
「おいっ！　動くな。発砲するぞ！」
奥宮から回された衛兵が拳銃に手を掛ける。
「待て。――なら、話は早い。お前は昇進目的の悪党に騙されただけなんだ。爆弾の在り処を言えば、情状酌量の余地はある。確か……弟が侍従見習いをしていたな。今なら、類は家族には及ばない。

俺が約束する」
コージュ王子は衛兵を手で制し、少しずつチグサに近づいた。
「アリサさんが大嫌いだったわ。若くて、綺麗で、あのアヤカワ中尉からプロポーズされながら……。プリンスにまで手を出して」
チグサはスッと手すりに触れ、下から見上げるアリサに視線を移す。
「でも、プリンスとの関係が明るみに出たらお終いね。いい気味……」
フッと片頬を吊り上げると、チグサは一気に手すりを乗り越えた。
一瞬のことだった。
王子や衛兵が止める間もなく、チグサは最初から飛び降りるつもりで待ち構えていたのだ。
階下から叫び声が上がり、コージュ王子は手すりに飛びつく。三階とはいえ、通常の四階以上の高さに匹敵する。おそらく、チグサは即死だろう。誰も巻き込まず、アリサが無事なことにホッと息を吐く。
チグサ独りで運べたなら、爆弾は数日前に発見された物と同タイプ。その場合、爆破の規模はそう大きくはない。てっきり、アイリーン王女が下がった時にアリサを連れて来て、無線で爆破させるものとばかり思っていた。
だが、チグサは自ら死を選んだ。
コージュ王子の額に玉のような汗が浮かぶ。
時限式ならタイムリミットは何時なのか、果たして解体する時間は残されているのか……。大広間に残った数百人の存在が、コージュ王子の胸に重く圧し掛かった。

第３４話　タイムリミット

「え？　護衛官の人たちが探してたのってこの人……」

チグサの体は一瞬で一階フロアに下りて来た。

アリサは言葉もなく立ち尽くす。こんな時ですら、落ちてきたのがコージュ王子でなくて良かったと、心から思う。

逃げようとした様子ではなかった。明らかに、チグサは自分から飛び降りたのだ。

彼女は犯罪者だ。決して仲が良かったとも言えない。でも、同僚の無残な姿にアリサは目を覆った。そして、せめて人目に触れないようにしてやろうと思い、隅に寄せられたテーブルに近づいた。

白いクロスに手を掛けたとき……スタッフの呟きが耳に入ったのである。

「ねぇちょっと。あなたたち彼女を知ってるの？」

アリサに声を掛けられ、二人の女性はビクッとする。二人ともレセプションパーティの給仕担当だ。紺の膝下ドレスに白いエプロンを掛け、髪がしっかりと括っている。二人とも臨時雇いらしく、アリサに見覚えはなかった。

そのうちの一人の女性が口を開く。

「はい。その女性がレセプションで使うからって、ステージの隅に黒いケースを幾つか……。あ、でも護衛官の方に見せて確認されてましたよ。だから……」

彼女らは、コージュ王子の秘書官……アリサの顔は知っていた。だが、国王のスケジュール調整が主な仕事であるチグサのことは、タカマ秘書官と言われても、ピンと来なかったのである。

大広間の正面入り口から最奥に上座が作られている。一段上がった、通称ステージだ。

国王・王妃の椅子が置かれ、王子の席もそこに用意される。もっとも、王子たちがのんびり着席していることなど、滅多になかったが。今回、第二・第三王子は王命で地方の公務に出席している。明日以降シティに戻って来る予定だ。

アリサは国王と王子の席が置かれたステージを見て廻る。

すると、カーテンの影に五個の黒いケースが置かれていた。そのうちの四個までは間違いなく、レセプションの進行表や会場のセッティング、招待客の名簿などが入っていて……。

五個目のケースが異常に重く、アリサの手が止まった。

（開けた瞬間に爆発したら……）

そんな不安がアリサの胸を掠める。

だが、チグサの言った『アイリーン王女がお召し替えに王宮から出た後』。その時刻は、アリサの記憶にあるタイムテーブルではもうそろそろだ。

侵入者の持っていた爆弾は時限発火式のものだった。アリサは息を止めケースを開ける。途端に、時計が秒針を刻む音が彼女の耳に聞こえた。

アナログタイプの時計が最初に目に入った。たくさんの銅線が見える。映画では赤や青に分かれていて、どれを切断するか悩むシー

ンが多い。しかし、実物は灰色のビニールコーティングされたものばかりだった。どれが何に繋がっているのか、素人のアリサにはさっぱり区別がつかない。
時計の長針がカチッと動いた。今が十一時五十分の訳がない。おそらくは、長針と短針が重なる十二時ちょうどの位置で爆発するのだろう。後五分では処理班を呼ぶことも出来ない。コージュ王子なら、解体することが可能だろうか？
アリサが王子を呼ぼうとした時だった。

「シンザキ秘書官！　何をしてるのです！　コージュ王子が倒れられました。すぐにこちら……に」

それはカイヤ補佐官の声だった。
――爆弾をコージュ王子から離さなくては。
王子が倒れたと聞いた瞬間、アリサが思ったのはそのことだけだ。

「それは……まさか、爆弾ですか？　すぐに処理班を」
「間に合いません。もう、十分を切っています」
「で、では、すぐに、全員退避を」
「わたしが王宮から持って出ます。なるべく、人のいない所まで……。殿下をお願い致します」

爆弾ケースの蓋を閉じ、両手でしっかり抱くとアリサは王宮の外に向かって走り出した。

☆。・：＊：・。★。

最初は王宮の森に向かうことを考えた。

普段なら人は少なく、池の周囲には誰もいない。だが今は、さっきの件で事後処理の衛兵が大勢いて、怪我人を搬送するための緊急車両が入っていた。
そんなところに爆弾を持っては行けないし……よく考えたら十分以上掛かるだろう。

アリサはそのまま王宮から出て、王宮前広場に行こうと思いつく。
今日は一般人立ち入り禁止になっている。間に合うかどうか判らないが……何もせずに放り出すよりましだ。
このまま……「爆弾だから何とかして」と衛兵に任せたらいいのかも知れない。だが、任せられたほうも困るのが目に見えている。アリサには、自分が助かれば人がどうなってもいいとは思えなかった。

王宮から正門まで駆け抜けるアリサを、何人かの衛兵が止めようとする。

「爆弾よ！　近づかないで！」

この時、カイヤ補佐官から各分隊に緊急連絡が廻っていた。「シンザキ秘書官に協力して下さい」――しかし、爆発物処理班の到着に十分以上と言われ、混乱していたという。

ようやく正門に辿り着き、堀の向こうに王宮前広場が見えた。
数十メートル先にポッカリと空白地帯がある。だがそこまでに、多くのマスコミ車両が道を塞いでいたのだ。

ケースの中からは時を刻む音が聞こえる。
今のアリサには、残り時間を確かめる余裕すらない。最早、出来ることは一つだけだ。なるべく誰も巻き込まないよう……彼女はケ

ースを胸に抱え、覆い被さろうとした。

「アリサーーっ！」

不意に背後から名前を呼ばれ、振り向いた。

信じられないことに、一台のバイクが王宮から正門までの通路を疾走している。それも、もの凄いスピードでアリサに向かって走ってくるのだ。

バイクは急ブレーキを掛け、彼女の真横で停まった。

「アリサ、そいつを貸せ」

アヤカワ中尉である。

少尉らの犯罪の証拠を掴む為、王宮の外に出ていたはずだ。それがなぜ、アリサの後方から……しかもバイクでやって来たのだろう。訳が判らない。

「ユキちゃんも離れて……これは爆弾なの、だから……」

「だから寄越せと言ってるんだ！」

中尉はアリサの腕から強引にケースを奪うと、再びバイクを走らせる。時間は一分どころか、三十秒も残ってはいないはず……。

そう思った直後、アヤカワ中尉は橋の途中でハンドルを切る。そのまま、堀の中にバイクごとダイブした！

「……ユキちゃん！？」

アリサは懸命に堀に向かって走る。

中尉の無事を確認しようと橋に飛びつく寸前――背後から、強い

力で抱き止められた。

一秒後、地鳴りと共に堀の水が天に向かって吹き上げた。
その凄まじい水圧は、あろうことか橋を下から突き崩す。吹き飛ばされた砂利や大小の石が周囲の人々に降り注ぎ、直径五十センチ大の石に直撃された車両は屋根に大穴が開いた。
アリサの身体にも水と土砂が降り掛かる。橋の近くにいた為、もう少しで崩壊に巻き込まれるところだった。
だが、それらからアリサを庇ってくれたのは……。

「アリサ……お前、無茶し過ぎだ」
「殿下。どうして？　だって……倒れたって」
「お前が爆弾抱えて出て行ったと聞かされて、俺が呑気に倒れていられると思うかっ！？」

王子は血相を変えて怒鳴る。呼吸は乱れ、全身汗だくだ。傷だけでも辛いはずなのに、きっとアリサのために全力疾走したのだろう。彼女の胸は潰れそうはほど痛かった。
しかし、今はコージュ王子に抱きつき泣いている場合ではない。

「殿下……中尉が。アヤカワ中尉が、爆弾と一緒にお堀に飛び込んだんです！　早く助けて下さい」
「その必要はない」
「殿下っ！？」

いくら王子でも酷い言い様だ。アリサが中尉と結婚したいと言ったせいかも知れない。
彼女は王子の手を振り切り、
「判りました。結構です。わたしが行きます！　中尉を見殺しには

出来ません！」
堀に飛び込むため、軍服を脱ごうとした。
「慌てるな！　アリサ、後ろを見ろ」
コージュ王子が指差した場所には……。
全身から水を滴らせ、泥だらけになりながら微笑むアヤカワ中尉がいたのだった。

第３４話　タイムリミット（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。
次回最終回です。
よろしくお願い致します。

第３５話　未来に続く光（前書き）

☆最終話です。

第３５話　未来に続く光

護衛官による不祥事は、しばらく世間を騒がせた。不幸中の幸いは、爆発による死亡・重傷者はゼロ、軽傷者が数名出ただけに留まったことだろう。

事件の翌日、王宮病院にいたコージュ王子のもとにアイリーン王女が訪れる。それは緊急帰国の挨拶であった。

『イーサンの具合が思ったより悪いらしいの。私の婚約や結婚はしばらくなしになりそうよ』

アイリーン王女は控え目に兄の容態を話したが……。補佐官筋の情報では、危篤という話だ。自国のためを考え、公人としての姿勢を貫くあたりが王女らしい。

『トーキョー王国のアクシデントに巻き込んで申し訳なかった。次回はもっと、有意義な滞在になることを約束する。イーサン王子が元気になられたら、ぜひ一緒に……』

王女もコージュ王子の気遣いに気が付いたのだろう。微笑みを浮かべると、

『ええ、ぜひ。あなたはアリサと一緒に来てちょうだい。――その時は妃殿下かしら？』

後半の台詞は小さな声で、王子の耳元で囁く。あえて返事はせず、少しだけ大人になったような苦笑いを浮かべるコージュ王子であった。

「シンザキ秘書官を助けてくれたことには感謝しています。中尉自身も無事で何よりです」

嫌味も込めて、わざとらしくこれまでの口調で話した。

「はあ……ありがたきお言葉」
アヤカワ中尉は恭しく頭を下げた。

事件から十日後、コージュ王子は中尉を病室に呼んだ。？感謝の言葉？という名目で、先ほどからチクチク苛めている。
理由は当然、最後の最後で？王宮を守った英雄？の座を中尉に持って行かれてしまった所だろうか。マスコミは、爆弾を抱え、堀にバイクごと飛び込んだ中尉の姿をカメラに納めていた。それが一斉に公開され、中尉は一躍？時の人？だ。しかもほぼ無傷とあって、一身に注目を浴びていた。
無論、それには王室側の事情もある。
コージュ王子の血だらけの姿や、アリサとの諸々を隠さなければならない。反逆者たちの情報を延々と流す訳にもいかず、それには英雄の話題にすり替えるのが最も効果的だった。
言い換えれば、中尉こそいい迷惑とも言えよう。だがこれにより、中尉の降格処分は取り消しとなったのである。

「これからも、護衛のほうはよろしくお願いします」
「はっ。一命に代えましても」
「……」
「……」
男ふたり、無言の時間が流れる。
「まあ、こんなもんかな……俺に言いたいことがあるんだろ？」
「はぁ、その……。アリサの件ですが」
「判ってる」
「一番の功労者であるはずの彼女が、東の宮にほぼ軟禁状態と言うのは」
「だから、判ってると言ってる」
「幸せに出来ないなら、さっさと諦めて下さい。アリサは自分が幸せにします」

「アリサを幸せに出来るのは俺だけだ！」
「絶対ですか？」
「ああ、絶対だ！」

爆破の直後、さすがのコージュ王子も力尽きて王宮病院に運ばれた。その為、アリサの処遇はカイヤ補佐官に一任されたのだ。アリサは秘書官を辞職して王宮から去ろうとしたらしい。だがそれは、許可されなかった。

理由はタカマ少尉らと同じだ。

「コージュ王子の子供を妊娠している可能性がある以上、王宮から出す訳にはいきません」

そんなこととは知らず、全く見舞いに来ないアリサに苛立ちすら覚えつつ……。王子が真相を知ったのは、つい昨日のことだった。

「……わかりました」

深いため息と共に、アヤカワ中尉は渋々承諾する。

「で、ものは相談なんだが……力を貸してくれるかな、英雄どの」

中尉を言い負かしたコージュ王子は、不敵な笑みを浮かべた。

☆。・‥＊‥・。★。・☆。・‥＊‥・。★。

ようやく、妊娠の可能性はない、と判明し、アリサは奥宮に呼ばれた。

「あえて、いつからとは聞かぬ。しかし、周囲の目もあろう。この度の働きに免じて、一族に類は及ばぬものとする」

国王の言葉を、アリサは頭を下げたまま黙って聞いていた。

「お前に恨みはない。だが身分の差は、後々不幸の種となる。どう

か、黙って身を引いて欲しい」

おそらく、王妃のことを思い出しているのだろう。それは悲しみに満ちた言葉だった。アリサは静かに頭を上げ、たった一言口にする。

「ありがたき、幸せ」

コージュ王子が責められないならそれでいい。全てがうやむやになり、アリサとの醜聞はやがて消え去るだろう。両親や妹たちに迷惑を掛けずに済むなら、これ以上は望むべくもない。

アリサが深く頭を下げた直後、後方からざわめきが広がった。

制止する護衛官を振り払い、姿を見せたのはコージュ王子だ。

怪我人とは思えないほど、全身から力が漲っている。黒い髪は春の陽射しを受け艶めき、軍服を彩る金の勲章が煌いた。さすがに、奥宮に立ち入るのにサーベルは身につけていない。

王子は思いのほか重傷ではなかった。にも関わらず、アリサには面会すら許されず……。退院前に彼女を王宮から追い出す予定だったに違いない。

「コージュ王子殿下といえども、陛下の許可なく奥宮に踏み込まれるのは……」

護衛官らは必死で止めようとする。

そんな彼らから王子を守るのはアヤカワ中尉だ。「申し訳ありません。王子のご命令ですから」そう言いつつ、双方の間に体を割り込ませる。

「無断で入りましたこと、深くお詫び申し上げます」

コージュ王子はアリサの隣に立ち、国王に頭を下げた。

「シンザキ秘書官、話は済みました。退出して結構です」

「あ……はい」

アリサに命じたのはカイヤ補佐官である。アリサはそれに従おうとしたが、コージュ王子に手首を掴まれ、引き止められた。

「国王陛下にお願いがあります。王位継承権と引き替えに、このシンザキ秘書官との結婚を認めて下さい」

あまりに堂々としたコージュ王子の態度に、一同目を見張った。アリサは止めて下さいと言いたいのだが、今日の王子にはそれを許さぬ気迫が漂う。

しかし、国王の返答は――「認めることは出来ない」

「ならば、王子の位を返上して王宮を出ます。私は臣下に下り、兄たちを補佐することに致します。――二十年間、王宮の片隅に置いて頂き、ありがとうございました。では、ごきげんよう」

丁寧な言葉とは裏腹に、王子の瞳には怒りの炎が映る。

「コージュ。お前は王妃の名に泥を塗るつもりか？　自らの命と引き替えにお前を産んだ、母に申し訳ないと……」

「――その台詞は聞き飽きた」

「何？」

「二十年間、毎日毎日誰かが俺に『亡き王妃のため』って言い続けた。おかげですっかり洗脳されてたよ。ちょっと考えれば判ることだったんだ。母上が俺に望むことなんて、たった一つだ、と」

少し間を置き、国王は尋ねた。
「それは……何だ」
「どんな逆風にも負けず、惚れた女を妻にしたような……。どれほど重い責任を背負っても、妻を守り続けようとした――父上みたいな男に、なって欲しかったんだろうな、ってね」
「殿下っ！　陛下の前でそのような言葉使いは……」
カイヤ補佐官が口を挟もうとするが、国王がそれを制した。
「母上に申し訳ないと思うのは俺じゃない。俺は？王妃の息子？じゃない。惚れた男に命懸けで尽くした母上の息子だから……アリサを選ぶ！」

☆。・：＊：・。★。

コージュ王子に手を引かれ、国王に礼をすることもなく奥宮の広間を飛び出して来た。不敬罪で逮捕されかねない行為だ。
「殿下！　殿下……あんなことを仰って。もし、本当に王宮を出ることにでもなれば」
アリサがそう言った途端、王子は急に足を止め振り返った。
「それは、王子じゃない俺は用無しってことか？　二十歳のガキに惚れられるのは迷惑か？」
「あの……」
「なんだ？」
「殿下は本当にわたしのことを……？」

アリサの質問に、コージュ王子は気が抜けたように頭を抱え込む。
だが次の瞬間、彼女は両腕を掴まれ体を揺さぶられた。
「愛してなきゃ、あんな狂ったみたいに抱くかよっ！　そう言うお前はどうなんだ？　今度、中尉を愛してるとか言ったら、俺は奴に決闘を申し込むぞ！」
真正面から覗き込んだ黒曜石の瞳に、確かな愛の光が宿っていた。王子の言葉は乱暴でも、決してアリサに嘘はつかない。この真っ直ぐな想いに応えるのに、どんな資格が必要だと言うのだろう。
アリサは五年分……いや、十四年分の想いを言葉にして、王子に伝えた。
「あ……いしてます。殿下のことを、心から愛しています。ずっと傍にいて下さい……どうか、わたしを」
この前の夜は拒否された。だが、アリサはもう一度、自分から王子の腕に触れる。
「お前は俺のものだ。誰にもやらない。一生、俺だけのものになれ。アリサ――お前のことを死ぬほど愛している」
「――はい」
王宮だけでなく、例えトーキョー王国を追放されても、コージュ王子と共にいたい。アリサはもう、自分の想いを偽ることは出来なかった。
アリサの唇に優しいキスが降って来る。しだいに、コージュ王子の手が腰に回り、覆い被さるような激しい口づけに変わり……。

二人の背後で咳払いが聞こえた。
カイヤ補佐官が何とも言えない顔をしてその場に立っている。
「陛下のお言葉です。――王宮に留まり、父親を越えて見せるように、と」
それは、アリサを妃にすることで生じる問題を、コージュ王子自身で解決するように命じた。いわば、結婚のお許しであった。王太子はもう一度四人の王子の中から選ぶという。
東の宮で育まれた、幼く無器用な秘密の恋――そこから？秘密？の文字が外された。
コージュ王子に手を差し伸べられ、アリサは一歩踏み出す。
――未来は光に溢れていた。

～ｆｉｎ～

第３５話　未来に続く光（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

もっと恋愛メインになる予定だったんですが。
どうして王宮サスペンス風な展開になるのか？？？（＾＾；）
登場人物の行動を追いかけて行ったら、こういう作品に仕上がってしまいました。

でも、４章のコージュ王子はカッコいいなぁと、自画自賛です（笑）
結婚まではまだまだ大変そうですが、たまにはこういう終わりもいいかな、と思っております。

最後に、
数ある作品の中から拙作をご覧いただき、本当にありがとうございました。
またお目に留まりましたら、よろしくお願い致します（平伏）

２０１１／１／１５　Ｓｈｉｋｉ（御堂志生）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6374o/

Tokyo王子

2011年4月6日01時29分発行